

宮城県多賀城跡調査研究所年報1993

多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

特別史跡多賀城跡附寺跡の調査が開始されてから 33 年、当研究所が昭和 44 年に県立の研究所として設立され、計画的に調査をはじめて 24 年が経過しました。

この間、研究所では、五ヶ年計画を積み重ねる方法で、所定の目的をもって調査を実施してまいりました。その結果、調査の進展にともない多賀城の解明も進み、環境整備事業の促進ともあいまって史跡の保存・活用などその重要性が広く県民をはじめ多くの人々にご理解いただけるようになりました。

平成元年からは、第 5 次 5 ケ年計画のもと、外郭東門の南西一帯、多賀城で最も広い平坦面の確保出来る大畠地区の調査を計画し、この地区における官衙の構成と変遷を解明することとしました。

平成 5 年度は、第 5 次 5 ケ年計画の最終年次に当たり、第 64 次調査として大畠地区の北部中央、外郭東門の西側一帯の調査を実施しまし心その結果、外郭東門から城内にのびる道路遺構、さらに大畠地区の官衙を区画する施設と考えられる塀の確認など今後の調査につながる大きな成果を上げることが出来ました。

本書はそれらの成果をとりまとめたものです。

調査全般にわたり、多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生方並びに文化庁のご指導、多賀城市をはじめ関係各方面の方々の多大のご協力に対し心から感謝申し上げる次第であります。

本報告書が東北古代史解明の資料として、広く活用され、遺跡の保存・活用に寄与することが出来れば幸いであります。

平成 6 年 3 月

宮城県多賀城跡調査研究所

所長 千葉 景一

目 次

I. 調査の計画	1
II. 第 64 次調査	3
1. 調査の目的	3
2. 調査経過	6
3. 基本層位	9
4. 発見した遺構と遺物	9
5. 考察	41
III. 第 58・60 次調査資料の追加報告	50
IV. 現状変更に伴う調査	54
V. 付章	78
1. 関連研究・普及活動	78
2. 研究成果刊行物	80
図版	81

例 言

1. 本書は平成 5 年度に実施した多賀城跡第 64 次調査の成果とともに、第 58・64 次調査資料の追加報告、現状変更に伴う調査成果を収録したものである。
2. 発掘調査の測量原点は政庁正殿跡(SB150B)の身舎南側柱列の中央に埋設してある。原点と政庁南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準点、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線に定めた。南北の基準線の方向は真北に対して $1^{\circ} 04' 00''$ 東に偏っている。
3. 政庁跡の遺構期と瓦の分類基準については、宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡—政庁跡本文編一』1982 による。
4. 土色については『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄:1976) を参照した。
5. 本書の作成にあたっては千葉景一・進藤秋輝・丹羽茂・真山悟・佐藤和彦・柳沢和明・白崎恵介の協議・検討を経て、執筆・編集は I を丹羽・柳沢、II を柳沢、III を佐藤・柳沢、IV・V を丹羽が担当した。このうち、III、IV、V. 第 60 次調査出土土器の墨書き測定は鈴木拓也が行った。また、現状変更に伴う調査の柱材樹種同定は東北大学植物園内藤俊彦氏に依頼した。写真については宮城県教育庁文化財保護課阿部恵氏、鉄製品の X 線写真・精落としについては東北歴史資料館保存科学研究所手塚均氏の協力を得た。
なお、これらの作業を内海薫・三浦幸子・管野礼子・佐藤良江・千田玲子・高橋由華子・酒井亜希子・鈴木敬子・鈴木文子・佐藤友子・小幡悦子・高橋幹子・佐藤篤が援けた。

I. 調査の計画

平成5年度は、第24回多賀城跡調査研究指導委員会（1988）で承認された第5次5か年計画の5年目に当たる。計画では第64次調査が大畠地区、第65次調査が城前地区であったが、城前地区については南門一政庁間整備計画の進捗状況に合わせて実施することにし、大畠地区に振り替えた。また、大畠地区での2現場分の調査区が隣接しているため、両者を併せて第64次調査として実施した。

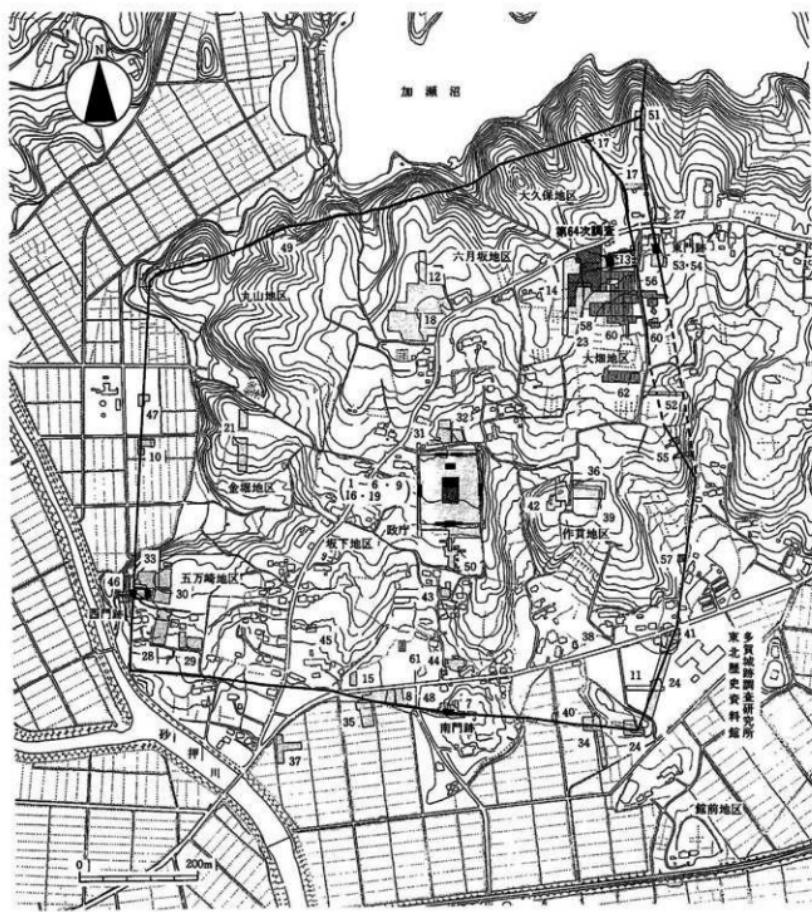
大畠地区は東西約200m・南北約300mと最も広い平坦地が確保できる城内最大の官衙で、第4次5か年計画の第53次調査から、外郭東門を含めた大畠地区全体の解明に主眼を置いて的面的な継続調査を実施してきている。

今年度の第64次調査は、大畠地区的実務官衙の北部中央に調査区を設定し、北辺区画施設、城内道路跡とその両側の状況などの解明を主な目的として実施した。また、これまでに検出していた官衙内部の八脚門、その南西の南北棟についても補足調査を行なった。

本年度の調査地区・面積・予算、および第5次5か年計画は表1のとおりである。

年次	発掘調査次数・対象地区	調査面積		予算
平成元年度	(1) 第56次調査 大畠地区北半部 (2) 第57次調査 外郭東辺南半部	1,550 m ² 500 m ²	2,050 m ²	29,000 千円
平成2年度	(1) 第58次調査 大畠地区中央部 (2) 第59次調査 大畠地区中央部 東側	1,470 m ² 900 m ²	2,370 m ²	30,000 千円
平成3年度	(1) 第60次調査 大畠地区中央部 (2) 第61次調査 鴻ノ池地区	1,450 m ² 150 m ²	1,600 m ²	30,000 千円
平成4年度	(1) 第62次調査 大畠地区南半部 (2) 第63次調査 大畠地区北半部	1,100 m ² 1,700 m ²	2,800 m ²	39,000 千円
平成5年度	(1) 第64次調査 大畠地区	3,000 m ²	3,000 m ²	35,000 千円
合計	9地区		11,820 m ²	163,000 千円

表1 多賀城跡発掘調査第5次5ヶ年計画



第1～4次5ヵ年計画



第5次5ヵ年計画 (~4年度)



第64次調査

第1図 多賀瓦窯跡調査実施地区

II. 第 64 次 調査

1. 調査の目的

大畠地区は外郭東門の南から西に展開する標高 40~50m の緩やかな斜面で、ほぼ平坦である。西に隣接する六月坂地区との間は南から大きく入る沢、南に隣接する作貫地区とは西から入る沢によって分かれ、東は外郭東辺、北は外郭東門によってその範囲がほぼ限られている。これらの自然地形や施設などによって範囲を限られ、大畠地区では東西約 200m・南北約 300m と城内では最も広い平坦地が確保できる（第 1・2 図）。

第 4 次 5か年計画の第 53・54 次調査では、奈良時代の S B 1762 外郭東門を発見した。この調査は奈良時代と平安時代で外郭東門の位置が大きく変更されていることを明らかにするなど大きな成果を上げ、大畠地区の面的な継続調査に踏み切る一つの機会となった。

第 5 次 5か年計画では大畠地区を主な対象として、第 56・58~60・62・63 次調査を実施してきた。その結果、以下のように大畠地区の官衙の規模・年代・変遷など多くの事柄が明らかになった（第 2 図）。

①約 100 棟の掘立式建物跡が検出され、これらの多くは 9~10 世紀のものであることが判明した。そして官衙が 8 世紀中頃から 10 世紀にかけて 7 段階に変遷し、奈良時代にはきわめて希薄であり、9 世紀初頭以降に整備充実していることが把握された。

②平安時代の大畠地区官衙の北端と南への延びが押さえられた。官衙を構成する建物の北端は平安時代の S B 307 外郭東門に「匁」状に取り付く S F 300 築地から南に約 30m 離れて始まり、そこからさらに南へ約 170m 以上延び、城内最大の官衙であることが明かとなった。

面的な継続調査を実施してきている第 5 次 5か年計画ではこれまでに以上のようない成果を上げたが、大畠地区ではそれ以前にも調査を行なっている。

第 1 次 5か年計画の第 13・14 調査、第 2 次 5か年計画の第 23 次調査では、平安時代の S B 307 外郭東門から S B 1000 外郭西門に通じると見られる城内道路をはじめ、道路に面する S B 707 八脚門、その南に 2 棟並ぶ桁行 6 間、梁行 2 間の S B 807・711 南北棟、S B 707 八脚門よりも新しい S D 706 溝、道路の北と南に展開する堅穴住居跡群などを検出した。そして S B 707 八脚門、S B 807・711 南北棟については奈良時代のもの、堅穴住居跡群については平安時代のもの、S D 706 溝については六月坂地区の第 12・18 次調査で検出していた S D 238 溝に通じる政府第Ⅲ期のものと位置付けた。

第 13・14・23 次調査の当時は、大畠地区的公有化が進まず、調査も部分的で、調査期間・

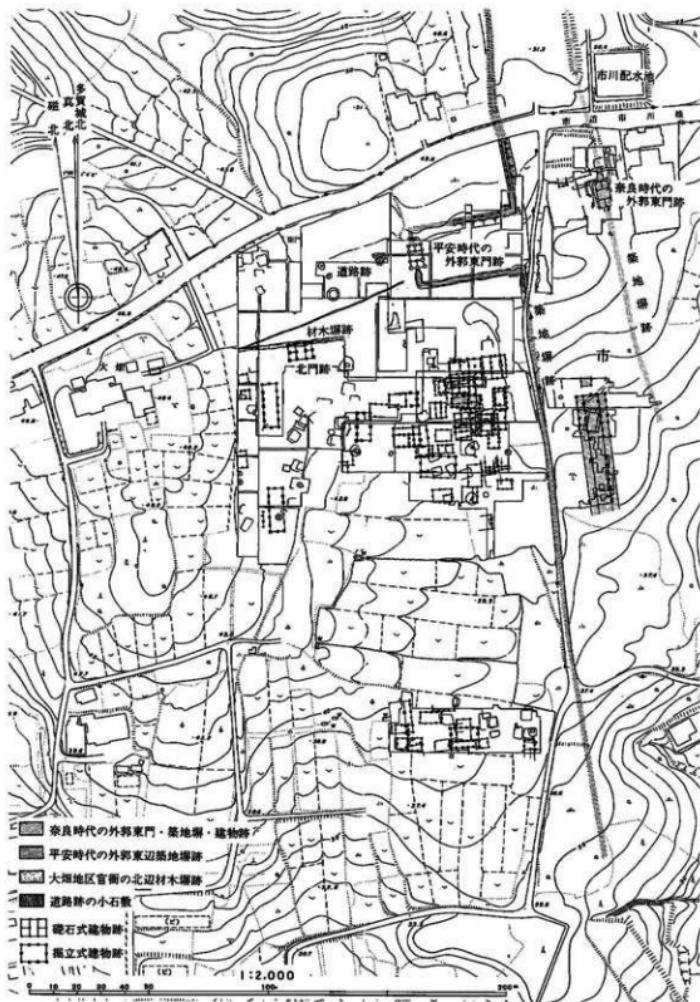
予算も現在よりも限られた少ないものであった。また、奈良時代の S B 1762 外郭東門が未発見で、現在は平安時代初期に作られたことが判明している S B 307 外郭東門を奈良時代のものであると見ていた。また、この当時はトランシットとスチールテープで政府原点から長距離をトラバース測量し、基準点を設置していた。一方、第5次5か年計画では、東門西方に高精度で埋設した測量基準点からタキオメーターを使って測量しているため、精度が飛躍的に向上した。

また、第5次5か年計画での面的な継続調査の進展に伴って、第13・14・23次調査成果の位置付けや遺構・遺物の細部について再検討する必要性も一部生じてきた。

たとえば、大畠地区の官衙が奈良時代ではきわめて希薄であり、平安時代になってから整備充実していることが次第に明らかとなり、奈良時代に位置付けた S B 707 八脚門、S B 807・711 南北棟についても年代や性格について再検討する必要性が生じた。また、S B 707 八脚門よりも新しい S D 706 溝については第56・58次調査で S B 307 外郭東門に向かって北に折れ曲がることが判明した。城内道路の南側溝の可能性も考えたが、路幅が広くなりすぎることから、再検討する必要があった。そして、第14次調査で検出し、城内道路の道路舗装かと考えた S H 314 瓦礫敷き遺構、それに続く道路の構造、道路の両側での状況も不明確であった。

そこで、今年度実施した第64次調査では、以下の諸点の解明を主な目的とし、併せて測量誤差の補正を行なうこととした。

- ①大畠地区官衙の北辺区画施設の解明。第13・14・23次調査では城内道路跡の南側で S B 707 八脚門、それよりも新しい S D 706 区画溝を検出していたが、区画施設の構造・変遷・年代などに不明確な点があったので、再検討する。
 - ②第5次5か年計画で、大畠地区的官衙を構成する掘立式建物の多くが9世紀代であることが判明してきたことから、これまで奈良時代と考えてきた S B 707 八脚門、およびその南西に柱筋を揃えて並ぶ S B 807・711 南北棟についても年代を再検討する。
 - ③S B 307 外郭東門から西に延びる城内道路跡は、第13・14次調査で部分的な検出に留まっていたので、その規模・年代、大畠地区官衙との関係などを解明する。また、城内道路の北側に位置すると考えられる堅穴住居跡群の東への延びについても明らかにする。
- 以上のような問題を解明するために、S B 307 外郭東門の西側一帯を対象として、既に査を行なった第14・23次調査区の一部を含めた約3,000m²の範囲に調査区を設定して、第64次調査を実施した。



第2図 外郭東門・大畠地区官衛の主要遺構

2. 調査の経過

第62次調査は4月19日より開始し、測量基準点と調査区の設定、器材搬入を行なった。調査区が広いため、調査区を北東部、中央部、南西部の3箇所に大きく分け、南西部、北東部、中央部の順で調査を進めた。

南西部は4月23日より表土除去を開始し、5月11日に表土除去を終えた。そして、SB807南北棟の再検討に入り、5月19日より平面図を作成し、5月25日に終えた。北東部は5月13日より表土除去を開始し、5月31日に表土除去を終え、遺構検出、精査を引き続いて行なった。SB807南北棟については柱位置を前回よりもかなり限定でき、柱間寸法も訂正された。また、柱穴掘方よりロクロ調整の土師器甕小破片、柱抜取穴より須恵系土器坏小破片、柱痕跡よりロクロ調整の土師器坏小破片と政府第IV期の平瓦IIIC類が出土したことから、奈良時代の建物ではなく、9世紀後葉から10世紀前葉にかけて存続した建物であることが明らかとなった。

北東部では多くの溝・土壤を検出したが、古代の遺構は少なく、多くはそれ以降のごく新しいものであった。

また、中央部は6月18日より表土除去を開始し、7月23日に表土除去を終えた。引き続き遺構検出を行なったが、古代の遺構は希薄であった。中央部では23次調査で検出していたSB707八脚門、SD706溝の再検討を8月23日より行ない、平面図・断面図を作成した。SB707八脚門については各柱穴の柱位置を特定でき、柱位置の真下にあたる掘方の底面に礫を入れている状況を明らかにできた。また、SD706溝については溝ではなく、材木堆とその抜き取り溝であり、大畠地区の実務官衙の北辺区画施設であることを明らかにできた。また、平安時代のSB307外郭東門の西側に隣接するSH314瓦礫敷き遺構については、9世紀後半の城内道路の路面と考えられることを明らかにできた。また、SD2255・2249A・2249B溝を検出し、城内道路の南側道路側溝と判明した。

これらの遺構、およびその他の遺構の精査と併行しながら、10月6日より全体の平面図を作成し始め、10月25日までに調査区全体の平面図をほぼ作成し終えた。その後、各建物跡、その他の溝、土壤などの補足調査、写真撮影などを行い、12月9日までに調査を終了した。

なお、9月9日には多賀城跡調査研究指導委員会の現地指導を受けた。そして、11月18日に報道機関に対して第64次調査の成果を公表し、11月20日に現地説明会を実施した。



第3図 第64次調査区全体図

3. 基本層位

第1層：表土。しまりのない褐色～灰褐色シルト。

第2層：褐色シルト。S X2250 城内道路のS X314 小石敷路面、S D2249・2255 南側溝の上を覆う自然堆積層。E 210～240、N 360～380 では第3層の上を覆う。

第3層：暗褐色粘質シルト。S X2250 城内道路の路面を覆う自然堆積層。E 210～240、N 360～380 にかけて分布し、第2層に覆われる。14次調査の黒褐色土に相当。

4. 発見された遺構と遺物

今回の調査で新たに検出した古代の遺構にはS K2151～2154 土壌などがある。その他に土壌、溝などを多く検出したが、その多くは近代以降のごく新しいものである（第3図）。

また、前回の調査で部分的な検出に留まり、今回の調査で全容が判明した主な遺構には、S X2250 城内道路跡（南側溝のS D2249A・2249B・2255 溝、路面のS X314 小石敷路面）、S K345 大土壌、S D315 環状溝、S D704 溝がある。城内道路については、南側溝の全体が検出され、小石敷路面とともに道路を構成する遺構が具体的に判明したことから、新たに遺構登録した。S X314 小石敷路面はS H314 瓦礫敷き遺構と登録していたが、城内道路の路面であることがさらに確実となったので改名し、未報告だった所属時期を検討する。S D704 溝はS K704 土壌と報告していたが、溝であることが判明したので改名する。

また、補足調査を行なった遺構にはS B707 八脚門、S B807 南北棟、S D706 溝がある。このうち、S B707 八脚門・S B807 南北棟については、柱位置をかなり限定でき、柱間寸法も訂正された。S B807 南北棟からは遺物が得られた。また、S D706 溝は材木塀であることが判明したので、S A706 材木塀跡と改名する。

また、主に出土遺物の再検討を行なった遺構にはS E316・317・715 井戸跡がある。S E316・317 井戸跡は城内道路の延長上に作られた井戸であり、城内道路ひいては大烟地区官衙の終末に係る重要な遺構である。S E715 井戸跡は、今回の調査区からはずれるが、S B807 南北棟と柱筋を揃えて並ぶS B711 南北棟よりも新しい井戸で、S B807・711 南北棟の廃絶年代と絡む。また、これらの年代的位置付けと関連し、政庁跡S K78 土壌出土土器群について、観察して図面をトレースしなおした。

なお、今回の補足調査で柱位置をかなり特定できたS B807 南北棟を見ると、第14次調査での測量が南に約41cm、東に約30cmずれていることが判明した。第12～14・23次調査区は同一基準点を用いて測量しているため、この誤差で全体図を修正した。

これらの遺構について検討するが、図面・出土遺物などの事実記載は本年報が優先する。

(1) 挖立式建物跡

S B 707 八脚門跡（大畠地区官衙北門；第4・5図）

東西3間、南北2間の掘立式八脚門である。SA706 材木痕跡と重複し、これよりも古い。地山面で12個すべての柱穴を第23次調査で検出していた。今回、柱穴・柱痕跡を再調査し、柱穴位置を前回よりも確定できた。また、新たに2箇所で柱痕跡を確認した。

平面規模は南側柱列で見ると、桁行総長が9.93m(33.5尺)で、柱間は中央間が4.02m(13.6尺)、東西両脇間がそれぞれ2.96m(10尺)である。梁行総長は西妻で見ると6.29m(21.3尺)で、柱間は北より南に3.09m(10.4尺)、3.2m(10.8尺)である。

門の方向は南側柱列で見ると、東西基準線に対して東で北に約7°偏する。また西妻で見ると、南北基準線に対して北で西に約5°偏し、この八脚門はわずかに歪む。

柱穴は一辺1.1～1.7mで1.3m前後のものが多い。深さは40～120cmで、多くは70cm前後であるが、棟通りの中央間の柱穴2個が40～50cmと浅い。

柱穴の埋土は地山黄褐色～明黄褐色粘土ブロックを多量に含む褐色粘土と黄褐色粘土が5～15cmの互層となっている。

柱穴にはいずれも切り取り穴が認められる。

南側柱列・西妻・棟通りの中央間の計7ヶ所で柱痕跡を確認した。柱痕跡は径約40cmである。また南東隅柱穴の柱痕跡には木質が一部残っていた。

7ヶ所（南東隅柱を除く3ヶ所の南側柱、東側柱列の棟通り下、北東隅柱を除く3ヶ所の北側柱）の柱穴では、柱痕跡および柱推定位置の下部から5～40cmの根石が数個置かれた状態で確認された。柱の沈下を防ぐためのものとみられる。

八脚門の両脇には区画施設が取り付いていたと考えられる。しかし、上部が削平され、明らかにしえなかつた。

また、第23次調査でも今回の調査でも遺物は出土しなかつた。

S B 807 建物跡（第6～8図）

南北6間、東西2間の掘立式の南北棟である。地山面ですべての柱穴を第23次調査で検出していた。今回の調査で柱穴と柱位置を再検討し、柱位置を前回よりも確定できた。

また、第23次調査では南西隅柱穴の位置で重複するS I 752堅穴住居跡との新旧関係を述べていなかつたが、平面図ではS I 752堅穴住居跡の方が新しいように図示していた。再検討した結果、重複する位置にある南西隅柱穴の抜取穴に落ち込んだひと抱えもある巨礫が堅穴住居跡北辺よりも外に張り出し、床面よりも約50cm上に突き出していた。S I 752堅穴住居跡がS B 807建物跡よりも古いと見られる。

平面規模は桁行が西側柱列で総長 17.73m (59.9 尺)、柱間は北より 2.92m, 2.93m, 3.12m, 2.75m, 2.97m, 3.02m で、梁行が北妻で総長 6.02m (20.3 尺)、柱間は西より 2.91m, 3.11m である。実測値にややばらつきがあるが、柱間は桁行・梁行とも 10 尺等間で計画されたと推定される。方向は西側柱列で見ると、北で西に約 3° 傾する。

柱穴は 1.3 × 0.9m 前後の長方形を基調とする。深さは最大 1.1m で、柱穴周辺の地山の状況に応じて柱穴の深さが決定され、柱の底面レベルはほぼ一定している（第 8 図）。柱穴の埋土は周囲の地山が柱穴によって異なるため一様ではないが、基本的にはその柱穴を掘って出土を突き固め、互層となっている。たとえば、軟質な凝灰岩岩盤を掘り下げた柱穴では地山凝灰岩ブロックを多く含む明褐色粘土層とあまり含まない明褐色粘土層の互層となり、地山礫層を掘り下げた柱穴では地山砂礫を特に多く含む褐色粘土層とあまり含まない明褐色粘土層の互層となっている（第 7・8 図）。

すべての柱穴では柱切取穴が掘られ、柱が切り取られている。南東隅柱穴を除くすべての柱穴で柱痕跡を検出した。柱痕跡の大きさは径約 27cm である。

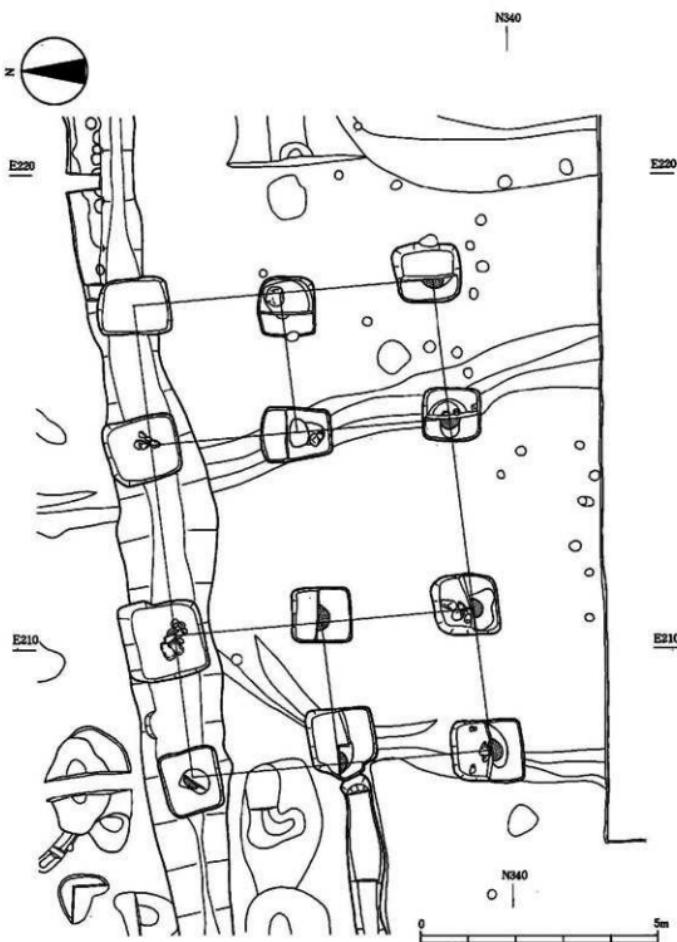
第 23 次調査では掘方から政府第 I 期の平瓦、政府第 II 期かと思われる丸瓦の破片、須恵器壺・土師器甕の小破片、柱切取穴から政府第 II 期の平瓦、ヘラ切り後に回転ヘラケズリされた須恵器壺、回転糸切りかと思われる須恵器壺の破片が出土していた。今回の調査では、掘方からロクロ調整の土師器甕体部破片、政府第 II 期の平瓦 II B 類（第 9 図 2）、切取穴から須恵器壺の底部・体部破片、ロクロ調整の土師器甕・壺体部破片、政府第 II 期の焼けた平瓦 II B 類、須恵器蓋体部破片、刀子（第 9 図 1）、柱痕跡から政府第 IV 期の平瓦 II C 類（第 9 図 3）、ロクロ調整の土師器壺体部小破片などがそれぞれ少数出土した。

（2）材木堀跡

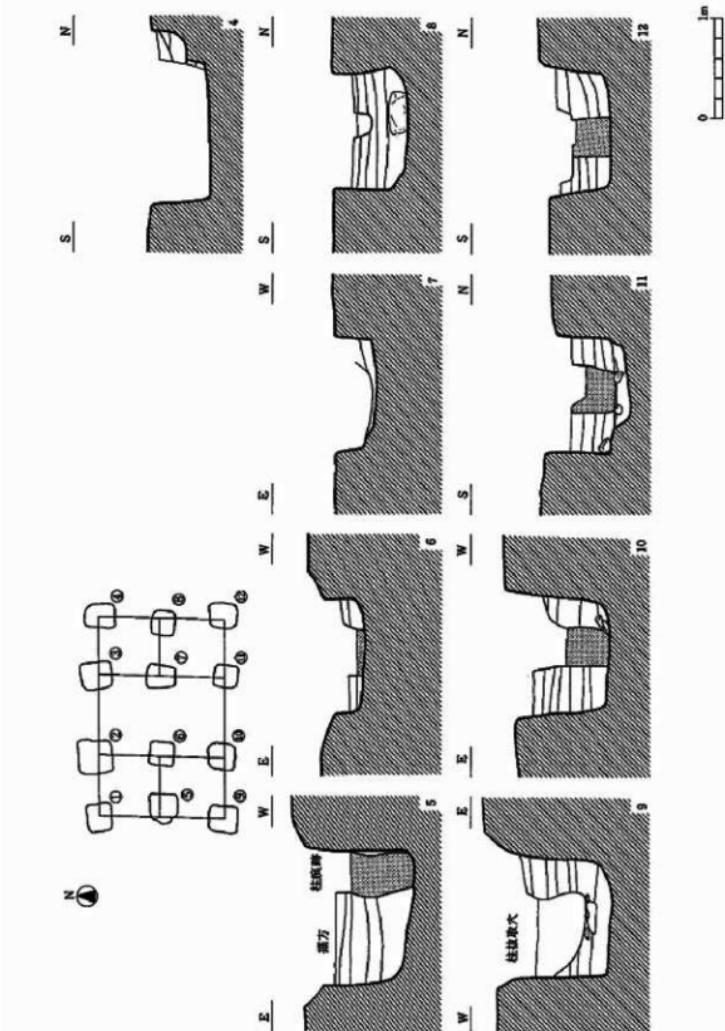
S A706 材木堀跡（大畠官衙北辺区画施設：第 3・10・12・13 図）

第 23・56・58・60・63 次調査で S D706 溝と報告してきた遺構である。また、この溝の性格については第 12・14・23 次調査では地域を区画する溝、第 56・58 次調査では城内道路の南側溝と考えていた。今回の調査の結果、材木堀跡とその抜取溝であることが判明したので、「S A706 材木堀跡」と今後呼ぶことにする。

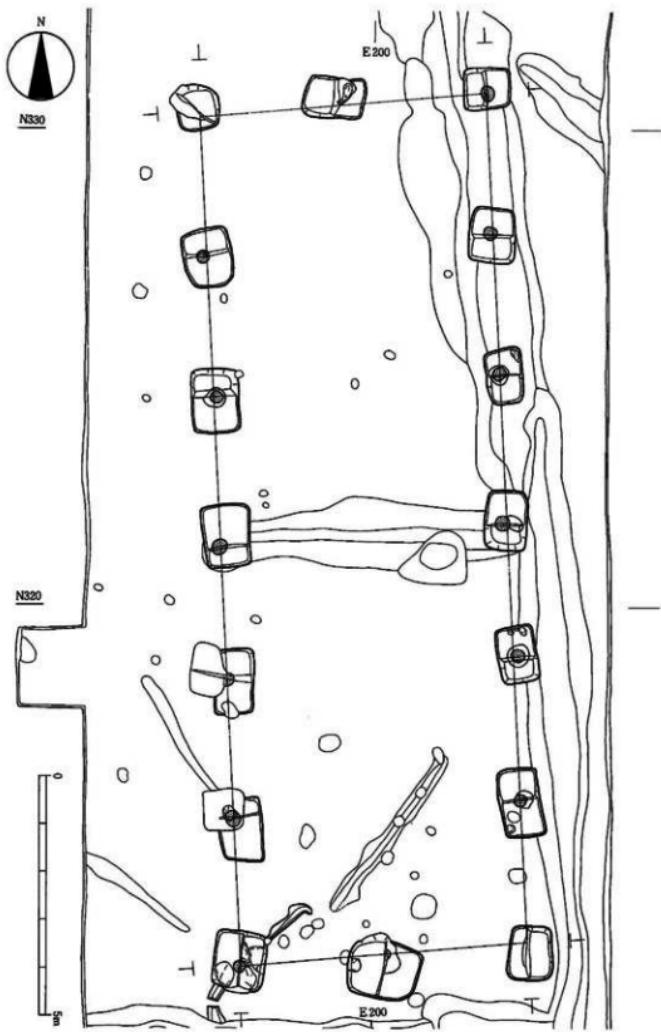
S B707 八脚門、S D2249 溝と重複し、S B707 八脚門よりも新しく、S D2249 溝よりも古い（第 3・5・13 図）。また、S K345 大土壤と隣接するが重複しない。なお、第 14 次調査で S D344A・B 溝として報告しているものは、S D344A 溝が材木堀の掘方、S D344B 溝跡が S D2249 溝にそれぞれ対応すると考えられ、S D344A・B 溝は部分的ではあるが灰白色火山灰（年報では「灰白色粘土」と記載）に覆われている。



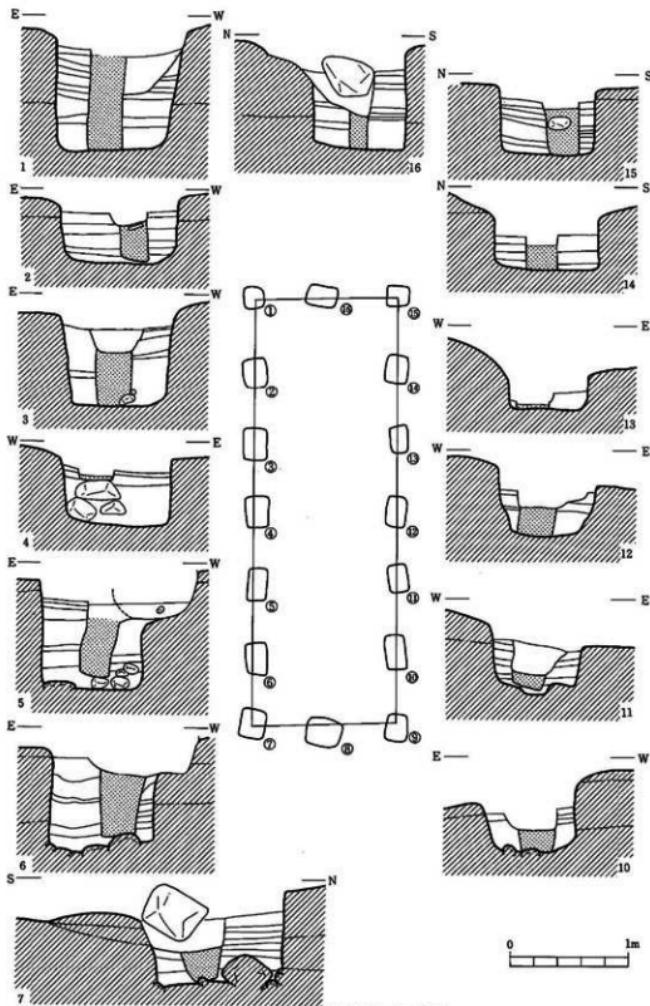
第4圖 SB707 八腳門跡平面圖



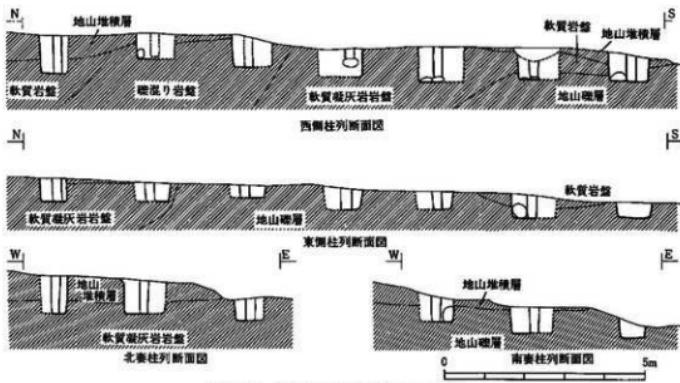
第5図 SB707 八脚門跡断面図



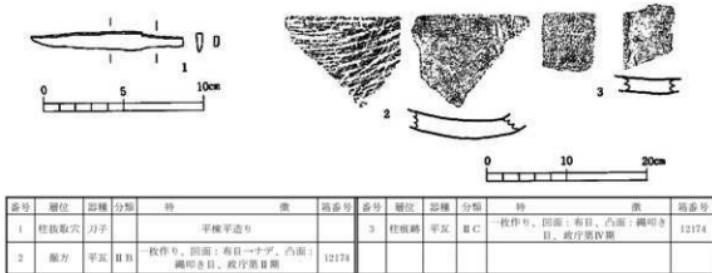
第6図 SB807 建物跡平面図



第7図 SB807 建物跡断面図 (1)



第8図 SB807 建物跡断面図(2)

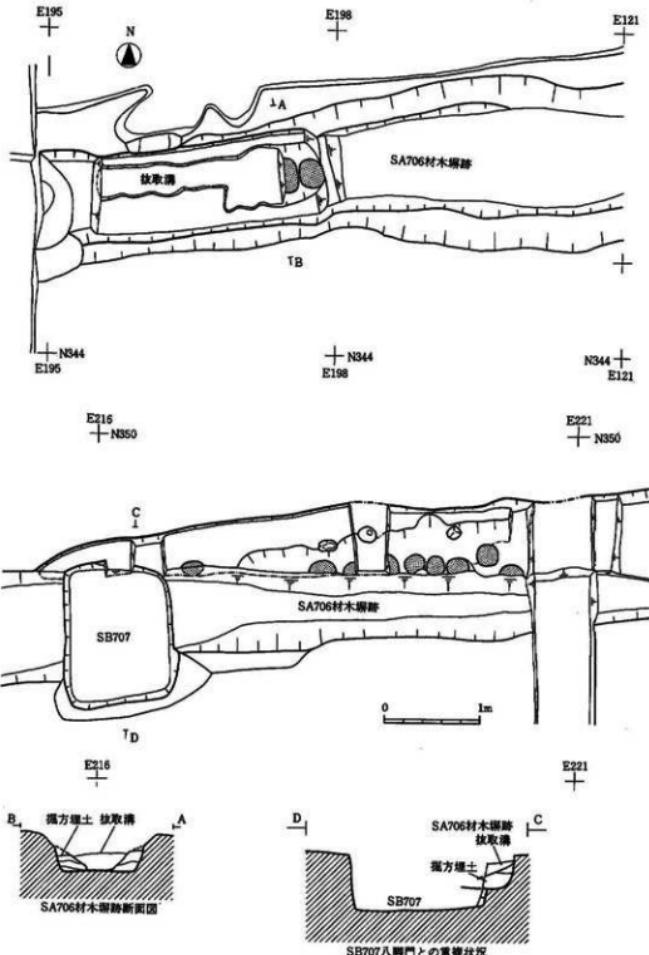


第9図 SB807 建物跡出土遺物

掘方は幅約 0.9~1.0m、深さ約 0.4m、断面U字形で、長さ約 65m検出している。掘方の底面付近まで大きく抜取溝が入っていたため、これまで溝としてきたが、今回の調査で材木柱列を調査区の西端付近と東寄りでかろうじて検出した。抜取溝で壊されているため、材木柱列の残りは極めて悪い。柱の径は約 20cm で、丸材を本来は隙間なく立て並べた構造をしていたと考えられる。

材木塀の方向は基本的には東西方向だが、調査区の東側ではほぼ直角に北に折れ曲がり、SB307 外郭東門に「[]」字形に取り付く SF300 築地の南西部に接続していたと見られる。築地に向かって折れ曲がる箇所を除けば、方向は東で北に約 7° 傾する。

また、材木塀は SB707 八脚門の方向とほぼ一致し、かつ SB807 八脚門の北側柱列と同

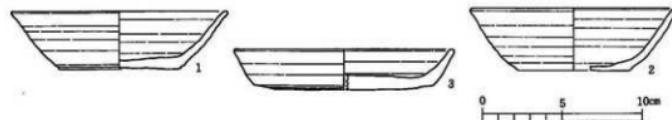


第 10 図 SA706 材木堀跡

位置にある。したがって、本材木堀跡は大畠地区官衙の北辺区画施設であり、S B 807 八脚門に取り付く大畠地区官衙北辺区画施設を作り直したものであると推定される。また、この時には大畠地区官衙の北門の位置が変更された可能性もある。

本材木堀のさらに西への延びは不明確であるが、S B 307 外郭東門の西方約 300m の第 12 次調査区で検出した S D 238 溝に接続すると第 14・23 次調査では見ている。大畠地区官衙の西への広がりを実証する最大の根拠となるだけに、ここまで材木堀が続くかどうかは再検討を要する。いずれにしても、大畠地区官衙の北辺区画施設の存在の可能性はこれまでにも示唆してきたことだが、それが遺構の上で実際に確認されたことの意義は大きい。

抜取溝からは土師器・須恵器が少数出土した。須恵器には底部がヘラ切りの壺 3 点（第 11 図 1・2）、手持ちヘラケズリの壺 2 点（第 11 図 3）の他、甕・壺の破片がある。土師器にはロクロ調整の坏体部破片、ロクロ使用の有無不明の甕体部破片がある。掘方からは遺物は出土していない。



番号	種類	器種	特徴	治番号	番号	種類	器種	特徴	治番号
1	須恵器	壺	底部：ヘラ切り	12167	3	須恵器	壺	底部：系切り一手持ちケズリ	12167
2	須恵器	壺	底部：ヘラ切り	12167					

第 11 図 SA706 材木堀跡出土遺物

(3) S X2250 城内道路跡

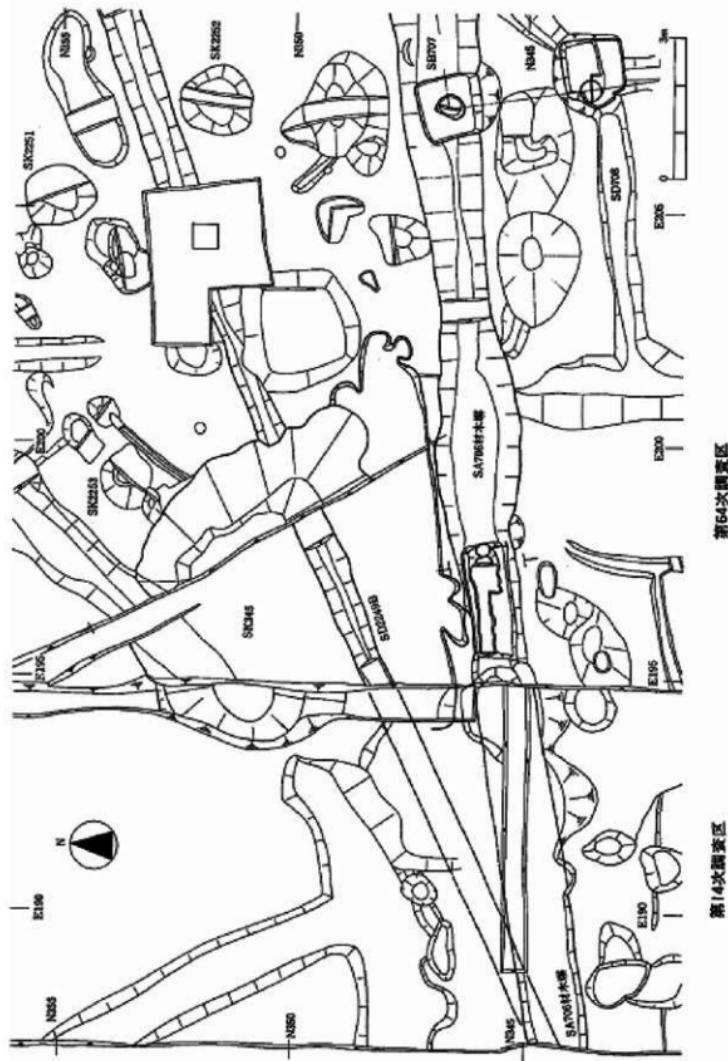
S D 2249 溝【S X2250 城内道路南側溝】(第 3・12・13 図)

新旧 2 時期あり、古い溝を S D 2249A 溝、新しい溝を S D 2249B 溝、両者を併せて S D 2249 溝と呼ぶことにする。

調査区中央東側では第 2 層下の地山面で検出し、中央部では第 3 層下の地山面で検出した。重複状況から見て、S K 345 大土壙よりも新しい。また、第 14 次調査の発掘所見によれば、S A 706 材木堀跡と重複して、これよりも新しい（第 12・13 図）。

S D 2249B 溝は幅約 0.9m、深さ約 30cm の断面 U 字形の溝で、S B 307 外郭東門の西側柱列から 4 m 離れた所から南西に向けて長さ約 60m 検出した。第 13・14 次調査区を加えると長さ約 74m 検出したことになる。直線的に延び、方向は東で北に約 25° 傾する。

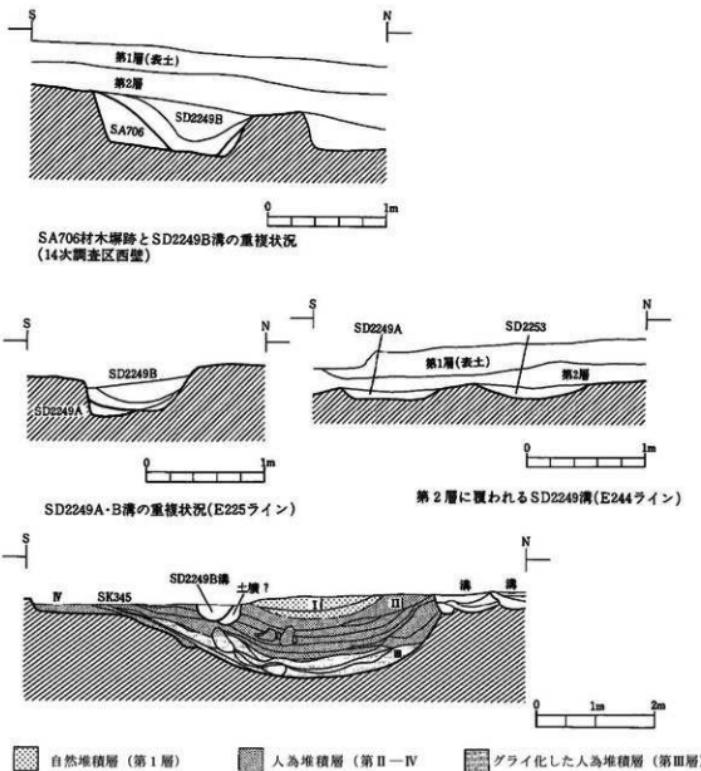
S D 2249A 溝は幅約 0.9m、深さ約 30cm の断面 U 字形の溝で、調査区中央東側で長さ約



第12図 調査区西側の主要造構

34m検出した。SD2249B溝とほぼ重複し、規模・方向は同じである。

S B 307 外郭東門との位置関係から、S B 307 外郭東門の南側に取り付く S F 300 築地に接続すると見られること、直線的に延びる溝であることから、城内道路の南側溝と考えられる。

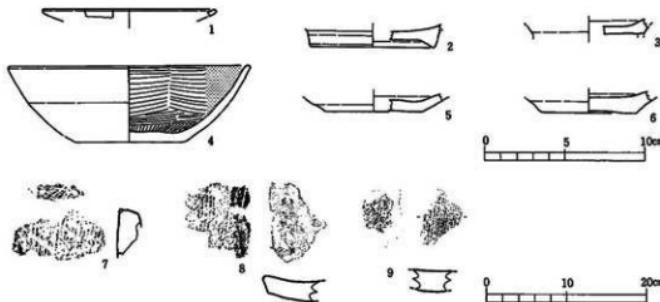


第13図 SA706 材木堀跡・SD2249 溝・SK345 土壌の重複状況

S D2249B 溝の出土遺物には、須恵系土器、土師器、須恵器、瓦がある。破片資料が多く、図示できるものは少ない。須恵系土器には高台皿口縁部小破片（第14図1）、高台坏高台部破片（第14図2）が各2点ある。土師器にはロクロ調整の土師器坏・甕があり、坏には回転糸切り無調整のものが4点、手持ちヘラケズリのものが2点（第14図4）ある。また、須恵器には坏・高台坏・甕・壺があり、坏には回転糸切り無調整のものが3点（第14図5・6）、回転ヘラケズリのものが1点ある。瓦には軒平瓦、平瓦、丸瓦があり、軒平瓦には鋸歯文の変形が1点（第16図6）、平瓦には平瓦II C類（政府第IV期）が2点（第14図7・8）、II B類が31点、IA類1点ある。

S D2255 溝 [S X2250 城内道路南側溝] (第3・13図)

幅約0.9m、深さ約30cmの断面U字形の溝で、調査区中央東側、第2層下の地山面で長さ約14m検出した。西側が南にやや曲がるが東側は直線的に延び、方向は東で北に約7°偏する。S D2249 溝と重複するが、削平されて新旧関係は不明だった。遺物は出土しなかった。S D2249 溝との位置関係から見て、城内道路の南側溝の可能性が高い。



番号	種類	器種	特徴	地番号	番号	種類	器種	分類	特徴	地番	地番号
1	須恵系土器	高台皿	口縁部破片、胎土微織、黄灰色	12167	6	須恵器	坏		底部：回転糸切り（右）		12174
2	須恵系土器	高台坏	底面破片、胎土微織、底黄灰色	12167	7	瓦	軒平瓦		鋸歯文の変形		12174
3	須恵系土器	高台坏	高台残片、胎土微織、洗青灰色	12167	8	瓦	平瓦	II C	一枚作り、凹面：布目、凸面：調叩き目、政府第IV期		12174
4	土師器	坏	底部：手持ちケズリ、放射状へらミガ年、内面：黒色処理	12167	9	瓦	平瓦	II C	一枚作り、凹面：布目、凸面：調叩き目、政府第IV期		12174
5	須恵器	坏	底面：回転糸切り（右）	12167							

第14図 SD2249B 溝跡出土遺物

S X314 小石敷路面 [S X2250 城内道路路面] (第3・16図)

S B307 外郭東門のすぐ西側の東西約10m、南北約8mが残りのよい部分である。用いられたのは主に小石で、次いで瓦片がやや多く、その他に須恵器甕、土師器甕・坏の破片もごく少量用いられている。石は径10~15cm程のものも若干用いられるが、5cm前後の偏平な小石が主体である。隙間に直径1~2cmの小礫を詰めている。石敷の上面は平坦で、北から南にかけて約5°傾斜する(第16図)。北側の箇所で地山岩盤が急激に立ち上がりことから、岩盤を削平して北側よりも低くし、北から南にかけて緩やかに傾斜する平坦面を造成していることが窺える。

平坦面を造成し、その上に小石・瓦片を敷き詰めていること、S B307 外郭東門の西隣に位置することから、S B307 外郭東門から城内へ通じる城内道路の路面と考えられる。

石敷の路面の南限は後述のS D2249溝であったと考えられる。また、残りのよい部分の北約4mで石・瓦片を敷き詰めた地山岩盤が急激に立ち上がるるので、石敷の路面の北限はこの立ち上がりの南寄りということになる。西限は不明確だが、残りのよい部分の西際と見ると、S B307 外郭東門の西側柱列から西へ約16mの地点までとなる。

また、第13次調査では、S B307 外郭東門の東側、東門に「[]」状に取り付くS F300築地跡で囲まれた部分も調査している。ここにはごく新しい時期のS D308・309溝があり、付近から寄せ集まつたと見られる小石・瓦片がその中より多量に出土した。この付近も石敷であったと推定される。

これ以外の範囲では石敷路面が残存していないため不明確だが、石敷路面はS B307 外郭東門の内側と外側の限られた範囲であったのかもしれない。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦の破片がある。土師器にはロクロ調整の坏・甕の小破片、瓦には政府第IV期の均整唐草文軒平瓦721B(第15図2・3)、平瓦II C類(第15図4)が含まれる。



第15図 SX314 小石敷路面出土遺物



第16図 SX314 小石敷路面の主要部分

S X2250 城内道路跡のまとめ

城内の東西道路の存在は第12~14次調査で指摘されている(『宮城県多賀城跡調査研究年報1971』)。道路遺構としては第14次調査でS X314 小石敷路面が検出されている。これはS B307 外郭東門のすぐ西側に位置し、城内道路の舗装路面と考えた。これ以外には実際に道路遺構は検出していなかったが、この延長上には六月坂地区でS D238・344 東西溝の北に接して、南北約20mの幅ではほぼ東西に細長くほとんど遺構のない地域が認められた。これがほぼ丘陵の尾根線上を走り、地形に沿ってやや南に片寄りながら東西約300m以上にも及ぶと考えられることから、城内道路と考えた。ただし、実際に道路遺構を検出していないため、遺構No.は付けていなかった。

前述したように、直線的に延びるS D2249・2255溝が城内道路の南側溝に、S X314 小石敷路面が城内道路の路面に当たると考えられることが今回の調査で明らかとなったので、この城内道路を「S X2250 城内道路跡」と今後呼ぶことにする。

S X2250 城内道路跡は北側には側溝を持たないが、南側に側溝を持ち、道路の排水は南側溝によってなされていたと考えられる。

S D2249 溝と残存するS X314 小石敷路面の北端でみると、路面幅は南北約16mとなる。また、S B307 外郭東門の西側ではS X314 小石敷路面のすぐ北側で、地山岩盤が急激に立ち上がる。そこで、S D2249 溝と地山岩盤の立ち上がり今までが路面と見ると、路面幅は南北約20mとなる。

路面はS B307 外郭東門の西側では少なくとも東西約16mの範囲に小砾・瓦片を敷き詰めている(S X314 小石敷路面)。また、この部分での路面は北から南に約5°傾斜する。

南側溝に3時期あることから、本道路跡も少なくとも3時期あると考えられる。ただし、S X314 小石敷路面での時期差は認められなかった。

遺構として確実に検出できたのは、S B307 外郭東門のすぐ西側から第14次調査区西端までの長さ約74mである。

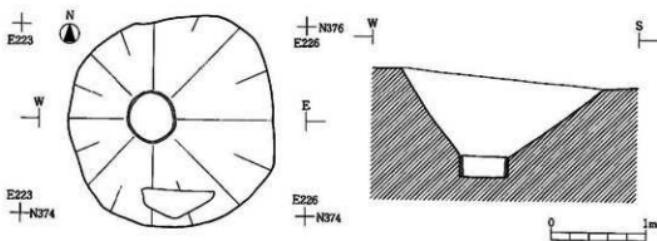
(4) 井戸跡

S E316 井戸跡(第3・17図)

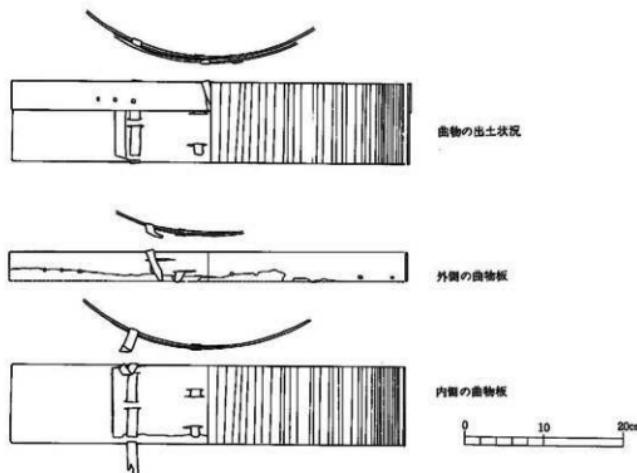
S X2250 城内道路の路面に位置してこれよりも新しいと考えられ、城内道路の廃絶年代と係る遺構の一つである。

直径2.1m、深さ約1mの大きさで、ロート状に岩盤を掘り下げている。そのほぼ中央部は、直径50cm、深さ20cm位に垂直に掘り下げ、その部分だけ、井戸枠として使用した曲物が残っていた。

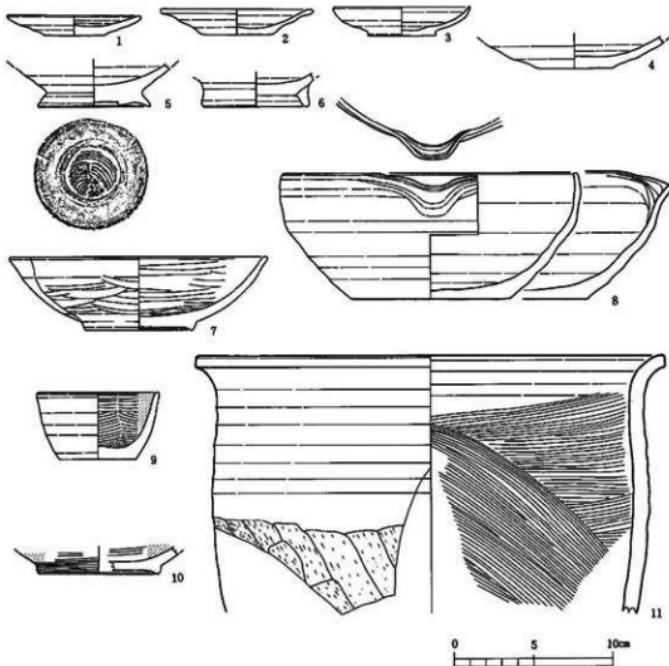
曲物は二重になっており、上端部をそろえて、幅の狭い曲物を重ねている（第18図1）。内側の曲物（第18図3）は直径49.2cm、巾10cm、厚さ0.3cmの柾目板を曲げ、2箇所を樺皮で綴じたものである。内側全面には0.5~1.5cmの不規則な間隔で刻目がある。側板は樺皮の表面を外に向けて荒く綴じている。外側の曲物（第18図2）の直径は49.8cm、幅は3.5cmであり、内側のものと同材質の柾目板でつくられ、2箇所を樺皮で綴じている。内面に刻目がない。この曲物には不規則な間隔で穿孔が施されている。



第17図 SE316 井戸跡平面図・断面図



第18図 SE316 井戸跡の井戸枠



番号	種類	器種	特 徴	備 考	番号	種類	器種	特 徴	備 考	番号
1	須恵系土器	小瓶	回転目切り、胎土に砂粒・ガラス含む、灰褐色	3405	7	須恵系土器	高台杯	回転目切り→付高台→ロクロナダ→両面施釉→ラミガキ。胎土に砂粒・ガラス灰白色。柄質		3405
2	須恵系土器	小瓶	回転目切り、胎土に砂粒・ガラス含む、淡黄灰色	3405	8	須恵系土器	片口瓶	回転目切り→片口部のつまみ出し		3405
3	須恵系土器	小瓶	回転目切り、胎土微細、灰褐色	3405	9	土師器	小型杯	回転目切り。放射状→ラミガキ、黒褐		3405
4	須恵系土器	杯	回転目切り、胎土に砂粒・ガラス含む、青褐色～淡黃灰色	3405	10	土師器	壺	ロクロ調整→付高台→ロクロナダ。表面ヘラミガキ→両面黑色処理		3405
5	須恵系土器	高台杯	回転目切り→付高台→ロクロナダ。胎土に砂粒・ガラス含む淡黃灰色	3405	11	土師器	甕	ロクロ調整→外表面下部、ヘラケズリ、内面ナダ		3405
6	須恵系土器	高台杯								

第19図 SE316井戸跡出土遺物

井戸を埋めている土は黒褐色土である。

出土遺物（第19図）には須恵系土器小皿（1～3）・壺（4）・高台壺（5・6）・片口鉢（8）、土師器小型壺（9）・高台壺（7）・塼（10）・甕（11）がある。

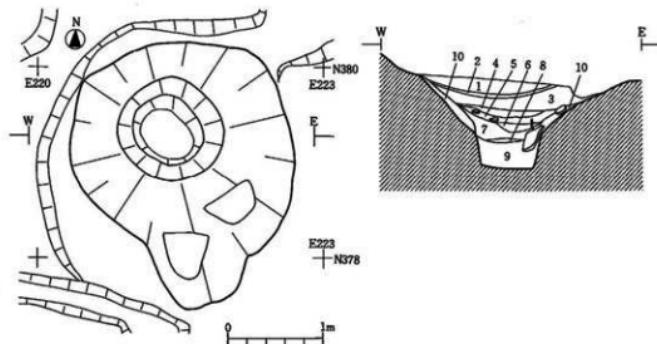
このうち、須恵系土器には胎土が微細なもの（3・5）と胎土に砂粒・ガラスを含むもの（1・2・4・6）があり、後者が多い。ただし、色調は赤みのある褐色のものではなく、いずれも灰褐色～淡黄灰色である。また、7の高台壺は壺部をロクロ調整で製作して底部を切り離した後に高台を付け、さらに高台・底部周辺をロクロナデし、さらに両面を粗くヘラミガキしている。焼成温度は比較的高いと考えられ、土師器の中では硬質である。もともとは黒色処理を意図したものと考えられるが、焼成温度が高くなり、黒色処理がとんだものと推定される。

S E317 井戸跡（第3・20図）

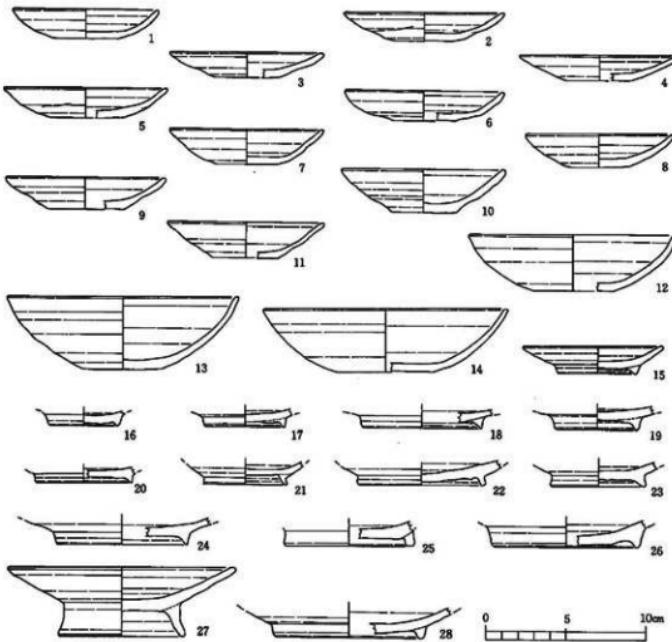
城内道路の路面に位置してこれよりも新しいと考えられ、城内道路の廃絶年代と係る遺構の一つである。

S E316 井戸跡の西北5m程の所にある。平面形は不整円形で、南に約1.5m張り出す。規模は径約9.0m、深さ約2.0mで、ロート状に岩盤を掘り下げている。井戸枠などの施設は発見されていない。裏込めが一部残存し、人為的に埋められている。

出土遺物には多量の須恵系土器の他、少量の土師器、須恵器、瓦などがある。実測可能なものに底部破片を加えると、須恵系土器には小皿13点（第21図1～6）、小型壺8点



第20図 SE317 井戸跡



番号	種類	器種	地	漆	漆番号	番号	種類	器種	地	漆	漆番号
1	漆舟系上器	小舟	四軸系切り、船上に砂粒。ガラス含む。漆黒色。	30112	13	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	ロクロナダ。	船上に砂粒。ガラス含む。漆のみのあら漆色。	30112
2	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。ガラス含む。漆黒色。	30112	14	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
3	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。漆黒色。	30112	15	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
4	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。ガラス含む。漆黒色。	30112	16	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
5	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。ガラス含む。漆黒色。	30112	17	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
6	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。漆黒色。	30112	18	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
7	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。漆黒色。	30112	19	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
8	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。漆黒色。	30112	20	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
9	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。漆黒色。	30112	21	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
10	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。漆黒色。	30112	22	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
11	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。漆黒色。	30112	23	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
12	漆舟系上器	小舟	四軸系切り。船上に砂粒。漆黒色。	30112	24	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
13	漆舟系上器	舟	四軸系切り。船上に砂粒。ガラス含む。漆黒色。	30112	25	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
14	漆舟系上器	舟	四軸系切り。船上に砂粒。ガラス含む。漆黒色。	30112	26	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
15	漆舟系上器	舟	四軸系切り。船上に砂粒。ガラス含む。漆黒色。	30112	27	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112
16	漆舟系上器	舟	四軸系切り。船上に砂粒。ガラス含む。漆黒色。	30112	28	漆舟系上器	高行舟	けくじやう	白	漆黒色。	30112

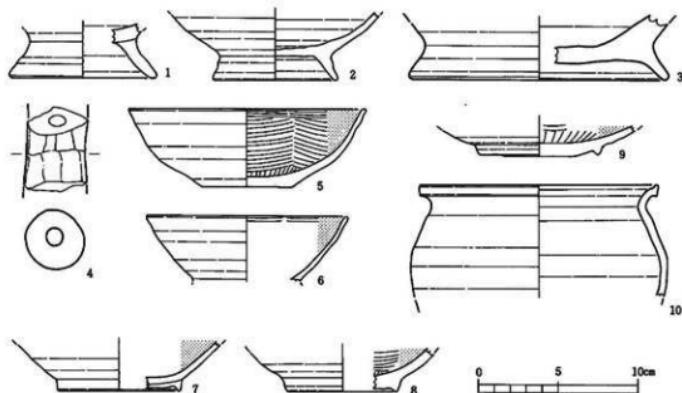
第21図 SE317 井戸跡出土遺物 (1)

(第 21 図 7~11)、坏 3 点 (第 21 図 12~14)、小型坏または坏 (多くは小型坏か) 18 点、高台皿 5 点 (第 21 図 15~19)、高台坏 11 点 (第 21 図 20~28、第 22 図 1・2)、大型高台鉢 1 点 (第 22 図 3)、器台 1 点 (第 22 図 4) があり、小皿・小型坏・高台坏を主体としている。また土師器には、底部が回転糸切り無調整の坏 5 点 (第 22 図 5)、・ 1 点 (第 22 図 9)、高台坏 7 点 (第 22 図 6~8)、ロクロ調整の大型壺 1 点 (第 22 図 10) がある。須恵器には坏 2 点 (底部が回転ヘラケズリのもの、ヘラ切りのもの各 1 点)、高台坏 1 点の他、坏・甕・壺の破片が含まれるが、いずれも小破片である。瓦には政庁第 IV 期の均整唐草文軒平瓦 721B が 1 点含まれる。

S E 715 井戸跡 (第 2 図, 付図)

S B 711 建物跡と重複し、これよりも新しい井戸である。

平面形は径 3m ほどの円形で、壁は斜めに掘られ、深さは 50 cm ほどもある。東側にはこ



番号	種類	器種	特徴	測定	器番号	番号	種類	器種	特徴	測定	器番号
1	須恵系土器	高台皿	付高台→高台、底部: ロクロナザ。胎土細緻、淡黄褐色	3412	6	土師器	高台坪	内面黑色處理、胎土に砂粒			3412
2	須恵系土器	高台皿	付高台→高台、底部: ロクロナザ。胎土に砂粒、ガラス含む。灰褐色	3412	7	土師器	高台坪	付高台→高台、内面: ロクロナザ。胎内面ミガキ、胎土微緻、内面: 黑色處理			3412
3	須恵系土器	大型有柄鉢	付高台→高台、底部: ロクロナザ。胎土に砂粒、ガラス含む。黄褐色	3412	8	土師器	高台坪	付高台→高台、底部: ロクロナザ→内面ミガキ。胎土微緻、内面: 黑色處理			3412
4	須恵系土器	器台	中空の台盤破片、胎土に砂粒、ガラス含む。赤土のあら褐色	3412	9	土師器	坪	底部が高台下端より外に出る。付高台。内面削制状へミガキ→黑色處理			3412
5	土師器	坪	回転糸切、内面: 削制状へミガキ→黑色處理	3412	10	土師器	壺	ロクロ調整、小型			3412

第 22 図 SE317 井戸跡出土遺物 (2)

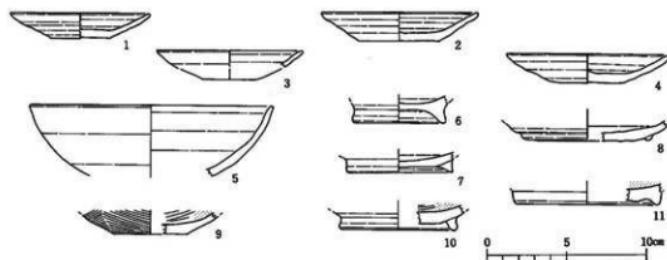
の井戸に連なる幅約 80 cm の溝があり、排水溝と考えられる。溝が井戸に接続する部分と東側の壁には人頭大から拳大の礫が貼りつけてある。埋土は 4 層に分れる。

出土遺物（第 23 図）には多量の須恵系土器の他、少量の土師器、須恵器、瓦、鉄製品などがある。遺物は埋土上部の 1・2 層、および排水溝から多く出土した。実測可能なものに底部破片を加えると、須恵系土器には小皿 5 点（1～4）、壺 10 点（5）、小型壺ないし壺（多くは小型壺か）38 点、高台皿 2 点、高台壺 17 点（6・7）、・1 点（8）がある。須恵系土器には胎土が微細なもの（1・3・4・6・7）と胎土に砂粒・ガラスを含むもの（2・5）があり、前者が多い。色調は淡黄灰色のもの（2・3・6～8）を主体とするが、やや赤みのある褐色のもの（1・4・5）も少數ある。また、土師器には壺 9 点（9）、高台壺 4 点（10）、・2 点（11）の他、ロクロ調整の甕破片が少數ある。土師器壺は底部が回転糸切りのものを主体とするが、中には外面もヘラミガキされたもの（9）もある。須恵器には壺・甕・壺の破片が少數ある。鉄製品には刀子、不明鉄製品がある。

（5）その他の溝

S D315 環状溝（第 3・24 図）

S X2250 城内道路の路面に位置してこれよりも新しい。城内道路の廃絶年代と係る遺構



番号	種類	器種	層位	特　　徴	番号	種類	器種	層位	特　　徴	番号	
1	須恵系土器	小皿	2 層	回転糸切り、胎土微細。やや赤みのある黃褐色	3392	7	須恵系土器	高台壺	排水溝	付高台一高台・底削。ロクロナフ。胎土微細。淡黄反色	3392
2	須恵系土器	小皿	2 层	回転糸切り、胎土に砂粒・ガラスを含む。淡黄灰色	3392	8	須恵系土器	壺	排水溝	付高台一高台・底削。ロクロナフ。胎土にガラス含む。地褐色	3392
3	須恵系土器	小皿	4 层	回転糸切り。胎土微細。淡黄灰色	3392	9	土師器	坪	排水溝	回転糸切り。胎土ヘラミガキ。地褐色	3392
4	須恵系土器	小皿	1 层	回転糸切り、胎土微細。やや赤みのある黃褐色	3392	10	土師器	高台壺	排水溝	付一回転糸切り一高台・底削。ロクロナフ。内面ヘラミガキ。墨色處理	3392
5	須恵系土器	壺	排水溝	回転糸切り、胎土に砂粒・ガラスを含む。やや赤みのある褐色	3392	11	土師器	壺	4 层	付高台一高台・底削。ロクロナフ。内面ヘラミガキ。墨色處理	3392
6	須恵系土器	高台壺	排水溝	胎土微細。淡黄灰色	3392						

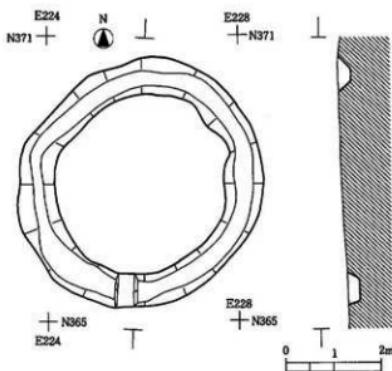
第 23 図 SE715 井戸跡出土遺物

の一つである。

須恵系土器小皿を含む第3層に覆われ、地山面で検出した。幅約80cm、深さ30cmの逆台形状の溝を環状に巡らせている。全体の形状・規模は径約5.2mのほぼ円形である。内部は径約3.5mのほぼ円形で、平坦である。また、内部にはまったく遺構がない。

埋土は第3層と同様の黒褐色土で、自然堆積である。

出土遺物は須恵系土器壺口縁部小破片が1点あるにすぎない。性格は不明である。



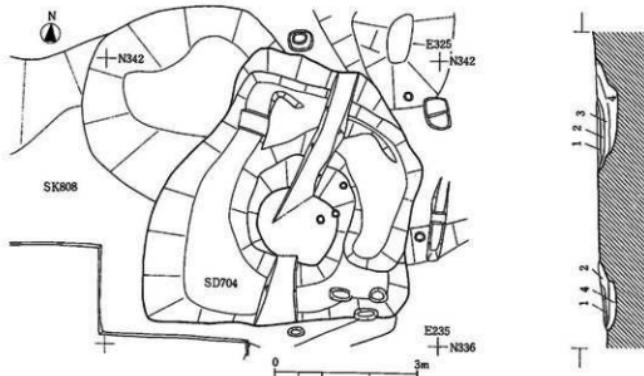
第24図 SD315環状溝

S D 704 溝（第3・25図）

S K 808 土壌と重複し、これよりも新しい。表土下の地山面で検出した。

幅約0.8m（平均値、最大1.2m）、深さ約40cmの段を持つ浅い皿状の溝を環状に巡らす。北西部では溝の底面に部分的に浅い溝が掘られているが、埋土は同様であり、新旧関係ではない。全体の平面形は不整方形で、規模は東西約2.8m、南北約3.1mである。内部は径約0.8mの円形で、平坦である。また、内部にはまったく遺構がない。性格は不明である。

埋土は北半部で4層に、南西部で3層に分かれる。第1・2層（上層）は灰黄褐色シルトの自然堆積層で、第3・4層（下層）が地山明黄褐色粘土ブロックを多く含む褐色粘土の人為堆積層である。第4層上面には薄い炭化物層が挟まれ、第3層は南西部には認められない。



第25図 SD704溝

出土遺物は比較的多く、土師器を主体に少數の須恵器・須恵系土器・瓦がある（第26・27図；表2）。須恵系土器壺の底部破片が1点（第27図1）上層より1点出土している以外は、上層と下層で出土遺物の内容に大きな違いは認められない。

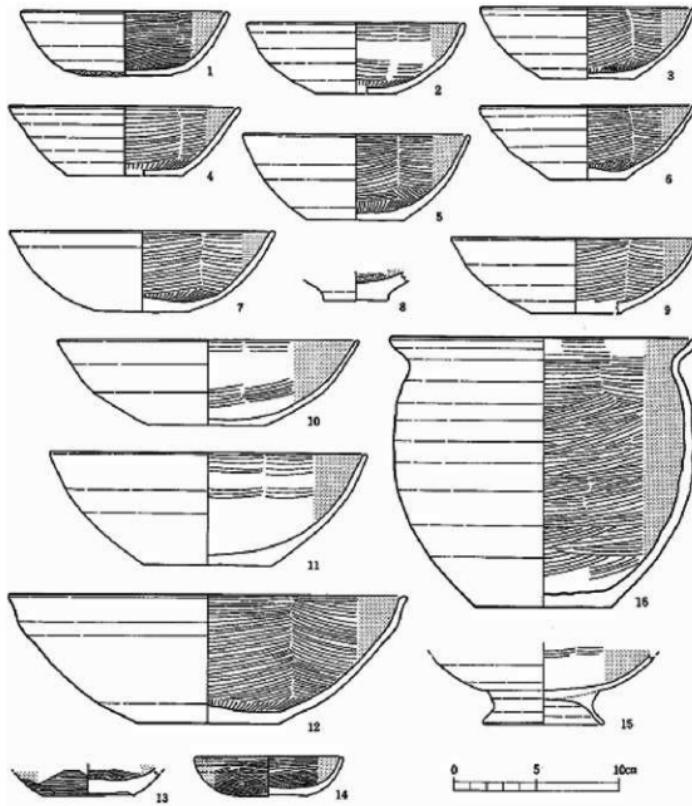
土師器（第26図）には壺（1～12）・小型壺（14）・高台壺（13・15）・耳皿・甕（16）がある。壺は1～7・9の通常の大きさのものとそれよりも大きな10～12とに分かれ、前者が多い。器形は体部が膨らみながら立ち上がるものが多く（1～7・9～12）、底径の小さなものの（2・3・5～12）が多い。8は底部が分厚く、特異である。また、底部が回転糸切り無調整で、内面のヘラミガキが放射状のもの（4・5）が多く、底部・体下部が手持ちヘラケズリされたものは1点あるにすぎない。摩滅して調整不明の2・3・6・7・9～12も器形と底径の小さいことからみて、底部が回転糸切りのままであると考えられる。内面はいずれもロクロナデの後にヘラミガキされ、さらに黒色処理されている。

土師器小形壺（14）はロクロ調整で底部が回転糸切りの後に両面がヘラミガキされ、さらに両面が黒色処理されている。

土師器高台壺には、ロクロ調整の後に両面がヘラミガキされ、さらに両面が黒色処理さ

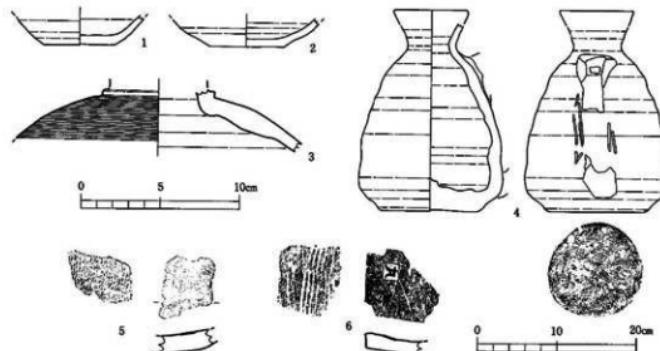
種類	層					計
	1層	2層	3層	4層	計	
上 面 器	壺	24	11	12	4	51
	小型壺			1		1
	高台壺	2	1		1	4
中 間 器	甕	2		3	1	6
	耳皿	4			1	5
	甕				0	0
	道				1	1
下 面 器	小瓶			1		1
	甕	3			1	3
	I A			1		1
	I B	2	3	5	1	11
瓦	I C		1	2		3
	瓦	2	4	4	2	12
	計	37	21	28	11	97

表2 SD704溝の出土遺物



番号	種類	基盤	物	基	番号	種類	基盤	物	基	番号
1	上部器	平	1層 内面：直射状ヘテガタリ。外側：斜削状・直削 状ヘテガタリ。黑色处理	12168	9	上部器	平	2層 内面：直射状ヘテガタリガタリ。黑色处理	12168	
2	上部器	平	3層 内面：斜削状ヘテガタリ。黑色处理	12168	10	上部器	平	3層 内面：直削状ヘテガタリガタリ。黑色处理	12168	
3	上部器	平	1層 内面：斜削状上にようじ削り取り直削状ヘテガタリ。黑色处理	12168	11	上部器	平	4層 内面：直射状ヘテガタリガタリ。黑色处理	12168	
4	上部器	平	1層 底面：凹軸直削り直削状ヘテガタリ。黑色处理	12168	12	上部器	平	2層 内面：直射状ヘテガタリガタリ。黑色处理	12168	
5	上部器	平	4層 底面：凹軸直削り直削状ヘテガタリ。黑色处理	12168	13	上部器	高台坪	1層 ガタリ二面：黑色处理	12168	
6	上部器	平	3層 内面：斜削状ヘテガタリ。黑色处理	12168	14	上部器	小笠坪	2層 底面：直削直切ヘテガタリ。ヘテガタリ二面：黑色处理	12168	
7	上部器	平	2層 内面：斜削直切ヘテガタリ。黑色处理	12168	15	上部器	高台坪	1層 底面：直削直切ヘテガタリ。ヘテガタリ二面：黑色处理	12168	
8	上部器	平	2層 底面：斜削直切ヘテガタリ。黑色处理	12168						

第26図 SD704 漢出土遺物 (1)



第 27 図 SD704 溝出土遺物 (2)

れた低い付高台のもの (13)、ロクロ調整の後に「ハ」字状に外に開くやや高い高台が付けられ、内面がヘラミガキ・黒色処理されたもの (15) とがある。

土師器耳皿は第 23 次調査で両面へラミガキ・黒色処理された破片が出土している。

土師器甕の多くはロクロ調整のものの破片である。図示した 16 はロクロ調整の後さらに内面がヘラミガキ・黒色処理されている。

須恵器には回転糸切り無調整の坏底部破片 (第 27 図 2)、リング状凸帯を持ち、体部がカキ目の壺 (第 27 図 3)、黒窯 90 号窯式の灰釉陶器把手付小瓶を模倣したと考えられる小瓶 (第 27 図 4) が各 1 点ある。

(6) 土壌

S K345 大土壤 (第 3・12・13 図)

調査区西端に位置し、地山面で検出した。重複状況から見て、SD2249B 溝よりも古い。また、SA706 材木跡に近接するが、SA706 材木跡とは重複しない。

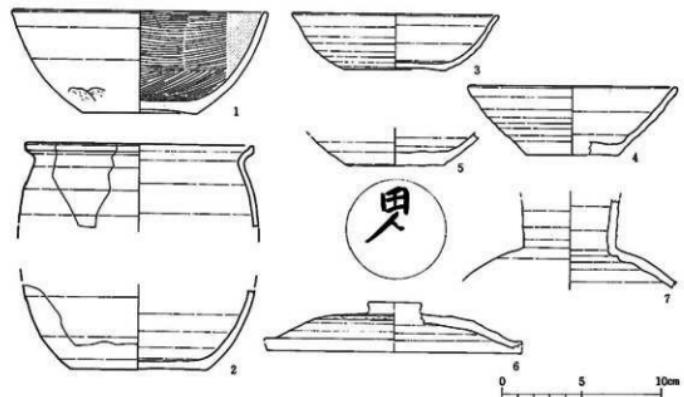
平面形は不整形で、規模は東西約 7.2m、南北 7.6m、深さ約 1.4m である。

埋土は4層に大別される。上部の第I層が自然堆積層で、上面には部分的に灰白色火山灰が堆積していた。下部の第II～IV層が人為的に埋められ、第III層がグライ化していた。

出土遺物（第28図）はあまり多くない。第II層からは底部・体下部手持ちヘラケズリの土師器坏1点（1）、ロクロ調整の土師器小型甕1点（2）、底部糸切りの須恵器坏1点（3）、底部ヘラ切りの須恵器坏3点（5）、須恵器蓋転用硯1点（6）など、第I層からは底部回転糸切り無調整の土師器坏1点、底部回転糸切り無調整の須恵器坏3点（4）、底部手持ちヘラケズリの須恵器坏1点、漆状物質が内面に付着した灰釉陶器壺1点（7）、須恵器系土器口縁部小破片1点などが出土している。また、第I・II層では平瓦がそれぞれ数点出土しているが、政庁第IV期の平瓦II C類は含まれていない。

S K2251 土壙（第12図）

調査区西側に位置し、地山面で検出した。平面形は不整梢円形で、規模は長径約1.5m、短径約1.3m、深さ約25cmである。埋土は黄褐色粘質シルトで、2層に分れる。ロクロ調整の土師器甕口縁～体上部破片1点（第29図4）の他、土師器坏・甕・須恵器坏・甕の破片が少数出土した。



番号	種類	器種	層位	特	測	器番号	番号	種類	器種	層位	特	測	器番号
1	土師器	甕	4層	底面・体下部：手持ちヘラケズリ 内面：青釉状ヘラミガキ→ 黑色地理		12167	5	須恵器	甕	4層	底部：ヘラ切り→屢次压痕 (部分的)、蓋骨「主人」		12167
2	土師器	甕	4層	底面：回転糸切り(右)		12167	6	須恵器	蓋	4層	糸切り→天井部：回転ケズリ 内面：磨減、墨痕		12167
3	須恵器	甕	8層	底面：回転糸切り(右)		12167	7	灰釉陶器	壺	2層	内面底部：漆状付着物		12167
4	須恵器	甕	3層	底面：回転糸切り(右)		12167							

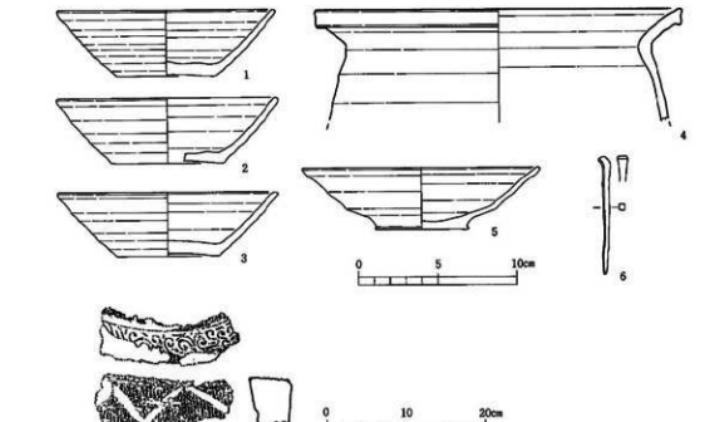
第28図 SK345 大土壙出土遺物

S K2252 土壙 (第 12 図)

調査区西側に位置し、地山面で検出した。平面形は不整円形で、規模は径約 1.6m、深さ約 20cm である。底部回転糸切り無調整の須恵器坏 1 点（第 29 図 3）の他、土師器坏・甕、須恵器甕の破片が少數出土した。

S K2253 土壙 (第 12 図)

調査区西側に位置し、地山面で検出した。平面形は梢円形で、規模は長径約 1.4m、短径約 1.1m、深さ約 0.3m である。出土遺物は少なく、底部が手持ちヘラケズリの土師器坏、ロクロ調整の土師器甕、底部が回転糸切りの須恵器坏（第 29 図 1・2）、須恵器甕・甕の破片が少數ある。



番号	遺構	種類	沿種	特徴	備	高番号	番号	遺構	種類	沿種	特徴	備	高番号
1	SK2253	須恵器	甕	底部：回転糸切り(右)		12169	5	SK2254	須恵器土器	坏	底部：回転糸切り(右)。粘土板細。淡黃灰	色	12169
2	SK2253	須恵器	甕	底部：回転糸切り(左)		12169	6	P102	鉛製品	釘			
3	SK2252	須恵器	甕	底部：回転糸切り		12169	7	B11	瓦	斜平瓦	均整唐草文 721b。政令第IV期		12174
4	SK2251	土師器	甕	ロクロ調整		12169							

第 29 図 SK2251～2254 土壙、その他の遺構出土遺物

S K2254 土塹（第3図）

調査区東側に位置し、地山面で検出した。平面形は橢円形で、規模は長径約2.8m、短径約2.2m、深さ約0.4mである。埋土は2層に分れる。

出土遺物は須恵系土器を主体とし、土師器・須恵器・瓦が少数ある。破片資料が多く、図示できるものは少ない。須恵系土器には小型壺または壺26点、高台壺11点がある。土師器には壺・甕、須恵器には壺・甕が少数ある。須恵系土器はいずれも胎土が微細で、淡黄褐色である。

（7）堆積層の出土遺物

【第3層】

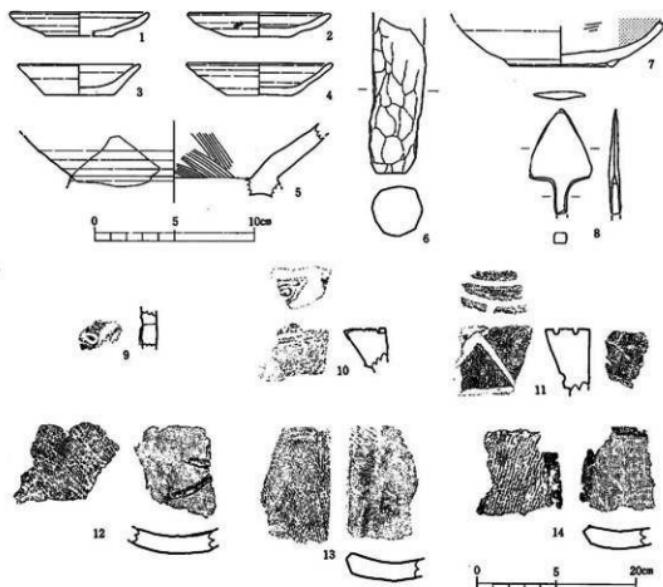
出土遺物には比較的多くの須恵系土器と少數の土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・瓦・鉄製品がある（第30図）。須恵系土器には小皿（1・2）・小型壺（3・4）・壺・高台壺・高台皿・大型台付鉢（5）・三足鍋？（6）がある。須恵系土器の小皿・小型壺には胎土に砂粒・ガラスを多く含み、赤みのある褐色のもの（1～3）が含まれる。また2の小皿の体部外面には粉圧痕が1箇所認められる（図版13-7）。土師器には壺・高台壺・・（7）・甕、須恵器には壺・甕・壺がある。灰釉陶器には皿口縁部小破片、綠釉陶器には・高台部破片（11）が各1点ある。瓦には政府第IV期の宝相花文軒丸瓦422（9）・平瓦II C類（12～14）が含まれ、12の平瓦II C類の凹面には指ナデ文字が認められる。鉄製品には鉄鎌（8）・釘などがある。

【第2層】

出土遺物には中世陶器・須恵系土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・瓦・鉄製品がある。中世陶器（第31図1・2）は在地産のものと推定される。須恵系土器には小皿・壺・高台壺・高台皿・大型台付鉢・器台（第31図7）・三足鍋？（第31図8）がある。須恵系土器高台壺（第31図4～6）は胎土が砂質または砂粒・ガラスを多く含み、器厚も8～12mmと厚く、作りも粗雑で、須恵系土器的一群の中では新しい様相を示す。土師器には壺・高台壺・甕がある。灰釉陶器には皿口縁部・体部・高台部小破片が各1点、綠釉陶器には・高台部破片（3）が1点ある。瓦には政府第IV期の連珠文軒平瓦831（第32図2～4）・均整唐草文軒平瓦721B（第32図5）・平瓦II C類（第32図9・10）が含まれる。鉄製品には鉄鎌（第31図9）・釘などがある。

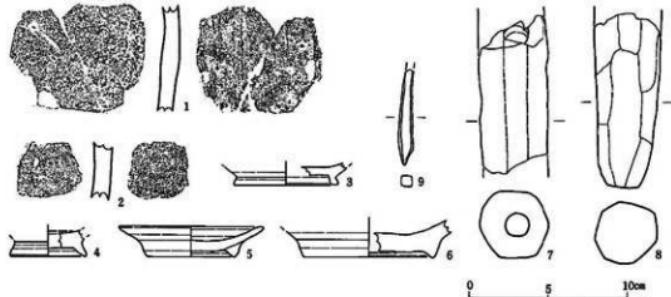
〔第1層(表土)〕

中世以降、現代までの遺物が含まれる。古代・中世の出土遺物(第33図)には土師器・須恵器・須恵系土器・中世陶器・青磁・瓦・鉄製品がある。このうち6の籠泉窯系青磁碗は横田・森田分類のI-5c類に相当し、外面に鎧蓮弁文、底部内面に草花スタンプ文がある。

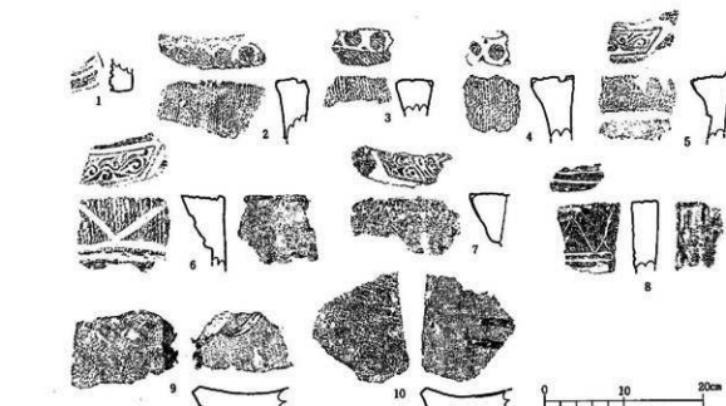


番号	種類	部種	特	番号	種類	部種	特	番号	
1	須恵系土器	小皿	同軸直切口、板土に砂粒・ガラス含む 赤みのある褐色	12170	8	鉄製品	鎌頭	12174	
2	須恵系土器	小皿	同軸直切口、板土に砂粒・ガラス含む 赤みのある褐色	12170	9	軒丸瓦	宝栄花文422、政令墨IV期	12174	
3	須恵系土器	小型坪	同軸直切口、板土に砂粒・ガラス含む 赤みのある褐色	12170	10	瓦	軒平瓦の豊唐草文、政令墨IV期	12174	
4	須恵系土器	小型坪	同軸直切口、板土に砂粒、淡褐色	12170	11	瓦	軒平瓦、淡褐色210、政令墨IV期	12174	
5	須恵系土器	大型台	同軸直切口、板土に砂粒、赤みのある褐色	12170	12	瓦	平瓦	日字彫、一枚作り、回面:布目→子字、板ナデ文字、凸面:溝印き目	12174
6	須恵系土器	三足鍋	同軸直切口、板土に砂粒、ガラス含む	12170	13	瓦	平瓦	日C彫、一枚作り、回面:布目、凸面:溝印き	12174
7	土師器	壺	口縁直切口、内面:ヘラミガ	12170	14	瓦	平瓦	日C彫、一枚作り、回面:布目、凸面:溝印き目、政令墨IV期	12174

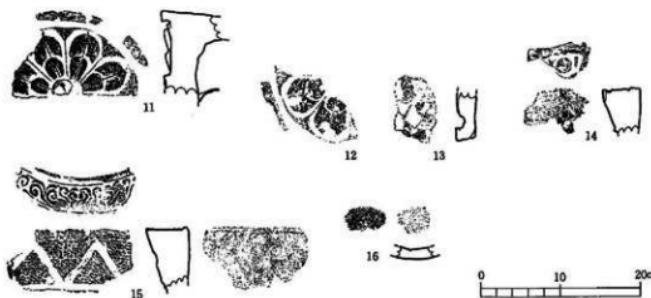
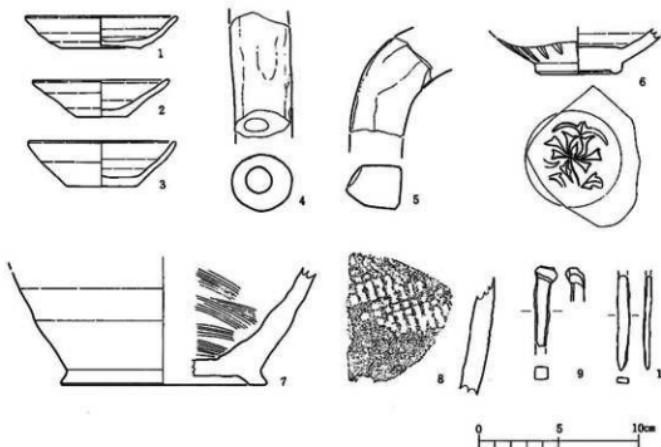
第30図 第3層出土遺物



第31図 第2層出土遺物（2）



第32図 第2層出土遺物（2）



番号	種類	器種	特 徴	直 徑	器番号	番号	種類	器種	特 徴	直 徑	器番号
1	須恵土器	小瓶	切削系切り、胎土黒縫、表面黄灰褐色	12171	9	鉢製品	灯				
2	須恵土器	小型环	切削系切り、胎土にガラスを含む、 赤みのある褐色	12171	10	鉄製品	不明				
3	須恵土器	小型环	切削系切り、胎土にガラスを含む、 赤みのある褐色	12171	11	瓦	軒丸瓦	八葉重弁蓮花纹 130、政序第1期	12174		
4	須恵土器	器台	手塑の方皿破片、胎土に砂利・ガラスを含む	12171	12	瓦	軒丸瓦	八葉重弁蓮花纹 130、政序第1期	12174		
5	須恵土器	三足鍋	埋造焼成、2脚形は高or矮、胎土に砂 利・ガラスを含む、黄褐色	12171	13	瓦	軒丸瓦	宝相花纹 420、政序第4期	12174		
6	青磁	塊	埋造燒成、横口・森田分類I-5c型、 内面・底面に墨色マラジン	12171	14	平瓦	通珠文 831、政序第4期		12174		
7	中空陶器	壺	在地産	12171	15	瓦	軒平瓦	均整唐草文 T21-a、上下区隔目1本、 政序第4期	12174		
8	中空陶器	壺	深米字	12171	16	瓦	九瓦	前面/ヘラ焼き記号	12174		

第33図 第1層出土遺物

5. 考察

(1) 主要遺構の新旧関係

今回およびこれまでの調査の結果、大畠地区官衙の北部では第34図に示した主要遺構の新旧関係が明らかとなった。



第34図 主要遺構の新旧関係

(2) 主要遺構・堆積層の年代

【S A 706 材木塀跡】

抜取溝から出土した底部ヘラ切りの須恵器坏は、第60次調査 S E 2101 B 井戸跡第III層出土土器群（『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』）のものと類似し、底部回転糸切り無調整の須恵器・土師器坏を含まない。S E 2101 B 井戸跡第III層出土土器群は、共伴した漆紙文書から見て天長9（832）年以降に廃棄されている。したがって、S A 706 材木塀は9世紀中頃には撤去されたと考えられる。

【S B 707 八脚門跡】

門の方向は南側柱列で見ると、東西基準線に対して東で北に約7° 傾する。一方、S B 307 外郭東門の南妻、およびこれに接続する S F 300 築地塀の方向は東西基準線に対して東で北に約8° 傾し、S B 707 八脚門とほぼ同じ方向である。多賀城の南北基準線（政府中軸線）は磁北に対して8° 4' 0" 東に傾することから、これらの門と築地塀は磁北の方向とほぼ一致している。また、S B 707 八脚門の東妻と S B 307 外郭東門の西側柱列との間の間隔は約45m（150尺）、S B 707 八脚門の北側柱列と S F 300 築地塀基底部南端との間の間隔は約15m（50尺）と比較的揃った数値である。また、調査区の中では新旧関係が最も古い。

このように、S B 707 八脚門は S B 307 外郭東門、S F 300 外郭東辺築地塀とともに計画

的に配置されたことが窺える。

また、遺物は出土していないが、この門より新しい S A706 材木塀が 9 世紀中頃には撤去されたと考えられることから、S B707 八脚門は 9 世紀前葉頃のものと見られる。

【S X2250 城内道路】

城内道路は奈良時代の外郭東門の造営当初より存在したと推定され、奈良時代の S X1272 城内道路が検出されている（『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1988』）。外郭東門の位置が西側に大きく変更されたのに伴い、平安時代の城内道路も位置が変更されている。当初の城内道路に伴う遺構は不明確だが、その構築年代は S B307 外郭東門・S F300 外郭東辺築地と同じく 9 世紀初頭頃と推定される。その終末期は S X314 小石敷路面（S X2250 城内道路道路路面）と S D2249 溝（S X2250 城内道路南側溝）と考えられる。

S D2249 溝は S K345 大土壙第 II 層よりも新しい（第 13 図）。人為的に埋められた S K345 大土壙第 II 層からは底部回転糸切り無調整の土師器・須恵器坏が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器・須恵器坏は 9 世紀後半以降に多く見られ、第 I 層上部には 10 世紀前葉に降灰した灰白色火山灰が部分的に堆積している。したがって、S K345 大土壙第 II 層は 9 世紀後半頃に埋められたと考えられ、S D2249 溝はこれよりも新しい。

また、S X314 小石敷路面には政府第 IV 期〔貞觀 11（869）年～10 世紀中頃〕の平瓦が含まれ、須恵系土器が含まれない。

したがって、S X2250 城内道路は貞觀 11（869）年の 9 世紀後葉以降に改修されたと考えられる。

また、S D2249B 溝からは須恵系土器高台皿・高台坏の破片が出土した。須恵系土器高台皿は、10 世紀中葉に位置付けられる第 61 次調査第 7 層出土土器群より認められる。

したがって、S X2250 城内道路は 10 世紀中葉頃までには廃絶したと考えられる。

【S B807 南北棟】

柱痕跡より政府第 IV 期の平瓦、柱抜取穴から須恵系土器坏小破片が出土した。したがって、S B807 南北棟の撤去された時期は 10 世紀前半頃と考えられ、構築年代は 9 世紀後葉～10 世紀前葉頃と推定される。

【S E316・317・715 井戸跡】

S E316・317 井戸跡は S X2250 城内道路の路面に掘り込まれた井戸で、これらから出土した土器群は一括性も高いことから、S X2250 城内道路の廃絶、ひいては大畠地区官衙の終末年代に関わる土器群であることが知られる。また、S E715 井戸跡出土土器群も一括性が高く、S E316・317 井戸跡出土土器群と様相が似ている。

そこで、これらの土器群を一括して検討し、さらに政府地区で最も新しい様相を示す S

K78 土壙出土土器群（『多賀城跡政庁跡本文編』、およびこれより古いと考えた第61次調査第7層出土土器群（『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』）と比較・検討する（表3、第35・36図）。

まず、S E316・317・715 井戸跡出土土器群の特徴は、以下のようなである。

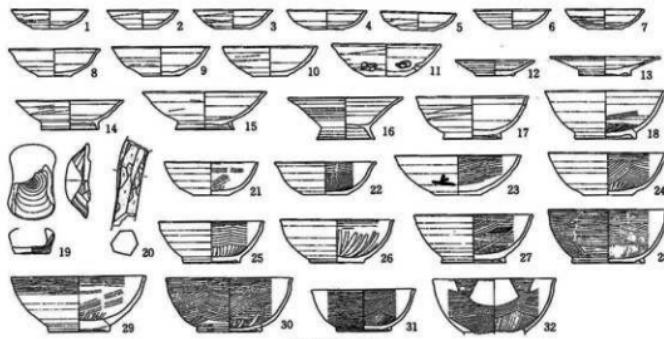
- ①須恵系土器が約7～8割と主体を占め、土師器が約2割と少数で、須恵器をわずかしか含まない。
- ②須恵系土器には小皿・小型坏・坏・高台坏を含む。
- ③須恵系土器坏類では小皿・小型坏と坏の法量分化が画然としている。
- ④須恵系土器小皿の口径は9cm前後とSK78 土壙のものよりもやや大きい。
- ⑤須恵系土器坏類には、胎土が微細で灰褐色～淡黄灰色のものと、胎土に砂粒・ガラスを含む灰褐色～淡黄灰色または赤みのある褐色のものがある。後者が多く、赤みのある褐色のものが少ない。
- ⑥須恵系土器坏類の内面は、ロクロナデ痕跡が不明瞭でコテ状工具によってナデていると考えられるものと、ロクロナデ目が比較的明瞭でコテ状工具によってナデしているとは考えにくいものの両者がある。内面中央には「ヘソ」状の高まりの認められるものは少ない。
- ⑦土師器坏類は坏・高台坏・碗からなる。坏は体部が膨らみながら立ち上がり、底部が回転糸切り無調整である。

また、第61次調査第7層出土土器群の特徴は、以下のようなである。

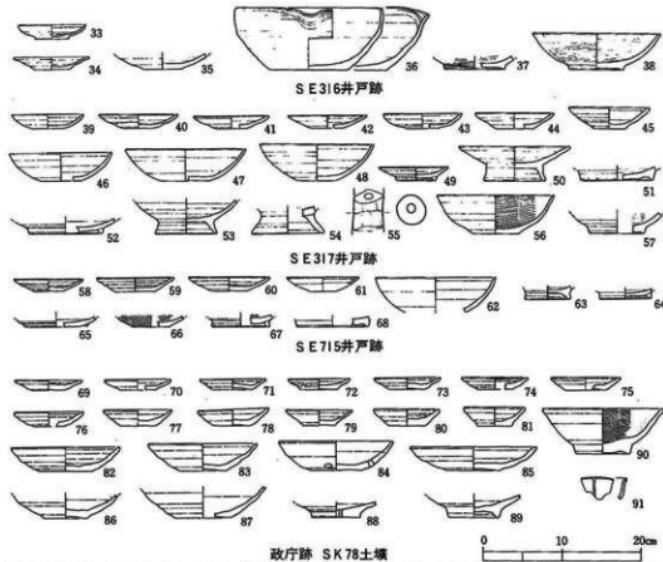
- ①須恵系土器が約73%と主体を占め、土師器が約25%と少数で、須恵器をわずかしか含まない。
- ②須恵系土器には小皿を含まず、小型坏・高台皿・高台坏・碗・耳皿を含む。
- ③須恵系土器坏類では小型坏と坏の法量分化があまり画然としていない。
- ④須恵系土器坏類は胎土が微細で灰褐色～淡黄灰色である。
- ⑤須恵系土器坏類の内面は、ロクロナデ痕跡が不明瞭で、コテ状工具によって丁寧にナデていると考えられる。内面中央に「ヘソ」状の高まりはほとんど認められない。
- ⑥土師器坏類は坏・高台坏・からなる。坏は体部が膨らみながら立ち上がり、底部が回転糸切り無調整である。

また、SK78 土壙出土土器群の特徴は、以下のようなである。

- ①須恵系土器が約98%と圧倒的多数を占め、土師器・須恵器をほとんど含まない。
- ②須恵系土器に小皿・小型坏・坏・高台坏を含む。
- ③須恵系土器坏類では小皿・小型坏と坏の法量分化が画然としている。
- ④須恵系土器小皿の口径は8cm前後で、SE316・317・715 井戸跡のものよりもやや小さく、



第61次第7層

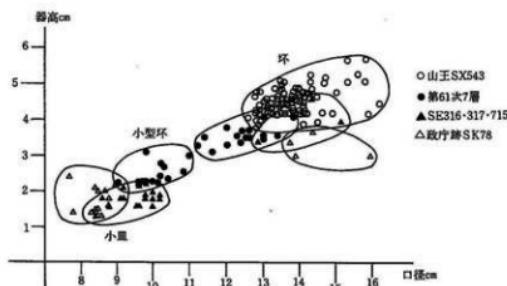


1~20・33~36・39~55・58~65・69~89: 須恵器
21~32・37・38・56・57・66~68・90: 土師器
91: 白磁
1~7・45・81: 小型坏
8~11・24・35・46~48・56・62・66・82~87: 坯
12・13・49: 高台皿
14~16・38・50~54・57・63・64・88~90: 高台坏
17・18・25~32・37・65・68: 瓢
19: 耳皿
20: 三足土器
33・34・39~44・58~61・69~80: 小皿
36: 片口钵
55: 器合
91: 瓢

第35図 SE316・317・715 井戸跡出土土器群の対比

種類	器種	61次7層		SE316		SE317		SE715		SK78	
		点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率
須 惠 系 土 器	小皿			2	9.1	13	18.1	5	5.7	11	13.6
	小型环	13	3.6	1	4.5	8	11.1	2	2.5		
	环	17	4.7	6	27.3	3	4.2	10	11.4	4	4.9
	小型环 or 环	155	42.7			18	25	38	43.2	50	61.7
	高台环	68	18.7	5	22.7	11	15.3	17	19.3	12	14.8
	碗	4	1.1					1			
	高台皿	2	0.6					2			
	大型钵・大型台付钵	4	1.1			1	1.4				
	片口鉢			1							
土 器	器台					1	1.4				
	三星土器	1	0.3								
	小計	264	72.7	15	68.2	55	76.4	73	83	79	97.5
	环	内黒・内ミガキ	40	3		5		8			
		内黒・両ミガキ		12.9	13.6		6.9	1	10.2		
		非内黒?	7								
	高台环	内黒・内ミガキ	12	1		7		4		1	
		両黒・両ミガキ	3								
		非内黒?	2								
師 器	高台环	内黒・内ミガキ	3	5.8	9.1		9.7		44.5		1.2
		内黒・両ミガキ	3								
		非内黒・内ミガキ	1	1							
	壇	内黒・内ミガキ	1			1		2			
		内黒・両ミガキ	4	1.7			1.4		2.3		
		両黒・両ミガキ	1			1					
	甕	非内黒	16	4.7		1	1.4				
		内黒	1								
	小計		91	25.1	5	22.7	14	19.4	15	17	11
須 惠 系 土 器	环					2	2.8				
	高台环					1	1.4				
	甕	5	1.4	1	4.5						
		1	0.3	1	4.5						
	小計	6	1.7	2	9.1	3	4.2				
灰釉	甕	1	0.3								
绿釉	甕	1	0.3								
白磁	輪花皿									1	12
	総計	363		22		72		88		81	

表3 SE316・317・715 井戸跡、第61次第7層、政庁跡 SK78 土壌出土土器群の組成



第36図 須恵系土器小皿・小型環・環の法量の比較

口縁部・底部も分厚く肥厚する。また、須恵系土器坏の器高は S E 316・317・715 井戸跡のものよりも低く、皿に近い器形のものを含む。

⑤須恵系土器坏類の多くは胎土に砂粒・ガラスを含む赤みのある褐色のもので、胎土が微細で灰褐色～淡黄灰色のものは少数である。

⑥須恵系土器坏類の多くは内面のロクロナデ痕跡が比較的明瞭で、コテ状工具によってナデしていると考えにくい。また、内面中央部には「ヘソ」状の高まりが認められる。

⑦土師器には底部の分厚い高台坏が1点ある。

以上のような諸特徴から、S E 316・317・715 井戸跡出土土器群は、第61次調査第7層出土土器群と S K 78 土壌出土土器群との中間的様相を示し、両者の間に年代的に位置付けられる。第61次調査第7層出土土器群については10世紀中葉、S K 78 土壌出土土器群については10世紀中葉以降の10世紀代と年代的に位置付けた(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』)。したがって、S E 316・317・715 井戸跡出土土器群は10世紀中葉以降でも古い頃と考えられる。

【S D 704 溝】

上層の自然堆積層から須恵系土器坏が1点出土した。しかし、下層の人為堆積層からは須恵系土器は出土していない。下層出土の土師器坏は、底部回転糸切り無調整で底径が小さく、内面放射状ヘラミガキのものを主体としている。こうした下層土器群の特徴は、9世紀中葉に位置付けられる S K 2167 土壌出土土器群(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』)よりも新しく、9世紀後半に位置付けられる第61次調査第10層出土土器群(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』)に類似する。したがって、S D 704 環状溝は9世紀後半頃のものと考えられる。

【第3層】

須恵系土器の小皿・小型坏には胎土に砂粒・ガラスを多く含み、赤みのある褐色のものが含まれる。これらは政庁跡 S K 78 土壌出土土器群に類似し、政庁跡 S K 78 土壌出土土器群は10世紀中葉以降の10世紀代に位置付けられている(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』)。したがって、第3層の堆積時期もこの頃と考えられる。

【第2層】

中世陶器が含まれることから、中世以降のものである。

【S D 315 環状溝】

S D 2250 城内道路の路面上に位置し、第3層に覆われ、埋土が第3層に類似する自然堆積層で、須恵系土器坏が出土したことから、10世紀前葉以降の10世紀代と考えられる。

(3) 遺構期の設定

前述した主要遺構の新旧関係と年代とを検討すると、以下の4時期にわたる主要遺構の時期区分が可能である。

【①期】 S B 707 八脚門跡

【②期】 S A 706 材木堀跡

【③期】 S X 314 小石敷路面と S D 2249 溝、 S B 807 南北棟

【④期】 S E 316・317・715 井戸跡、 S D 315 環状溝

なお、S B 807 南北棟は柱痕跡より政庁第IV期の平瓦、柱抜取穴から須恵系土器壺小破片が出土し、撤去された時期が S D 2249B 溝の廃絶時期と同時と考えられることから、S B 807 南北棟の構築・廃絶年代もこの③期に含まれると推定される。

また、S D 2255 溝については方向が S D 2249 溝と異なり、S B 707 八脚門・S A 706 材木堀跡の方向と類似することから、①期または②期に位置付けられる。

(4) 大畠地区官衙北部の遺構変遷

【①期】 S B 707 八脚門（大畠地区官衙北門）

S B 707 八脚門は、S B 307 外郭東門の西側柱列から西に約 45m (150 尺) 離れた位置に東妻が、S F 300 築地堀基底部南端から南に約 15m (50 尺) 離れた位置に北側柱列がくるように配置されている。方向もこれらと合うようにほぼ磁北を基準にし、中央間が 13.5 尺、脇間が 10 尺等間で造営されている。

また、S B 707 八脚門の南延長線上は、堅穴住居跡や 10 世紀ないしそれ以降と推定される小規模な建物跡が認められるものの、9 世紀代には建物が認められず、大畠地区官衙に入る官衙内の道路の存在が想定される。そして、大畠地区官衙北東部の建物群の集中する区域は、この S B 707 八脚門をかなり意識した配置を取っており、建物群の北限は S B 707 八脚門の南側柱列の延長線上から約 7.5m (25 尺) 離れている。この間隔は前述の S B 707 八脚門と S F 300 外郭築地堀基底部南端との間隔のほぼ半分に当たる。

こうした計画的配置関係から見て、S B 707 八脚門は大畠地区官衙の北門に当たると考えられる。

また、年代は S B 307 外郭東門、S F 300 外郭東辺築地堀が構築された平安時代初期のもの（9 世紀初頭頃）と推定される。方向と年代から見ると、これまでの大畠地区官衙の遺構期区分（『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』）のD期に当たる。9 世紀前半に位置付けられるD期の建物の方向は、これらの門・築地堀の方向とほぼ一致している。

なお、S B 307 外郭東門から西に延びる城内道路が S B 707 八脚門の両側に取り付いてい

た北辺区画施設の北側を通っていたと考えられる。S B 707 八脚門の北側柱列、S A 706 材木塀と方向がほぼ一致し、これらの北約 18m (60 尺) 離れて併行している溝に S D 2255 溝がある。方向と配置から見て、S D 2255 溝は①期または②期の S X 2250 城内道路南側溝と考えられる。

【②期】 S A 706 材木塀（大畠地区官衙北辺区画施設）

S B 707 八脚門の柱が抜かれ、その北側柱列の位置に方向を一致させて S A 706 材木塀跡が作られている。材木塀の方向は東で北に約 7° 傾する。方向と位置を①期の大畠地区官衙北辺区画施設のものを踏襲していることから、S B 707 八脚門と同様に S A 706 材木塀も S B 307 外郭東門、S F 300 外郭東辺築地塀を意識して計画的に配置されたことが窺える。

また、S A 706 材木塀跡は S B 307 外郭東門跡の西側柱列の延長上と約 9m (30 尺) 離れた位置で北に直角に折れ曲がる。その先は不明確だが、S F 300 外郭築地に接続していたと推定される。この折れ曲がり方にも S B 307 外郭東門、S F 300 外郭東辺築地塀を意識して計画的に配置されたことが窺える。

S A 706 材木塀は 9 世紀中頃には撤去されている。この撤去の時期と①期との関係から見て、S A 706 材木塀は 9 世紀前葉頃に構築されたと考えられる。

S A 706 材木塀跡は、方向と年代から見て、これまでの大畠地区官衙の遺構期区分（『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』）の D 期に当たる。9 世紀前半に位置付けられる D 期の建物の方向は、この S A 706 材木塀跡の方向とほぼ一致している。本調査で①期→②期にかけて北門・北辺区画施設が変更されていることから、D 期については前半・後半の新旧 2 時期に細分される可能性が高くなった。

なお、この時期の大畠地区官衙の北門の位置は不明である。

また、S A 706 材木塀に併行してこの北側に S X 2250 城内道路が通っていたと推定される。前述の S D 2255 溝は、この時期の S X 2250 城内道路南側溝の可能性もある。

【③期】 S A 706 材木塀の撤去と S X 2250 城内道路の改修

9 世紀中頃に S A 706 材木塀が撤去されると、これ以降は大畠地区官衙の北辺区画施設は作られなくなると推定される。そして、城内道路の位置はやや南に、方向も東で北に約 25° 傾するように作り替えられている（註 2）。この時期の道路南側溝には新旧 2 時期あり、新しい S D 2249B 溝は 10 世紀中葉にはほぼ埋まっていた。また、S X 314 小石敷路面には政庁第Ⅳ期の軒平瓦までも敷かれ、須恵系土器を含まないことから、S X 314 小石敷路面の構築年代は政庁第Ⅳ期の開始された貞觀 11 (869) 年よりもやや遅れた 9 世紀後葉と考えられる。

なお、平安時代の S B 307 外郭東門には新旧 2 時期ある。古い S B 307A 外郭東門が掘立

式八脚門で、新しいS B307B外郭東門が礎石式八脚門である。そして、S B307 外郭東門が掘立式から礎石式へと建て替えられるのが政庁第IV期と推定されている（『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1988』）。③期のS X314 小石敷路面は、S B307 外郭東門の建て替えの時期かそれよりもやや遅れると見られる。

また、③期はその年代から見て、これまでの大畠地区官衙の遺構期区分（『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』）のE～F期またはE～G期に当たる。

【④期】 S X2250 城内道路の廃絶と井戸の設置

S X2250 城内道路が廃絶され、その路面上にS E316・317 井戸跡、S D715 環状溝が構築される時期である。また③期のS B807 南北棟のあった場所にもS E715 井戸跡が構築されている。これらの井戸の廃絶年代は10世紀中頃と考えられる。井戸の構築年代、すなわちS X2250 城内道路の廃絶年代は不明確だが、10世紀前葉～中葉と推定される。

④期はその年代から見て、これまでの大畠地区官衙の遺構期区分（『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』）のG期またはG期以降に当たる。

（註1）S E715 井戸跡の掘り込み面は遺物包含層の2B層である。2B層には須恵系土器坏・高台坏が少量含まれ、須恵器坏では回転糸切り無調整のものが主体を占める。土師器坏では回転糸切り無調整のものも多いが、回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリされたものの方が多い。9世紀前半～10世紀前半頃の遺物包含層で、主体は9世紀後半頃と考えられる。

（註2）大畠地区的西側の六月坂地区の第12・18次調査ではS D288 溝を検出し、この溝より北側幅約10mに遺構の少ない帯状の地帯があるため、この溝を地域を区画するものと見ていた。そして、第14・23次調査ではS A706 材木堀跡（旧S D706 溝）がS D288 溝に通じるものと見ていた。しかし、その後の環境整備ではS D2249 溝を域内道路の南側溝と捉えて、域内道路の一部を遺構表示し、現地説明会などでも説明してきた経緯がある。S D288 溝埋土からは政庁第IV期の平瓦、底部が回転糸切り無調整の土器・須恵器坏が出土し、埋土上部からは須恵系土器が出土しており、出土土器・瓦の様相がS D2249B 溝と同様であることから、S D2249 溝がS D288 溝に通じる可能性が高い。しかし、S D288 溝がS D2249 溝とS A706 材木堀のどちらに通じるのかは、未調査部分を多く残しているため、今後の課題としたい。

III. 第 58・60 次調査資料の追加報告

今年度は第 5 次 5 カ年計画の最終年度にあたる。第 1 ~ 4 年度に実施した調査の内容については、各年度ごとに報告してきた（年報 1989~1992）。その中で第 58・60 次調査資料の一部に未報告のものがあったので、最終年度の本年報に収録することにした。

1. 第 58 次調査

第 58 次調査で未報告であった遺物には、小ピットより出土した須恵器蓋転用硯がある（第 37 図）。口径は 12.6cm と小型である。つまみはリング状で、径 4.7cm と大きい。内容には低いかえりがある。緑色の自然釉が外面に掛かる。内容のかえりより内側には摩滅痕・墨痕が残り、硯に転用されている。形態からみて、8 世紀初頭頃のものと考えられる。



第 37 図 第 58 次調査出土土器

2. 第 60 次調査

墨書き器で未報告のものには、「政口（カ所）」（第 38 図 5）、「選」（第 38 図 6・11）、「生万」（第 38 図 10）、「右」（第 38 図 12）、「火口」（第 38 図 13）、「厨」（第 38 図 14）、「器」（第 39 図 7）、「午」（第 39 図 9・10）などがある。

この中で、第 38 図 5 の「政口（カ所）」は、官衙の性格を表す語として注目される。第 37 図 10 の「生万」は合わせ文字で書かれており、吉祥語と思われる（平川、1991）。

第 38 図 16 は文字の一部しか残存しておらず、文字を確定できないが、坏の体部に横位で書かれている。

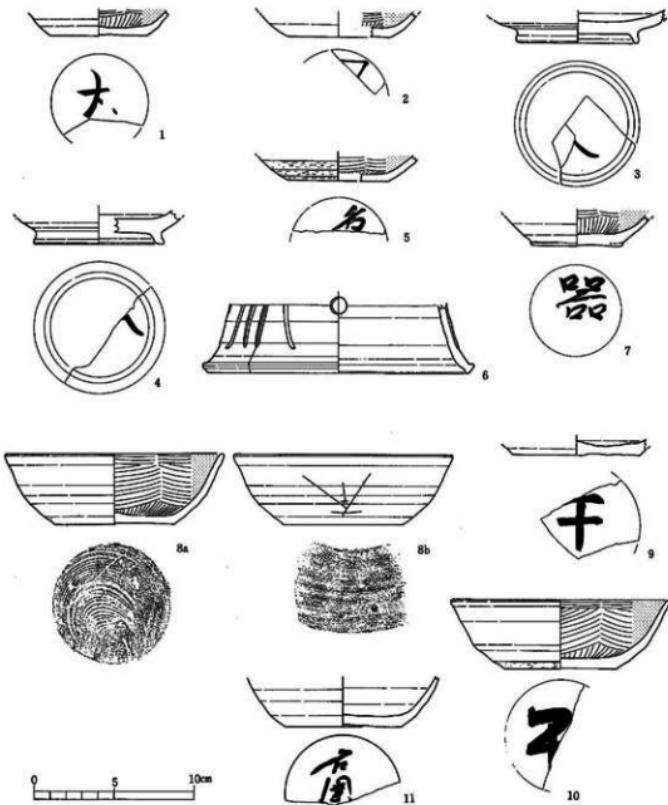
また、『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991 第 28 図 2 に掲載した墨書き器（第 39 図 11）は、「石口」の 2 文字目がへら切りの中心にかかっているため確定が難しいが「團」である可能性が高く、「石團」であるとすれば、石城団（磐城団）を省略したものと思われる。石城団は、『統日本後記』承和 15(848) 年 5 月 13 日条に「磐城團擬小穀陸奥丈部臣繼嶋」・「伊具郡麻績郷戸主磐城團擬主帳陸奥臣善福」と見え、その存在が知られる（註 1）。

漆で記号を描いた土器が 1 点（第 38 図 4）、焼成後に釘で「本」と書いた土器が 1 点（第 39 図 8）ある。漆が付着している土器が 6 点（第 40 図 1~6）ある。1~3・6 は坏を漆塗りのパレットとして使用したもので、5 は瓶？の高台部をパレットに転用している。4 は甕を漆容器として使用しており、内面全体と口縁部の外側に漆が垂れて付着している。



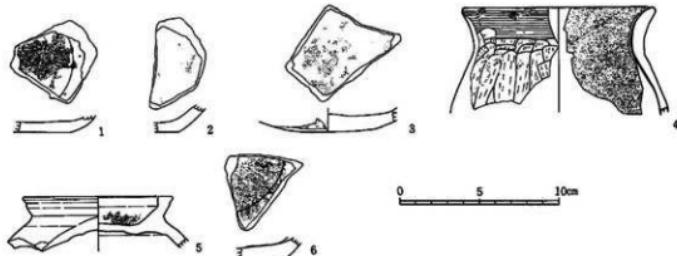
番号	出土地点	種類	器種	特徴	測定	品番号	番号	出土地点	種類	器種	特徴	測定	品番号
1	SE2101 薩辺	須恵器	高台	底部：切り落し不明、高台→右 片 クロナデ、不明墨書き	8448	9	SK2106	須恵器	片	底部：回転へラ切り、不明墨書き		8448	
2	SE2101B-3	須恵器	片	底面外側：斜船ケズリ、不明墨書き、底盤内面：ロクロナデ	8448	10	SK2107	須恵器	片	底面：回転斜切り(右)、墨書き「生万」 (合わせ文字)		8448	
3	SE2101B-3	土師器	片	体部：不明墨書き	8448	11	SK2111	須恵器	片	底面：へラ切り、墨書き「廣」、底面内 面：不明墨書き		8448	
4	SE2101B	須恵器	片	底部：へラ切り、底盤記号	8432	12	SK2111	須恵器	片	底面：へラ切り、墨書き「右」		8448	
5	SK2106-2	須恵器	片	底部：回転斜切り(右)、墨書き「政 二(所持)」	8448	13	K511	須恵器	片	底面：回転斜切り、墨書き「火口」		8448	
6	SK2106	須恵器	片	底盤：へラ切り、墨書き「廣」	8448	14	P52	土師器	片	底面：手持ちヘラケズリ、墨書き「前」		8448	
7	SK2106	須恵器	底盤	へラ切り、不明墨書き	8448	15	P52	土師器	片	底面・下端：手持ちケズリ 底面：墨書き「口(方)」		8448	
8	SK2106	須恵器	片	底盤：へラ切り、不明墨書き	8448	16	SD2117	須恵器	片	体部：不明長書き(横2)		8448	

第38図 第60次調査出土遺物(1)



番号	出土地点	種類	芯種	特徴	備考	番号	出土地点	種類	芯種	特徴	備考	番号
1	B58	土師器	环	底部：回転糸切り 墨書き「口(大力)」		9448	7	RF-62-2	土師器	环	底部：回転糸切り(2度切り) 墨書き「器」	8446
2	B58	土師器	环	底部：回転糸切り、不明墨書き		9448	8	BN-54-2	土師器	环	底部：回転糸切り、ヘラ削き、体部：焼成斑書き「本」	8451
3	B58	灰釉陶器	塊	底盤：99号型式；内面研磨・墨板、 底底：不明墨書き		9448	9	BN-53-2	灰陶器	环	底部：ヘラ切り 墨書き「口(牛糞)」	8446
4	D64	灰陶器	高台型	底部：回転糸切り→高台→口 クロマツ、不明墨書き		9448	10	BN-53-2	土師器	环	底部：体下部：回転ヶザリ。 底底：墨書き「牛」	8448
5	D67	土師器	环	底部：体下部：回転ヶザリ。底 墨書き「口(名力)」		9448	11	SE2101B-3	灰陶器	环	底部：ヘラ切り 墨書き「右口(圓力)」	8444
6	D67	碗	内面研	内底、縦方向4対ヘラ削み		9445						

第39図 第60次調査出土遺物（2）



番号	出土地点	種類	器種	特	備	番号	出土地点	種類	器種	特	備	番号
1	SK2106	土師器	环	底部：円転系切り 底部器(バレット)		8448	4	F128 掘穴	土師器	便	肩口クロ彫割、底容器	8448
2	SK58-1	土師器	环	底部：切り離し不明(崩壊) 底容器(バレット)		8448	5	BP59-3	須恵器	瓶?	高台器を底容器(バレット)に転用	8448
3	PF3	土師器	环	肩口クロ彫割、底部、丸底 底容器(バレット)		8448	6	BP48-1	土師器	环	底部：切り離し不明(崩壊) 底容器(バレット)	8448

第40次調査 第60次調査出土遺物 (2)

註1 燐城団は、『類聚三才格』所収の弘仁6(815)年8月23日太政官符の6団6,000人(名取・玉造・白河・安積・行方・小田)には入っておらず、弘仁6(815)年8月～承和15(848)年5月の間に成立したものと考えられる。一般には、『続日本後紀』承和10(843)年4月19日条の「陸奥國の軍團兵士の数を1,000人加え8,000人に増やす」という記事の「1,000人」を「2,000人」の誤写誤伝であるとし、承和10年4月末まで6団6,000人であるから、これ以降承和15(848)年以前に成立し、『類聚三才格』所収の元慶某年太政官符や『延喜主税式』の7団制につながるものとされている(板橋、1966)。これについて、『続日本後紀』承和10年4月19日条の「1,000人」は正しく、承和10年4月段階ですでに磐城団が成立しており7団7,000人であったのが、8,000人に増やされた可能性が指摘されている(高橋、1991、鈴木、1991)。もし、通説の通り、磐城団の成立が承和10年4月以降であるとすれば、これまでこの墨書き土器を含むSE2101B 井戸跡第III層出土の土器群の廃棄年代を、共伴の漆紙文書から天長9(832)年以降でもさほど隔たらない時期に限定されるとしてきた(宮城県多賀城跡調査研究所、1992)が、墨書きされたのが磐城団成立の承和10(843)年以降となり、廃棄年代は9世紀中頃まで降る可能性が出てくる。今後、良好な資料の出土を待って再検討を加えたい。

【引用・参考文献】

- 平川南 1991 「墨書き土器とその字形—古代村落における文字の実相—」『国立歴史民俗博物館研究報告』35 pp. 69~80, pp. 123~124
- 板橋源 1966 「古代陸奥軍団考」『軍事史学』5 p. 12
- 高橋崇 1991 『律令国家東北史の研究』pp. 250~252
- 鈴木拓也 1991 「古代陸奥國の軍制」『歴史』77 p. 24
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1992 『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991 pp. 87~91

IV. 現状変更に伴う調査

多賀城跡発掘調査第5次5カ年計画（平成1～5年度）の期間中に、現状変更に伴う発掘調査を10件実施した。これらは特別史跡多賀城跡附寺跡第2次保存管理計画のA2・C整備活用地区にあたり、現在住宅地となっているものの、その地盤に遺構の存在が予想されていた地域である。発掘調査を実施したのは住宅の増改築や浄化槽の設置などに関わるもので、その結果、後世の削平をまぬがれて古代の遺構や堆積層が残存していたのは7件である。ここでは、その結果の成果について地区ごとにまとめて報告する。

丸山地区

1. 佐藤長右エ門宅の調査

位置：多賀城市市川字丸山1

調査期間：平成5年9月20～29日

原因：増改築・浄化槽の設置

発掘調査面積：104 m²

調査対象地区について（第41図）

調査対象地区は政府跡の北西70mの平坦面（標高約35m）で、北側が六月坂地区的丘陵南斜面となっている。政府跡との間は、市道市川線と民家がある。この地区は政府跡から北西に延びる平坦面に位置していることから、建物跡などの遺構の存在が予想された。調査対象は緩やかに南東に傾斜している。なお、この地区は通称五輪屋敷と呼ばれている。

発見した遺構と遺物

発掘調査の結果、掘立式建物跡6棟の他、溝・土壌などを検出した（第42図）。

層位（第42図D-D'）

第1層：表土・盛土。

第2層：黒褐色土で炭化物を含む。

第3層：褐色土で縮まりがある。

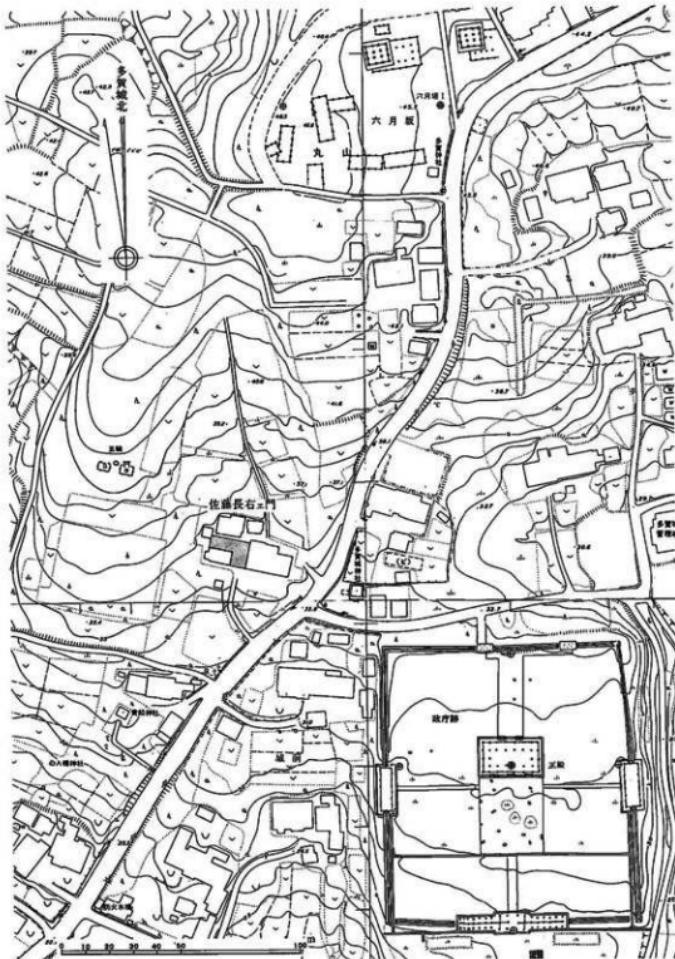
第4層：地山。黄褐色土の地山土と凝灰岩の岩盤。

第1層は表土および宅地造成の盛土で、厚さ20～60cmである。第2層は厚さ10～20cmで、調査区南東部を中心に堆積している。第3層は厚さ10cm前後で調査区東側の窪地部分に堆積している。

（1）掘立式建物跡

S B2222A・B 建物跡

調査区北西に位置する東西4間以上の建物跡で、地う尼およびSD2227溝上面で柱穴4個



第41図 丸山地区発掘調査区

調査区北西に位置する東西4間以上の建物跡で、地山およびSD2227溝上面で柱穴4個を

検出した。柱穴はほぼ同位置で重複し、A・Bの2時期がある。今回検出した柱穴は南側の柱列と推定され、東端の柱穴は南東隅のものとみられる。このうち、Aの柱穴3個で抜取穴、B柱穴のすべてで柱痕跡、3個で抜取穴を確認した。Bの柱間は東から2.39m・2.31m・2.21mである。方向はB建物跡の南側柱列で東西基準線に対してE $2^{\circ} 30'$ Nである。

A柱穴は一辺70~100cmの方形で、深さ24~60cmである。埋土は褐色土・黄褐色土が互層になっている。B柱穴は一辺60~80cmの方形で、深さは26~53cmである。埋土は暗褐色土・褐色土で地山ブロックを含む。柱穴跡は径21cmである。なお、南東隅のB柱穴では、柱痕跡の下に軒丸瓦が敷かれていた（第42図C-C'）。

遺物としては（第43図）、B柱穴埋土から前述の軒丸瓦431番の瓦当部（政庁第III期：5）、抜取からロクロ土師器・甕、須恵器坏（ヘラ切り・回転糸切り）・蓋・甕・風字硯（7）が出土している。その他、B柱穴の埋土か抜取穴か不明だが、ロクロ土師器坏（1）が出土している。その他、B柱穴のいずれか不明だが、埋土から非ロクロは土師器坏が出土している。

S B2223 建物跡

SB2222A・B建物跡の南側に位置する東西3間以上・南北2間以上の東廂付き建物跡である。地山およびSD2227溝上面で、第2層に覆われて柱穴を6個検出した。今回検出した柱穴は北側柱列と身舎・廂の東側柱列である。すべての柱穴で、柱痕跡を検出している。柱間は北側柱列の身舎が東から1.99m・2.56mで、廂の出が、1.86mである。東側柱列は身舎が1.90m、廂が2.07mである。方向は北側柱穴で東西基準線に対してE $2^{\circ} 30'$ Nである。

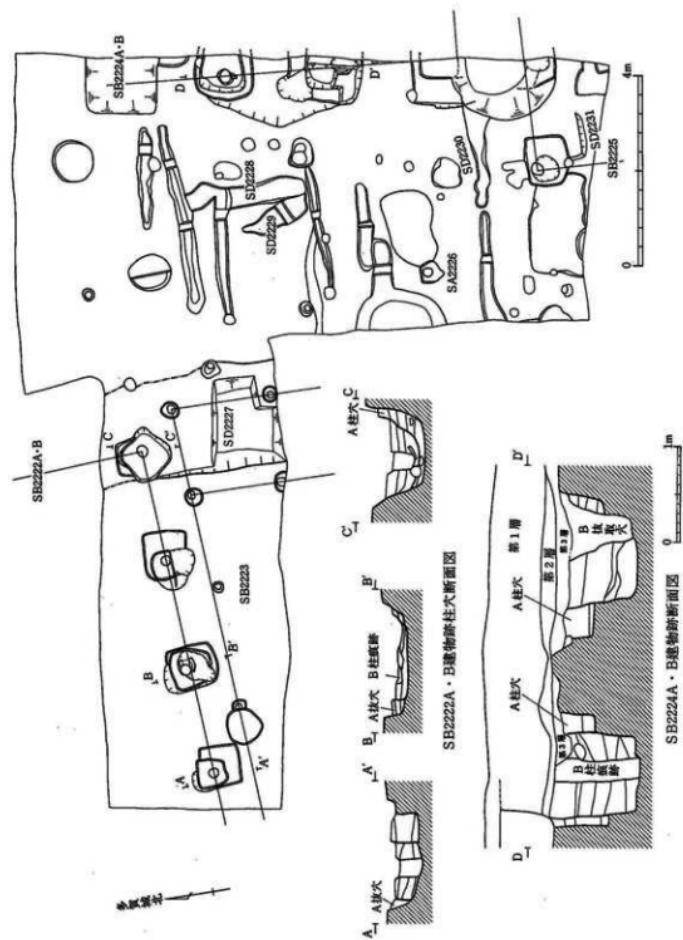
柱穴は隅丸方形もしくは円形で、大きさが20~40cm、深さ5~13cm以上ある。埋土は褐色土で地山ブロックを多量に含む。柱痕跡は径10~16cmである。遺物は出土していない。

S B2224 A・B建物跡

調査区東端に位置する南北2間以上の建物跡で、第3層下の地山で柱穴3個を検出した。柱穴は同位置で重複し、A・Bの2時期がある。このうち、Aの柱穴1個で抜取穴、B柱穴の2個で柱痕跡と抜取穴を確認した。Bの柱間は北から2.46m・2.50m前後である。方向はB建物跡の西側柱列が南北基準線に対してN 5° Eである。

A柱穴は一辺1.2~1.4mの方形とみられ、深さ41~60cmである。埋土は褐色土・明黄褐色土で地山土・凝灰岩ブロックを含んでいる。B柱穴は一辺0.7~1.0mの方形と見られ、深さ70~90cmである。埋土は暗褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土で地山土・凝灰岩ブロックを含んでいる。柱痕跡は径約21cmである。

遺物（第43図）は、A柱穴埋土から丸瓦II B類、B柱穴埋土からは平瓦II B類a1タイプ



第42図 佐藤長右工門宅検出遺構

(政庁第Ⅱ期：6) が出土している。この他、A・B柱穴検出段階で、ロクロ土師器坏(回転糸切り・手持ちケズリ・回転ケズリ)・高台坏・ロクロ甕・須恵器坏(ヘラ切り)・瓶・甕・須恵系土器坏・高台坏・鉢・平瓦ⅠA類(政庁第Ⅰ期)・ⅡB類(政庁第Ⅱ期)・丸瓦ⅡB類・須恵器甕体部破片の転用硯(8)、砥石(11)が出土している。柱穴断ち割り時にA柱穴から遺物がほとんど出土していないので、これらはB柱穴の埋土か抜取穴に伴う可能性が高い。

S B2225 建物跡

調査区の南東隅に位置する建物跡で、北側柱列とみられる柱穴を地山で2個(1間分)検出した。西に位置する柱穴は、北西隅のものとみられ、柱痕跡と抜取穴を、西から1間目の柱穴では抜取穴を確認している。柱間は2.40m程度と推定される。柱列の方向は東西基準線に対してE3°前後Sである。西側の柱穴は東辺80cm・北辺100cmの長方形で深さは18cm以上、柱痕跡は径22cmである。

遺構(第43図)は、柱穴埋土からロクロ土師器坏(回転糸切り:2・手持ちケズリ)、須恵器坏(回転糸切り→手持ちケズリ、ヘラ切り→手持ちケズリ)・高台坏・ロクロ甕・須恵器坏・須恵系土器坏・平瓦ⅡB類b2タイプ(政庁第Ⅲ期)、丸瓦ⅡB類が出土している。

(2) その他の遺構

S D2227 溝

調査区北側中央部に位置する南北方向の溝で、地山が検出した。溝の南部は第2層によつて覆われている。S B2222・2223建物跡と重複し、それより古い。

この溝は幅1.9~2.4m・深さ52~58cmで、断面が逆台形状をしている。溝の方向は西端が南北基準線に対してN1°Eである。溝内の堆積土は地山ブロックを含む褐色土である。遺物は須恵器甕の破片が出土した。

小柱穴

小柱穴は調査区中央部付近で3個検出された。いずれも円形ないしは不整形で、組み合つものがない。大きさは約30cmである。このうち、S A2226柱穴から灰釉陶器の折縁皿が出土している(第43図3)。

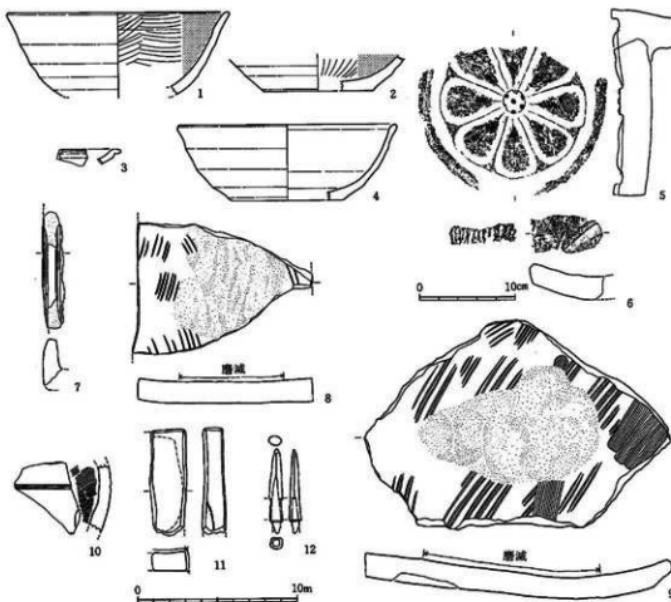
小溝

小溝は調査区東側で、地山および第3層上面で9条検出された。いずれも幅20~30cmで、東西方向が7条、南北方向が2条である。このうち、S D2228溝から須恵器坏(第43図4)、S D2229溝から鉄鎌(同図12)、S D2230溝から三筋壺(同図10)、S D2231溝から転用硯(同図9)が出土している。

(3) 積層出土の遺物

第2層出土遺物 (第44・45図)

第2層からは多量の土器・瓦などが出土している。第44図は土師器坏、2~8は須恵



番号	遺物・層位	種類	部種	特	表	登録	通番号
1	SB2226柱穴	土師器	片	口クロ調理、体部下部切削ケズ有り。内面：ミガキ・黒。口径14cm。		R25	12255
2	SB2225柱埋土	土師器	片	回転系切り、内面：放状模様有り。黒。底径7cm。		R26	12255
3	SA2226柱穴	灰釉陶器	盤	折鉢底の口部底で、刷毛丸み。他成、内外面に火候、練質(灰色)。胎土：均質。		R2	12255
4	SB2228築	陶器	片	回転系切り、削縁手持ちケズリ。生焼け。口径13.8cm底径7cm器高4.8cm。		R6	12255
5	SB2226柱穴埋土	軽瓦	431番	八葉重弁蓮瓣文、蓮子1個。他成：練質、胎土：瓦当泥質質、瓦瓦泥砂粒多い。		R31	12256
6	SB2226柱穴埋土	平瓦	II B型	a1 タイプ、凸面：太綱叩き→フブレ、凹面：直目ナメ。他成：軟質(灰褐色)。		R32	12256
7	SB2226柱穴拔欠	瓦	尾字	尾字認定、側切底部破片、ケズリ仕上げ。裏面：側切内面下部に墨板。		R1	12255
8	SB2224柱穴	瓦	軋泥瓦	裏側認定底部破片。当瓦板→裏側磨滅。外面：平打切欠。		R3	12255
9	SB2231築	瓦	軋泥瓦	裏側認定底部破片を打ち欠く。内面：当瓦板→裏側磨滅。外面：平打切欠。		R27	12255
10	SB2230築	中里陶器	片	割高片、刷毛文。上部に自然縫、内面：ナメツク。他成：練質(赤み灰褐色)。		R4	12255
11	SB2224柱穴	石製品	砥石	練質の砂利。主使用面は上面。その他の整形研磨・部分使用。		R28	12255
12	SB2229築	鉄製品	鉄錠	錠身の断面は菱形状の偏円形で、両側に一対の滑輪がある。錠身残長4.8cm。		R29	12257

第43図 佐藤長右工門家の遺構出土遺物

系土器で杯(2)・高台坏(3~5)・小型坏(6)・小皿(7)・高台皿(8)、9・10は綠釉陶器の香炉・碗、11は青磁碗、12は風字硯、14は須恵器髪の転用硯である。この他、須恵系土器台付鉢・耳皿(焼焼き)などがある。

これらの中で、もっとも多いのは須恵系土器で坏・皿などの口縁部が79点ある。また、これらの底部は88点あり、そのうち28点に高台の付くものがある。台付鉢は4点、耳皿は1点である。

瓦(第45図)には政庁第1V期の軒平瓦721番Bが1点(1)、平瓦には政庁第1期のIA~D類が19点(2~4)、政庁第11期のII B類が30点(5)、政庁第III期のII B類が16点(6)、政庁第IV期のII B類が7点(7)・II C類が13点(8)ある。丸瓦には玉縁~有段部が20点、体部が28点ある。

第1層の出土遺物(第44図)

第1層からも各種の土器・瓦などが出土しているが、主なものについて述べる。13は灰釉陶器碗の上半部を打ち欠いたもので、内面には童ね焼きの高台痕がある。金属顕微鏡で観察したところ、内面の大部分は施釉部分も磨り減っており、その大・小の窪みには金の小粒塊が付着して残っていた。金泥のための転用硯とみられる。

15は鉄製刀子とみられる残片である。

まとめ

1. 遺構の年代

【建物跡】

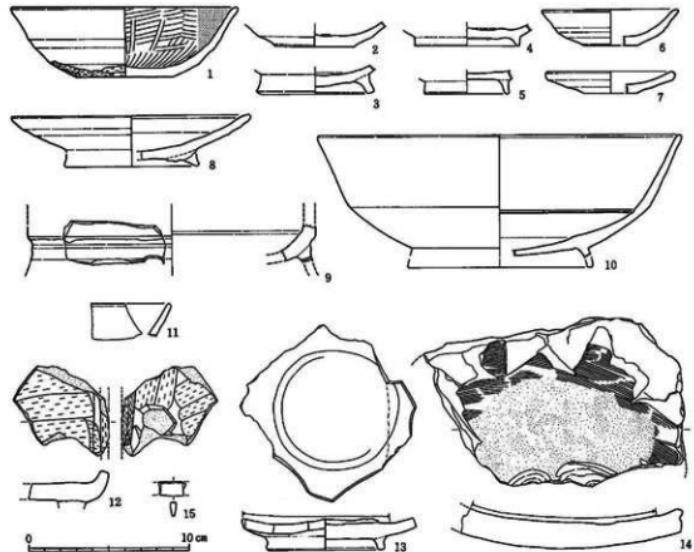
今回の調査で検出された建物跡は、建て替え分も含めると6棟である。調査区西側の建物跡にはSB2222A・BとSB2223がある。SB2222B柱穴埋土から政庁第III期の軒丸瓦431番、抜取穴からロクロ土師器坏・須恵器杯(ヘラ切り・回転糸切り)が出土している。

この事から、SB2222B建物跡は政庁第III期以降のもので、9世紀代に廃絶したことが知られる。SB2223建物跡は遺物が出土していないが、柱穴の形状が隅丸方形もしくは円形で、大きさが20~40cm程度である。同様な形状・規模のSA2226柱穴からは10世紀の灰釉陶器折縁皿が出土しており、SB2223建物跡もこの頃のものとみられる。

東側の建物跡にはSB2224A・B、SB2225がある。SB2224B柱穴埋土からは政庁第II期の平瓦、柱抜取穴とみられる柱穴検出時の部分から須恵系土器坏・鉢が出土している。

このことからSB2224B建物跡は政庁第11期以降のもので、10世紀前葉に廃絶したことが知られる。SB2225柱穴埋土からは回転糸切りの土師器坏、抜取穴から須恵系土器坏が出土していることから、9世紀後半代のもので、10世紀前葉に廃絶したことが知られる。SB2224BとSB2225は終末が10世紀前葉であるが、両者は近接しており同時存在とはみなし難

い。S B2224BがAの建て替えであることを考慮すると、S B2225のほうが新しい可能性がある。

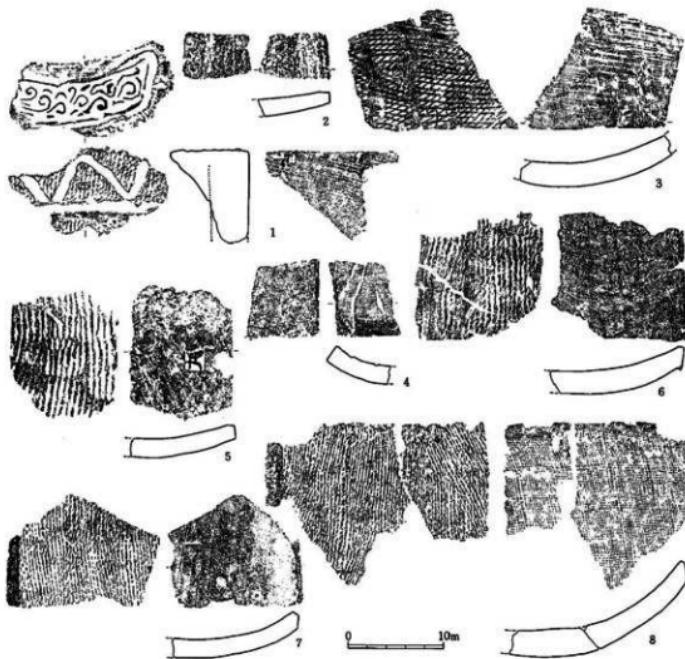


番号	部位	種類	器種	特	測	登録	番号
1	第2層	土師器	坪	同軸系切り一全体一底盤半持ちケズリ。内面：放射状くぎ孔。口径 14.2cm 高径 6.0cm。	R7	12255	
2	第2層	須恵器土器	坪	同軸系切り、内面滑らか・外面滑らかあるロコロ。胎土：明褐色。砂粒含む。底径 4.9cm。	R13	12255	
3	第2層	須恵器土器	高台坪	規則的ケロナ。外縁すり角高台。胎土：明褐色。砂粒含む。高台径 7.3cm。	R14	12255	
4	第2層	須恵器土器	高台坪	滑らかなロコロナダ。直立気味角高台。胎土：明褐色。砂粒含むが均質。高台径 6.6cm。	R15	12255	
5	第2層	須恵器土器	高台坪	同軸系切り一ロコロ。直立気味角高台。胎土：明褐色。砂粒含むが均質。高台径 5.3cm。	R16	12255	
6	第2層	須恵器土器	小型坪	滑らかなロコロナダ。胎土：褐色。均質。口径 8.5cm。底径 3.5cm。高さ 2.3cm	R11	12255	
7	第2層	須恵器土器	小瓶	滑らか。擴なロコロナダ。胎土：明褐色。砂粒含む。口径 8.1cm。底径 3.4cm。器高 1.4cm。	R12	12255	
8	第2層	須恵器土器	高台瓶	滑らかなロコロナダ。二角断面？。胎土：明褐色。砂粒含む。口径 15cm。	R17	12255	
9	第2層	埴輪陶器	香炉	体下部に脚上部襖片。酒かしれあり。釉調：淡緑色。焼成：灰褐色で焼質。胎土：均質。	R9	12255	
10	第2層	埴輪陶器	壺	体路背面に残。内面に横線状の段。釉調：淡緑色(?)。焼成：やや軟質。口径 22.8cm	R20	12255	
11	第2層	銅	鏡	直口鏡で外縁、釉調：青白(?)灰褐色。焼成：透明感ある灰白色で焼質。胎土：無泥。	R21	12255	
12	第2層	鏡	鏡	乳頭装置。右側切欠。側面内側に一底盤跡あり。その他はケズリ仕上げ。	R9	12255	
13	第1層	軒用鐵	金泥鐵	灰褐色漆塗器の体上部を打ち抜く。内面のナゲ溝が残り残っている。外縁は平行切き。	R22	12255	
14	第2層	鏡	須恵器漆体鉢破片	須恵器漆体鉢破片を打ち抜く。内面のナゲ溝が残り残っている。	R10	12255	
15	第1層	鉄製品	刀子	身に寄る基理片赤。残長 17mm。幅 9mm。厚さ 1mm 下厚 1.5mm。	R30	12255	

第44図 佐藤長右エ門宅の堆積層出土遺物

【その他の遺構・堆積土】

その他の遺構には S D2227 南北溝や東西・南北方向の小溝群がある。S D2227 南北溝は建物群よりも古い。須恵器甕の破片が出土しているだけで、年代の限定は難しいが9世紀



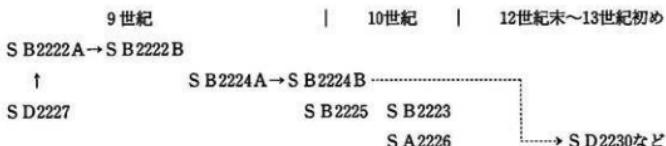
番号	層位	種類	分類	特	備	登録	踏査号
1	第2層	軽平瓦	721番B	gタイプ。均整唐草文。側面に画綱1本。頂面は鋸切き→浅い波状文。平瓦はB1類。		R38	12256
2	第2層	平瓦	1A類	凸面:ナデ、凹面:布目(重複)→ナデ。焼成:硬質(灰色)。胎土:砂粒少なく均質。		R33	12256
3	第2層	平瓦	1B類	凸面:斜格子叩き→ナデ。凹面:布目(重複)→ナデ。焼成:硬質。胎土:砂粒少なく均質。		R35	12256
4	第2層	平瓦	1B類	凸面:鋸切き瓶→ナデ。凹面:布目(重複)。焼成:硬質。胎土:砂粒少なく均質。		R34	12256
5	第2層	平瓦	1B類	凸面:大嘴叩き→ツブレ。凹面:ナデ→削り丸「丸」K。焼成:軟質(褐色)。胎土:砂粒含む。		R36	12256
6	第2層	平瓦	1B類	g2タイプ。凸面:大嘴叩き→ツブレ。凹面:瓶→布目→ナデ。焼成:硬質(暗赤褐色)。		R37	12256
7	第2層	平瓦	1B類	凸面:鋸切叩き→ツブレ。凹面:瓶→布目→路ナデ。焼成:硬質(暗黒色)。砂粒含む。		R39	12256
8	第2層	平瓦	1C類	凸面:鋸切叩き。凹面:瓶→布目。焼成:硬質(灰色)。胎土:砂粒含む。		R40	12256

第45図 佐藤長右工門宅の堆積層出土瓦

以前とみられる。小溝群は第3層を掘り込んでいることから、SB2224建物跡より新しく、10世紀前葉以降のものである。遺物は須恵器壺・須恵器甕転用硯・単線文の三筋壺破片が出土している。三筋壺の特徴からみると12世紀末から13世紀初め頃のものとみられる。

第2層からは土器・瓦が出土している。土器は須恵系土器が大部分で・壺・小型壺・高台壺・小皿・高台皿などからなっている。このような組成は、第61次調査第7層出土土器群や第62次調査SK2169～2171土塘出土土器群を含むもので、10世紀中葉からそれ以降に廃棄されたものとみられる。

以上を整理すると次のようになる。



佐藤長右工門宅における遺構の変遷

2. 調査区の特徴

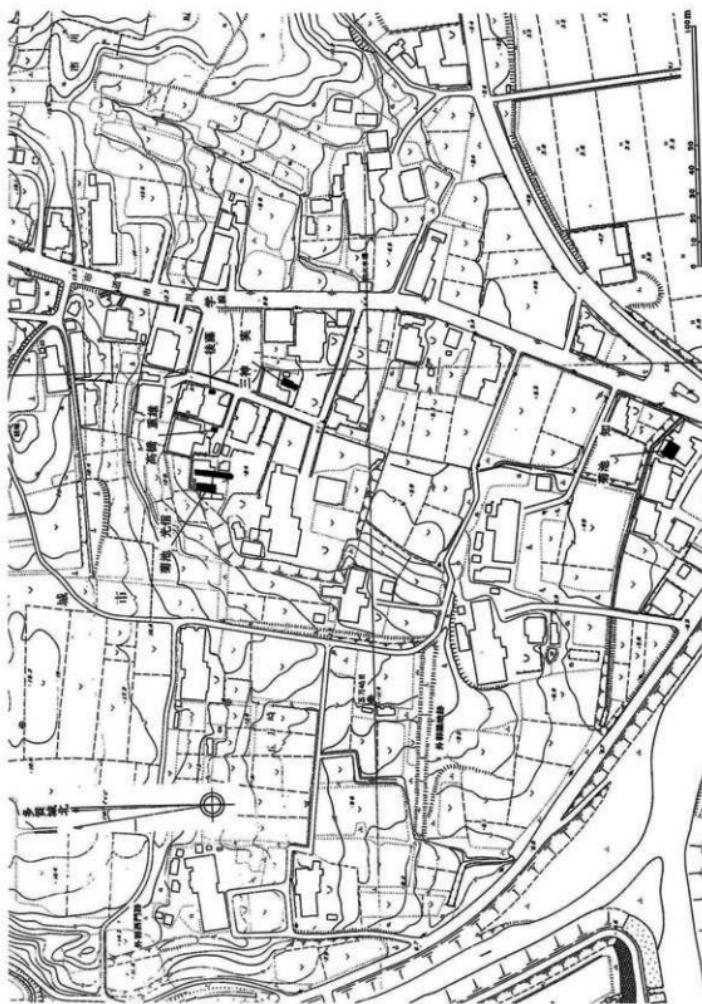
今回の調査で、9世紀から10世紀代の建物跡が、細かくみれば6時期にわたって存在することが明らかとなった。また、出土遺物には土師器・須恵器・須恵系土器・灰釉陶器・綠釉陶器・風字硯・転用硯・瓦などがある。ここで注目されるのは、小面積の調査であるにもかかわらず、綠釉陶器の香炉や椀、金泥のための転用硯(灰釉陶器)などが出土していることである。政府の北西部に隣接していることから、その性格の一端を示しているものと思われる。

また、瓦で興味深いのは第2層出土のものをみると、政府第II期のものがやや多いほかは、第I～IV期までのものがほぼ同じ量であるという点である。瓦の出土量は今回発見された建物跡が瓦葺きであることを示すほどのものではない。これらの瓦の出土状況は政府に使用されたものが、隣接するこの地に廃棄されたためかと思われる。

五万崎地区

調査対象地区について(第46図)

五万崎地区については合計5カ所の発掘調査を実施した。調査対象地は五万崎から坂下地区に広がる丘陵平坦面に南から沢(谷)が入り込んだところで、菊池光信・高橋重雄・後藤 学・三神 実宅は丘陵裾の緩斜面から谷に形成された沖積地に位置している。標高は10～8mで、南に僅かに傾斜しているものの東西・南北約100mの広い平坦面となっ



第46図 五万崎地区発掘調査区

ている。このため、建物跡などの古代の遺構の存在が予想されていた。なお、菊池光信宅の北・西側は急崖になっており、これが古代の造成に関わるものか問題になっていた。

また、菊池 知宅は外郭南辺築地跡の南約100mに位置している。標高は約5mである。この地区は城外であるが、平坦地にあることから何らかの遺構の存在が予想された。

1. 菊池光信宅の調査

位置:多賀城市市川字五万崎 34-7

調査期間:平成3年10月29日

原因:増改築発掘調査面積:76 m²

発見した遺構と遺物

調査区は間を4mあけて、幅2~3mの南北トレンチを東と西に2本設定した。その結果、整地層上面で掘立式建物跡3棟、井戸跡1基を検出した。

層位(第47図)

東・西のトレンチでは堆積層に若干の違いはあるが、基本的には次のようになる。

第1層:表土。

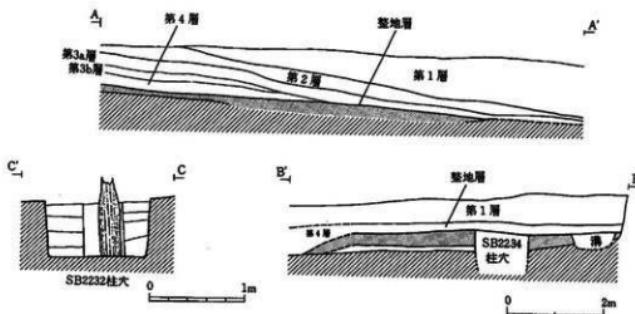
第2層:黒褐色砂質土。灰白色火山灰を小ブロック状に含む。

第3層:暗褐色砂質土。

第4層:黒褐色砂質土。

第5層:整地層。

東トレンチ(A-A')では表土下に第2~4層が厚さ20~100cm、西トレンチ(B-B')では第4層が厚さ約20cm堆積している。第5層は地山ブロックを含む整地層で、西トレンチでは厚さ



第47図 菊池光信宅の層位

約20cm、東トレンチでは厚さ約10cmであるが、地山の砂層を掘り込んで整地している部分もある。整地層の範囲は両トレンチの北端から南7~8mの間で、さらに北側に延びている。

(1) 挖立式建物跡(第48図)

SB2232 建物跡

東・西トレンチにわたって、南側および東側柱列の柱穴3個を第4層下の整地層上面で検出した。西トレンチでは柱穴のほぼ中央に柱材が残っていたが、東トレンチの2個の柱穴では柱痕跡を明確にできなかった。この東側柱列の2個で、柱穴のほぼ中央に柱位置を想定すると、その柱間が3.0m(10尺)となる。南側柱列の柱間は、2・4m(8尺)となる。

その結果、この建物跡は東西4間以上、南北2間以上と推定される。方向は南側柱列で東西基準線に対してE7~8°Nとなる。柱穴は一辺約1.1mで、西トレンチの柱穴で残っていた柱材は径25cmである(第47図左下)。この柱材は内藤俊彦氏の同定によればカヤとみられる(写真図版16-15)。

なお、この建物跡の柱穴はいずれも整地層の分布範囲内に収まることから、一連のものとみられる。

SB2233 建物跡

南北2間分の柱穴3個を第4層下の整地層上面で検出した。SB2234建物跡より古く、南端の柱穴で柱痕跡を確認した。他の2個の柱穴で、そのほぼ中央に柱位置を想定すると、柱間は1.95m(6.5尺)の等間となる。柱穴は東トレンチに延びていないことから、西側に展開する梁行2間の建物の東妻とみられる。方向は南北基準線に対して、約N3°Wである。柱穴は長辺55cm・短辺45cm程度の長方形とみられる。柱痕跡は径23cmである。

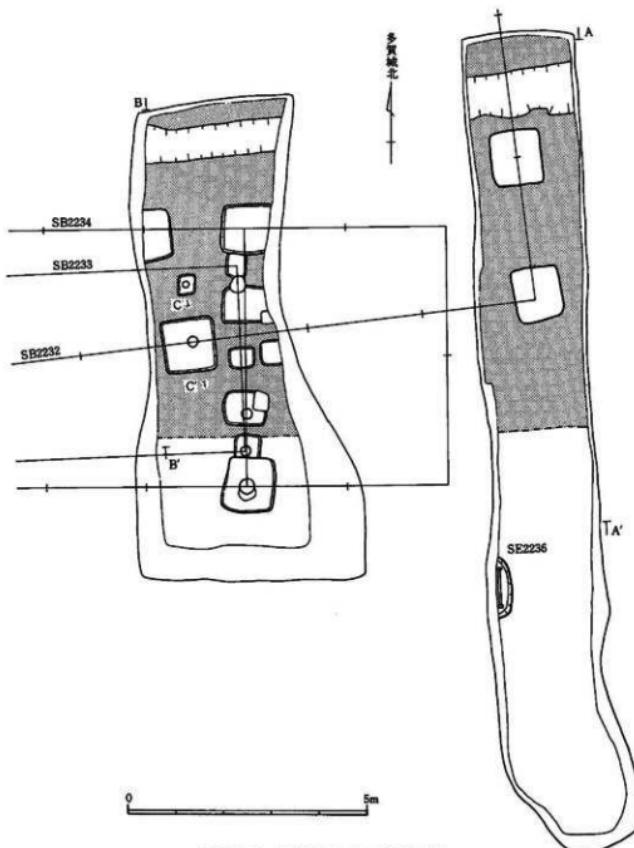
SB2234 建物跡

北側柱列の柱穴2個、南側柱列の柱穴1個、間仕切りとみられる柱穴2個を第4層下の整地層・地山の砂層上面で検出した。柱痕跡が検出されなかつたものについて、柱穴のほぼ中央に柱位置を想定すると、北側と南側柱列の柱間は2.1m(7尺)となる。同様に間仕切り部分の柱間は北から1.5m(5尺)・2.4m(8尺)・1.5m(5尺)となる。また、東トレンチに東妻の柱穴が及んでいないことから、間仕切りは東妻から2間目に位置すると考えられる。東妻の柱間は2.7m(9尺)の等間と推定される。この場合、建物は桁行4間以上、梁行2間の東西棟とみられる。方向は東西基準線にはほぼ一致する。柱穴は北・南側柱列が一辺約1.0m、間仕切りが一辺70~80cmの方形である。柱痕跡は南側柱列が径約30cm、間仕切りが径約21cmである。

(2) その他の遺構

SE2236 井戸跡

東トレレンチ西端の第1層下の地山(砂層)上面で、井戸跡東端部を検出した。隅丸方形の掘方をもち、井戸枠の側板を方形に組んだとみられるものである。側板は一边 84cm、厚さ 4 cm で、井戸枠の内法は 74cm である。方向は東側板が北で N4° W である。



第48図 菊池光信宅の検出遺構

(3) 出土遺物(第 49 図)

出土遺物には、土師器・須恵器・須恵系土器・灰袖陶器・瓦がある。おもなものは第 49 図に示した。1 はロクロ土師器壺、2 は須恵器壺、3 はヘラ書き文字のある須恵器壺の体下部破片、4 は灰袖陶器碗である。3 は先端が平らなヘラで書いた大きな文字で、「くにがまえ」の文字とみられるが、左側が欠けているため、判読できない。灰袖陶器碗はこの他に体部破片が 2 点ある。また、瓦は数十点あり、平瓦 II B 類、有段の丸瓦が多い。

まとめ

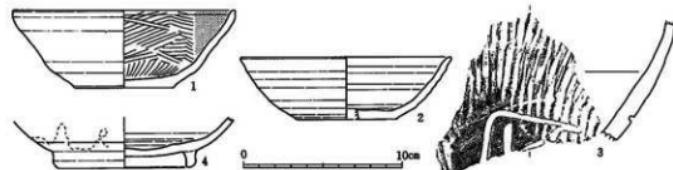
1. 今回の調査で掘立式建物跡 3 棟と井戸跡 1 基を検出した。掘立式建物跡は、いずれも灰白色火山灰を含む第 2 層下にあり、10 世紀前葉より古いことが知られる。井戸跡については、第 2 層との関係は明らかでないが、地山の砂層を掘り込んでいること、構造などから、これらの建物と関わるものとみられる。

2. 建物跡の新旧関係は次のようになる。



整地層と建物跡の関係をみると、SB2232 だけがその範囲内におさまり、それ以外の SB2233・2234 は南側柱列が外側に出てしまう。この事からみると、整地層は SB2232 を建てる際の基礎事業であった可能性がある。その後、SB2233→SB2234 は前段階の整地層を利用しながらも、一部はみ出して建てられたとみられる。

3. 整地層と建物跡は調査区外の北・西に、さらに延びる。その分布のあり方から、調査区外の北・西にある崖は、古代の造成に関わる可能性がでてきた。



部位	種類	器種	特	測	登録	番号
第 1 層	土師器	壺	円輪底切り。内面気泡に外傾。内面：斜状三ガタ。口径 14 cm、底径 6.2 cm、深さ 4.8 cm。	PC	12255	
上層	須恵器	壺	円輪底切り。内面気泡に外傾し、口縁部僅かに外反。口径 13.5 cm、底径 6.5 cm、深さ 3.9 cm。	PC	12255	
2 層	須恵器	壺	体下部破片。外面：平行切妻ヘラ書き（幅 6 cm の大きな文字）。内面：ナゲ。	PC	12255	
第 1 層	灰袖陶器	碗	体～高台部。二日月高台。灰袖は体部内外面。内面に重ね焼き痕。底土：礫混。高台径 9 cm。	PC	12285	

第 49 図 菊池光信宅の出土遺物

2. 高橋重雄宅の調査

位置:多賀城市市川字五万崎 28-4

調査期間:平成 5 年 5 月 6 日

原因:浄化槽の設置発掘調査

発掘調査面積:5 m²

層位と出土遺物

第 1 層:表土および宅地造成の土盛。

第 2 層:暗褐色砂質土。

第 3 層:褐色土。

第 4 層:灰褐色砂質土(灰白色火山灰を小ブロック状に含む)。

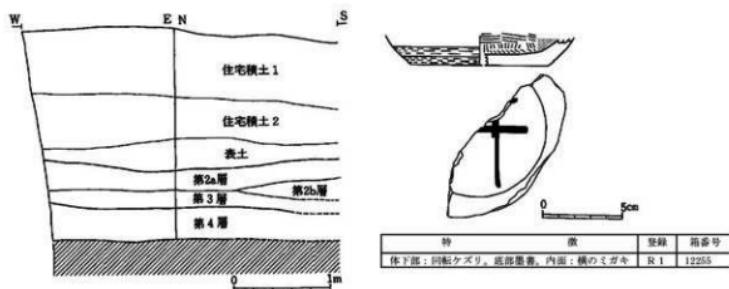
第 5 層:褐色砂質土。

第 2~4 層は土師器・須恵器・須恵系土器・瓦を含む古代の層である。第 2 層は厚さ 20~40cm で、明度の違いで a・b 層に細分される。第 3 層は厚さ 15~20 cm で、地山ブロックと炭を少量含む。第 4 層は厚さ約 30 cm で、灰色味が強く木炭を多量に含む。第 50 図は第 4 層から出土したロクロ土師器坏で、底部に墨書きがある。左側が欠けているため判読できない。

第 5 層は僅かに木炭を含む褐色砂質土で、この砂質土層は 60cm 以上の厚さをもっている。

まとめ

調査区は、建物跡群が検出された菊池光信宅の東 20m に位置する一連の沖積地である。この部分では現地表下 1.4m に、厚さ 1m 以上に及ぶ古代の層が堆積していることが、今回の調査で判明した。



第 50 図 高橋重雄宅の層位と第 4 層出土土師器坏

3. 後藤学宅の調査

位置:多賀城市市川字五万崎 28-3

調査期間:平成 5 年 5 月 6・7 日

原因:浄化槽の設置発掘調査

面積:5 m²

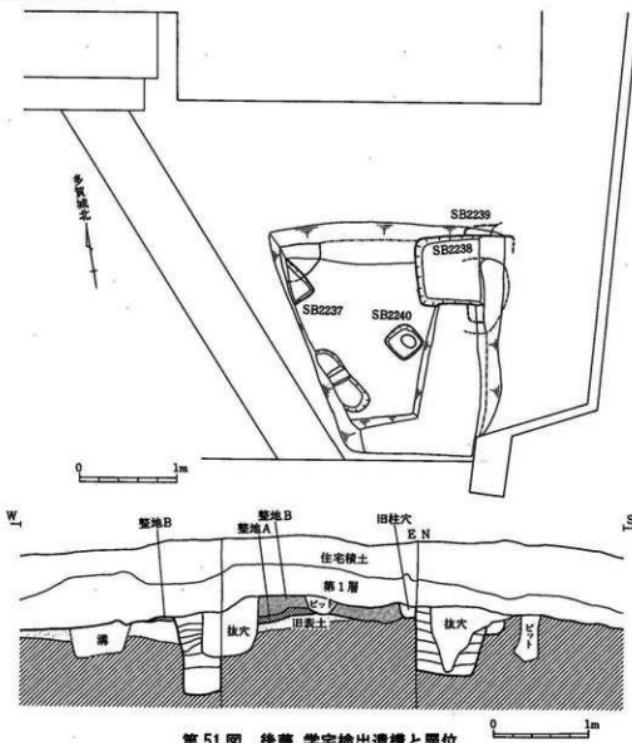
発見した遺構と遺物

発見された遺構には整地層 2、柱穴 4 がある(第 51 図)。

(1) 層位

第 1 層:表土および宅地造成の土盛り。

第 2 層:整地層 B。



第3層：整地層A(上面が焼けている)。

第4層：旧表土(東側は削平されている)。

第5層：地山土(西に向かって低くなる)。

旧表土および地山は西側に向かって傾斜している。整地層Aは地山土に暗褐色土を含んでおり、上部が赤褐色に焼けている。厚さは約10cmで、旧表土と整地層Bの間にみられる。整地層Bは地山ブロックを含む暗褐色土で、厚さ10~20cmである。

(2) 建物跡

調査区の北西隅・北東隅・中央部で4個の柱穴(SB2237~2240)が検出された。北側の3個は整地層Bを掘り込んでいるが、中央部の1個は整地層との関係が不明である。

北西隅の柱穴(SB2237)

柱穴の東隅の部分を検出した。方形で一辺50cm以上とみられる。整地層Bを掘り込んでおり、深さは90cmで、北側に抜取穴がある。柱穴埋土は明褐色土と黒褐色土を層状につき固めている。

北東隅の柱穴(SB2238・2239)

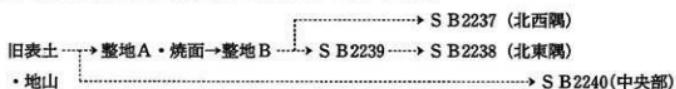
SB2239柱穴は西端部分を検出した。方形とみられ西辺が100cm、深さは32cmである。整地層Bを掘り込み、SB2238柱穴に切られている。柱穴埋土は褐色土で地山の白い地山土を斑状に含む。

SB2238柱穴は長方形で北辺が100cm、西辺が70cm、深さ70cmで南東部に抜取穴がある。整地層Bを掘り込み、SB2239柱穴より新しい。柱穴埋土は地山土と暗褐色土が混じり合い、層状につき固められている。

中央部の柱穴(SB2240)

一辺30cmの方形で、深さは20cmである。径14cmの柱痕跡がある。柱穴の埋土は黒褐色土に黄褐色土ブロックを含む。

以上の柱穴と層位(主に整地層)の関係は次のような。



調査範囲が狭いため、建物跡としてのまとめは把握し難い。しかし、SB2237・SB2238の柱穴は深さ・埋土が似ていることから、同じ建物跡の柱穴とみることもできる。その場合SB2239柱穴はそれ以前の建物跡に伴うことになる。また、SB2240の柱穴は近接してお

り、小規模であることから、これらの柱穴とは組み合わない。このようにみると、建物跡に少なくとも3時期の変遷があったことが推定できる。

また、整地層Aは焼面が伴っており、その上に整地層Bが形成されている。この整地層Aに伴う柱穴は検出されなかったが、建物などの施設が存在した可能性は十分にあろう。

(3)出土遺物

土師器壺・甕、須恵器蓋・杯・瓶・甕、平瓦・丸瓦の破片が数点出土しているが、遺構・整地層との関係は不明である。

まとめ

1. 2時期の整地層が検出された。
2. 建物跡に少なくとも3時期の変遷のあることが判明した。
3. 建物跡は調査区の外側に広がっていることが明らかになった。

4. 三神実宅の調査

位置:多賀城市市川字五万崎 26-3

原因:増改築

調査期間:平成4年9月28・30日 10月1日

発掘調査面積:20 m²

発見した遺構と遺物(第52図)

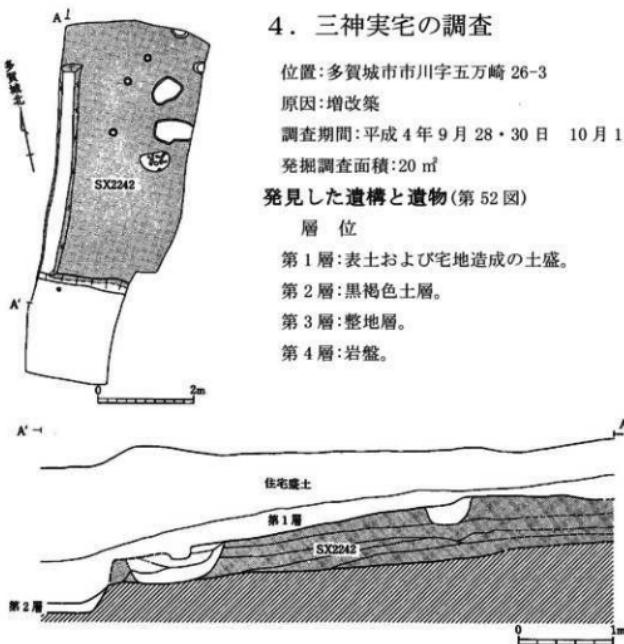
層位

第1層:表土および宅地造成の土盛。

第2層:黒褐色土層。

第3層:整地層。

第4層:岩盤。



第52図 三神 実宅の検出遺構と層位

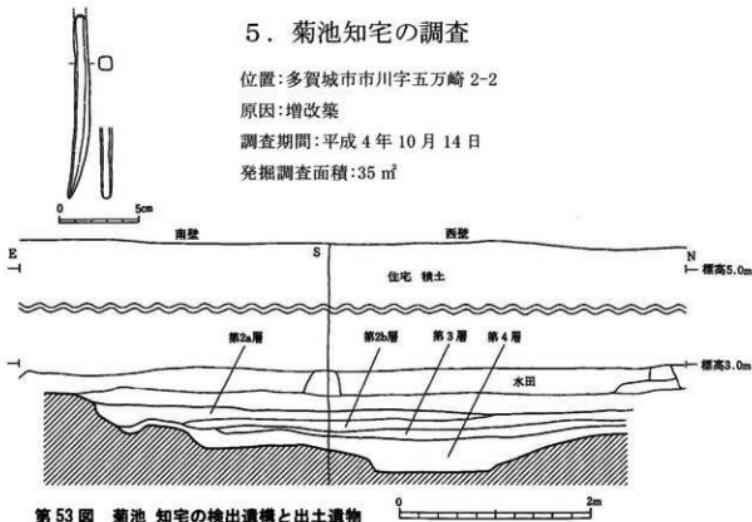
SX2242 整地層・段

整地層は現地表下 0.6~1.0m で検出した。その分布は南北 5.5m 以上、東西 3.1m 以上である。この整地層の南端は段になっている。この段は整地層の下部まで及んでおり、岩盤を削り出している。段の高さは岩盤部分が 30cm、整地層部分が 15cm で、合計 45cm である。整地層はほぼ平坦であるが、緩やかに南に傾斜している。整地層の厚さは 30~60cm で、礫を含む黄褐色・褐色・暗褐色砂質土を 10cm 前後の厚さで積んでおり、固くしまっている。整地層上面からは土壌やピットを検出したが柱穴と認定できるものはない。

段の下半部には第 2 層が堆積している。第 2 層は厚さ 10~30cm の黒褐色土で、南側に向かうに従いグライ化し灰色味を帯びている。層中に炭化物・土師器・須恵器・須恵系土器の破片が含まれている。また、段の下で第 2 層に覆われた部分から、径 7cm・深さ 3cm のピットを検出したが、浅いことから土留めのしがらみに関わるものか否か、断定することはできなかった。

ま と め

今回の調査で、南端に段を設けた整地層を検出した。この整地層は調査区の北側に延びている。明確な柱穴はみつからなかったが、建物など何らかの施設に関わるものと考えられる。



層位と出土遺物(第53図)

- 第1層:水田および宅地造成の盛土。
- 第2層:暗褐色砂質土。下部は灰色味を帯びる。
- 第3層:青灰色砂質・粘土質土。
- 第4層:灰黒色粘土質土。
- 第5層:地山の粗砂層。

第1層は宅地造成の盛土とそれ以前の水田(水田土壤・畦・床土)で、第2~4層までが土師器・須恵器・須恵系土器・瓦の破片を含む古代の堆積層である。第1層は2.7mあり、その下に20~70cmの古代の堆積層が残っていた。古代の層の堆積面は西壁でみると、中央部がくぼんでおり、東西方向の溝状になっていることが発掘時に観察された(底面幅約1.2m)。発掘面積が狭いため単なる窪地か人為的な溝か断定できないが、古代のものであることは明らかである。

なお、第4層からは釘が出土している(第53図左上R1箱番号12257)。

まとめ

この地区は外郭南辺築地塀の南約100mに位置し、五万崎と坂下地区の間にに入る沢(谷)の出口付近に当たる。城外ではあるが、溝状のものが検出され、古代の遺物が出土した。平坦面であることから付近に何らかの施設が存在したと思われる。

高崎地区

1. 赤井武治宅の調査

位置:多賀城市高崎1丁目74番地の1 調査期間:平成5年7月22・23日

原因:堆肥置場の設置発掘調査 発掘調査面積:20m²

調査対象地区について(第54図)

赤井武治氏の堆肥置場設置に関わる発掘調査区は多賀城廃寺跡の僧房跡(大房)の西50mに位置している。調査区の西側40mまでは緩やかな平坦面が続くが、その西は斜面になっている。

発見された遺構と遺物(第55図)

発掘調査の結果、柱穴1・土壤4・土器埋設遺構1・溝・ピットなどが、第1層下の地山面で検出された。おもなものについて述べる。

SB2243柱穴

調査区北東隅で検出され、SD2247溝より古い。東西60cm・南北55cmの隅丸方形で、深さは41cmである。柱穴埋土は地山ブロックを多量に含む灰黄褐色粘土である。柱痕跡は径

18 cmで、黒褐色土に木炭・焼壁を含んでいる。この建物は火災で焼失したと見られる。今回は、焼壁の破片 13 点を取り上げたが、いずれもマス入りで・そのうち 1 点には壁面が小範囲ながら残存していた(1)。また、もう 1 点には壁下地痕が残っており、その断面は直径約 3 cm と推定される(2)。

SK2244 土壙

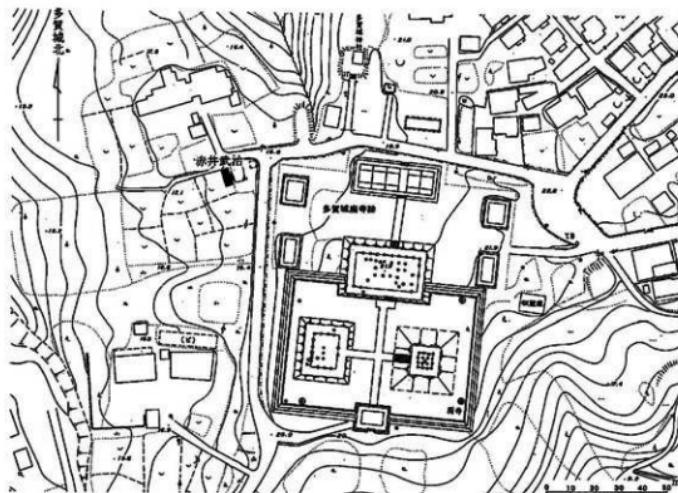
楕円形とみられる土壙の西側部分を検出した。東側は調査区外に延びる。東西 40 cm 以上、南北 1.0 m、深さ 25 cm である。堆積土は 2 層に分かれるが、いずれも黒褐色土で、木炭を含む。土師器甕、須恵系土器杯、政府第 1 期の軒平瓦 511 番(7)・平瓦 1C 類、第 II ~ III 期の平瓦 II B 類、第 IV 期の平瓦 II C 類などが出土している。政府第 IV 期以降に廃棄されたとみられる。

SK2245 土壙

隅丸長方形で、東西 1.6 m・南北 0.7 m・深さ 14 cm ある。土師器甕・甌、須恵器甕、須恵系土器杯、平瓦の破片などが出土している。

SK2246 土壙

隅丸長方形で、底は皿状をしている。東西 75 cm・南北 50 cm・深さ 10 cm である。土壙の

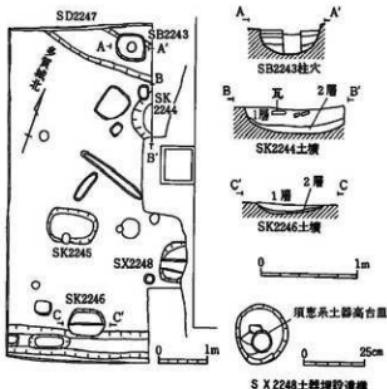


第 54 図 多賀城廃寺跡発掘調査区

底に炭・焼土・灰混じりの黒褐色土(2層)、その上に地山ブロックを斑状に含む褐色土が堆積していた(1層)。土師器の破片が1点出土した。

SD2247 溝

幅70cm・深さ約10cmの東西溝で、SB2243柱穴より新しい。土師器杯・婆、須恵系土器



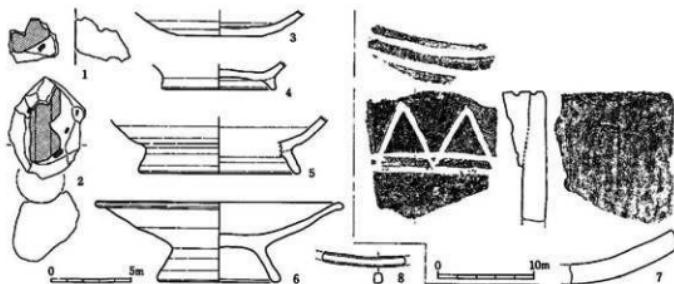
杯・高台杯、政庁第1~IV期の平瓦、焼壁などが出土している。

SX2248 土器埋設遺構

南北25cm・東西22cmのほぼ円形の掘方に、須恵系土器の高台皿を逆位に埋設したものである(6)。埋土は黒褐色土である。

まとめ

1. B2243柱穴は北および東側に展開する建物跡で、土壁を伴い、火災にあったものとみられる。多賀城廃寺は講堂が火災に高台皿あっており、宝相花文軒丸瓦(425)が出土している。この火災と一緒にものと



番号	遺 墓	種類	性 質	器種	特	登録	路番号
1	SB2243	焼壁	破片	柱脚出土。粗土で、スサ入り(裏の断片)。裏面残存(23×20cmの範囲)。		R1	12255
2	SB2243	焼壁	破片	柱脚出土。粗土で、スサ入り(裏の断片)。壁下地骨骼有り(推定厚3cm)。		R2	12255
3	SB2247	須恵系土器	片	円輪系切り、内・外面薄らかなクロコナギ。断土・褐色、疊砂含むが均質。底径5.3cm。		R4	12255
4	SB2247	須恵系土器	高台杯	内面:滑ロコナギ。外側:粗粒のロコロ目。断土:褐色。均質。高台径7.2cm。		R6	12255
5	SB2247	須恵系土器	高台杯	内面:滑ロコナギ。外側:粗粒のロコロ目。断土:褐色。堆疊味、均質。高台径10cm。		R5	12255
6	SX2248	須恵系土器	高台	内外面:滑ロコナギ。断土:褐色。砂粒含み均質。口径15.6cm、高台径7.6cm、器高5cm。		R3	12255
7	SK2244	斜平瓦	511 番	手筋き二重弧文、腹面:滑文と波綻文。地成:硬質(褐色)。断土:砂粒含むが均質。		R7	12255
8	SK2245	鉄釘	破片	上・下頭破損。断面方形(幅6mm、厚さ5mm)。残存長5.2cm。		R8	12257

第55図 赤井武治宅の遺構と出土遺物

すれば貞觀 11(869)年以降と考えられる。

2. この他の遺構は、須恵系土器や政庁第 IV 期の瓦が出土しているものが多い。それらは政庁第 IV 期(869 年)以降のものとみられる。

現状変更に伴う調査のまとめ

当研究所では、多賀城跡の解明を目的に計画的な発掘調査を実施し、その成果に基づいて環境整備を行い、史跡の活用を図ってきた。一方、史跡内の住民からは、住宅の老朽化に伴う増改築、浄化槽設置などの現状変更申請も出されている。当研究所では、申請が許可されたものについて発掘調査を行い、計画変更などを含め遺構保存に努めてきた。

史跡内の住宅地域については、これまで計画的な発掘調査を実施してこなかったため、遺構の内容や保存状況に不明確な点があった。結果的ではあるが、その内容の把握に一定の成果がえられたことになる。それらをまとめると、次のようになる。

1. 発掘調査を実施したものの多くは、保存管理計画の A2 整備活用地区に属し、住宅地となっている場所である。発掘調査の結果、古代の遺構や堆積層が残っていたのは 10 件中 7 件で、残存率の高いことが判明した。
2. その中で、政庁跡北西の佐藤長工門宅の調査では、建物跡とともに施釉陶器や窯が出土した。それらのなかには香炉(緑釉陶器)や、金泥のための転用窯(灰釉陶器)も含まれ、この地区が重要な場所であったことを示している。
3. 五万崎地区の菊池光信・高橋重雄・後藤学・三神実宅は、丘陵根の緩斜面から沖積地に位置し、整地層や建物跡などが検出された。丘陵平坦面以外にも官衙を構成する建物群の存在することが明確になった。

参考文献

- 伊東信雄他(1970. 10)：「多賀城廃寺跡」「多賀城跡調査報告」IP. 1～118 図面・図版
仙台市教育委員会(1987. 3)：「五本松塚跡」「仙台市文化財調査報告書」第 99 集 P. 1～203
多賀城市(1988. 3)：『特別史跡多賀城跡附守跡第 2 次保存管理計画書』P. 50～52
樋崎彰一(1978. 3)：「初期中世陶における三筋文の系譜」『名古屋大学文学部研究論集』P. 1～47
樋崎彰一他(1981～3. 3)：『愛知県古窯跡群分布調査報告』(1～m)付猿投窯の編年について
前川要(1984. 3)：「猿投窯における灰釉陶器生産末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』III P. 1～115
前川要(1989. 3)：「平安時代における日本出土施釉陶磁器研究の現状と課題」『歴史時代土器研究』第 5・6 号 P. 1～26
宮城県教育委員会(1987. 3)：「礎沢・大沢塚跡」「宮城県文化財調査報告書」第 116 集 P. 1～289
宮城県多賀城跡調査研究所(1992. 3)：『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991P. 95～140
宮城県多賀城跡調査研究所(1993. 3)：『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1992P. 3～71, 89～108

V. 付 章

1. 関連研究・普及活動

平成 5 年度は多賀城跡の発掘調査の他に、以下の関連研究や普及活動を行った。

(1) 多賀城関連遺跡の発掘調査

当研究所では多賀城に関連する古代遺跡について、計画的な調査・研究を実施している。本年度は第 4 次 5 カ年計画の 5 年目にあたり、宮城県志田郡三本木町伊場野字坂ノ森と松山町下伊場野字山岸に跨る下伊場野窯跡群 A 地点の発掘調査を 6 月 22 日～9 月 11 日に実施した。発掘調査面積は約 600 m²である。発掘調査にあたっては、三本木町・松山町教育委員会・古窯跡研究会・仙台育英学園高等学校考古学研究部の協力を得た。

発掘調査の結果、地下式窯窓 3 基と竪穴住居跡 1 軒を検出した。第 1・2 号窓は瓦を主体に、第 3 号窓では須恵器も併焼していた。軒丸瓦の瓦当文様は八葉の重弁蓮華文で、多賀城の 116 と同范のものと、114 と酷似するものがある。軒平瓦の瓦当文様は手描き二重弧文である。平瓦は粘土板桶巻き作りで、分割後凸型台で叩き調整(矢羽根・平行・格子状)している。文字瓦には丸瓦に「小田郡口子部建万呂」とヘラ書きしたものと、平瓦の凸型台に陽刻した「今」・「下今」・「常」の圧痕がある。須恵器には壺・高台壺・蓋・壺・甕などがある。壺は体下～底部を回転ヘラ削り調整している。蓋のつまみはリング状である。

このような特徴から本窯跡群は多賀城創建期の中でも最も古い様相をもつとみられる。また、平瓦調整台に陽刻された文字圧痕や叩き技法は日の出山窯跡群と共に、本窯跡群・日の出山窯跡群という工人の流れも想定される。この他、「小田郡口子部建万呂」の文字瓦によって、多賀城跡出土鬼板にみられる「小田建万呂」や多賀城廃寺跡の「コ丸子部建万呂」が同一人物である可能性が高くなった。

なお、今年度は本窯跡群の地形図(1/500、1/1,000)とともに、鳴瀬町亀岡遺跡の地形図(1/1,000)も作成した。総事業費は 14,000 千円(50%国庫補助)である。

(2) 多賀城跡の環境整備

平成 5 年度の環境整備事業は第 5 次 5 カ年計画の 4 年目にあたり、総事業費 35,000 千円(50%国庫補助)で実施した。対象地区は外郭東門・大畠地区東側北半部である。整備内容は、①奈良時代の外郭東門跡及び道路跡、②平安時代の道路跡、③奈良時代の掘立式建物跡、④説明板、⑤誘導標識、⑥張芝である。整備面積は 2,500 m²ある。

①の外郭東門跡については、礎石上に、高さ 60cm の丹塗り柱を立て、木口を銅板で押さええた。また、唐居敷・方立・白壁を表示した。石組溝の敷瓦はできるかぎり古代の製作技法を用い、当時のものに近づけた。道路跡についてはショットイン舗装で表示した。

- ②の平安時代の道路跡については、これまでの整備にあわせ、プラス敷きで表示した。
③の奈良時代の掘立式建物跡は、柱を白木、身舎柱を 60cm、床百の柱を 30cm の高さとした。平面については建物の周りを三和土、内部をシュタイン舗装で表示した。
④の説明板は、「奈良時代の東門の変遷」・「掘立式建物の建て方」「平安時代の東門」の 3 基を設置した。
⑤の誘導標識は南端と北端に各 2 基を設置し、⑥の張芝は対象地のほぼ全域である。

(3) 遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡で検出した建物跡などの諸遺構を保存・展示・活用することを目的として、他遺跡における類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は遺構調査研究事業の第 4 次 5 カ年計画の 1 年目として、国府の中で調査が進んでいる美作国府跡(岡山県)、門・築地堀跡の調査と立体復元の行われている志波城跡(盛岡市)の発掘・復元データを収集した(県単独事業)。

(4) 発掘調査等のデータベース化事業

多賀城跡等の発掘調査・環境整備事業でこれまで蓄積してきた遺構・遺物などの資料(実測図・写真・文献資料を含む)をパソコンで整理して、データベース化を図ることを目的にしている。これによって、今後の発掘調査・環境整備事業および般への公開に役立てようとするものである。継続事業で 5 カ年計画の 4 年目にあたる(県単独事業)。

(5) 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。

「多賀城跡第 64 次調査」平成 5 年 11 月 20 日説明者丹羽茂・柳沢和明

「下伊場野窯跡群の調査」平成 5 年 8 月 28 日説明者進藤秋輝・真山悟・佐藤和彦

(6) 他機関への発掘調査協力

東山遺跡第 8 次調査:宮城県加美郡宮崎町教育委員会主体事業

宮崎町の専門職員が病気で休職したため、当研究所が調査を代行した。目的は外郭南門の検出で、調査期間は 10 月 18 日～11 月 4 日である。調査地点は遺跡の南半を東西に二分する沢の入り口付近である。調査の結果、平安時代の整地層下で掘立式八脚門跡を発見した。検出した柱穴は南側柱 4 個、棟通り中央間の 2 個で、推定される規模は桁行総長 8-4m、柱間は中央間が 3.6m、両脇間が 2.4m である。梁行の柱間は 3.3m の等間とみられる。

(7) 学会・研究発表・論文など

今年度は当研究所が世話役となって「第 20 回古代城柵官衙遺跡検討会」を多賀城市文化センターを会場にして、平成 6 年 2 月 26・27 日に開催した。第 1 日は平成 5 年度の調査成果報告・第 2 日は「古代地方都市の成立とその様相—多賀城外の方格地割りについて—」

と題するシンポジウムである。参加者は北海道から九州まで300名以上であった。

また、今年度の研究発表・論文は次の通りである。

丹羽茂・柳沢和明「多賀城跡第64次調査」宮城県遺跡調査発表会 平成5年12月

真山悟・佐藤和彦「松山町下伊場野窯跡群の調査」 " "

真山悟・佐藤和彦「下伊場野窯跡群」第20回古代城柵官衙遺跡検討会 平成6年2月

丹羽茂「多賀城跡」 " "

柳沢和明「宮城県内の官衙の終末」第3回東日本埋蔵文化財研究会 平成6年3月

(8) 講演など

進藤秋輝「宮城の歴史」 宮城県公務研修所 平成5年4・8月

千葉景一「近世の村のくらし」 三本木町教育委員会 平成5年4月

丹羽茂「多賀城跡の発掘」 多賀城の史跡を歩く会 平成5年6月

佐藤和彦「律令国家と征夷大將軍」 河北地区文化財研修会 平成5年7月

真山悟「古代陸奥の城柵・官衙」 " 平成5年8月

進藤秋輝「住居の変遷」 仙台市旭ヶ丘市民センター 平成5年9月

進藤秋輝「多賀城の造営と森林伐採」 " "

進藤秋輝「特別史跡多賀城について」 宮城県教育研修センター "

千葉景一「陸奥の国の国府多賀城について」 故美公民館 平成5年10月

進藤秋輝「城柵官衙遺跡の調査」 奈良国立文化財研究所埋文センター 平成5年11月

進藤秋輝「古代の東北一陸奥国府と出羽国府の諸問題」 鶴岡市中央公民館 平成5年11月

進藤秋輝「東北の古代城柵」 愛知県埋蔵文化財センター 平成5年11月

(9) その他

千葉景一 史跡志波城跡保存整備委員・わくや万葉里づくり整備委員・多賀城市文化財保護委員・郡山遺跡発掘調査指導委員

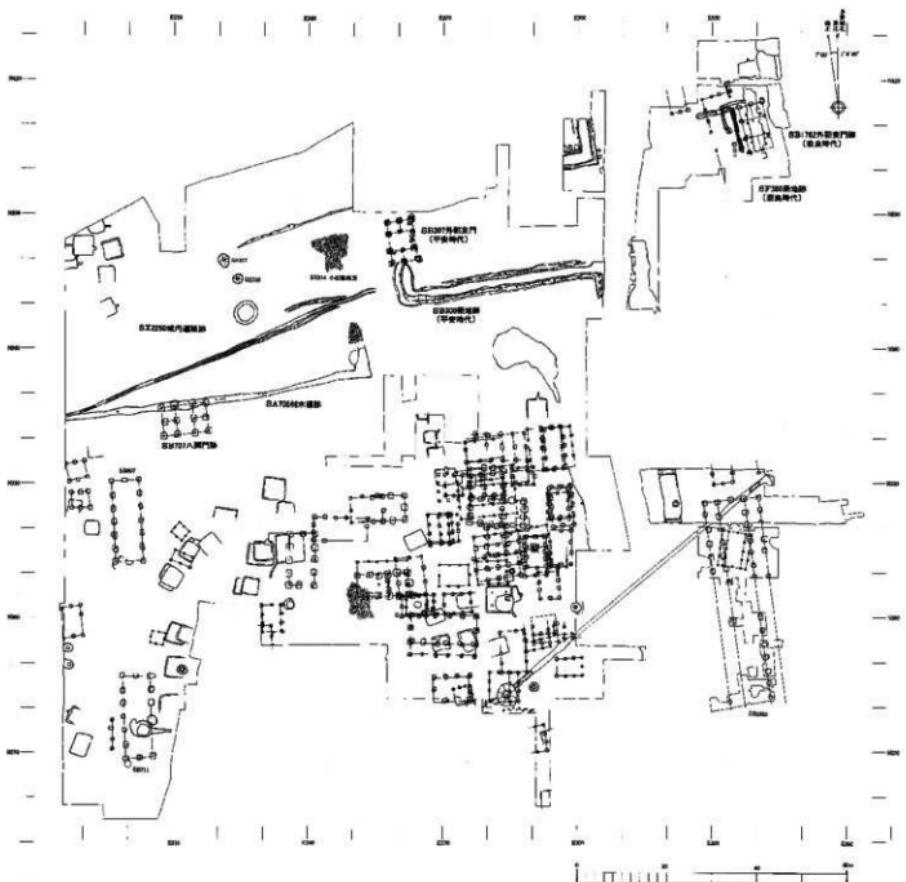
進藤秋輝 秋田城跡環境整備指導委員・払田柵跡環境整備審議委員・胆沢城跡保存管理計画策定委員・名生館官衙遺跡発掘調査指導委員・名生館官衙遺跡環境整備指導委員・わくや万葉里づくり整備委員・石巻市史執筆委員・根岸遺跡調査指導委員・閑和久上町発掘調査指導委員・大戸窯跡群調査指導委員

丹羽茂 名生館官衙遺跡発掘調査指導委員

2 研究成果刊行物

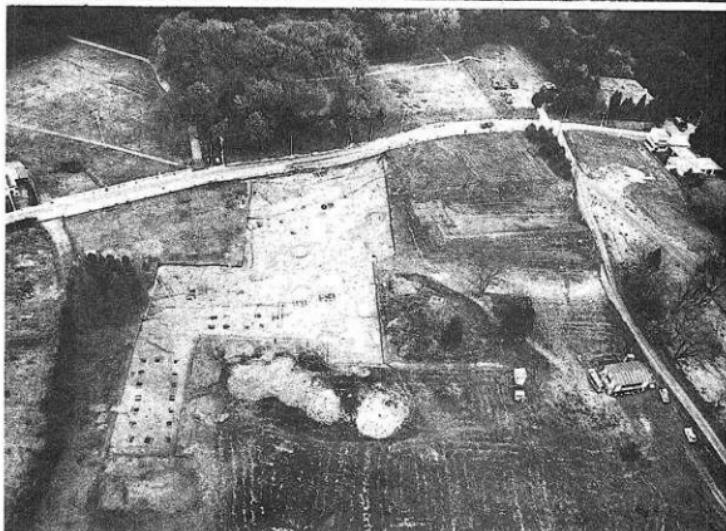
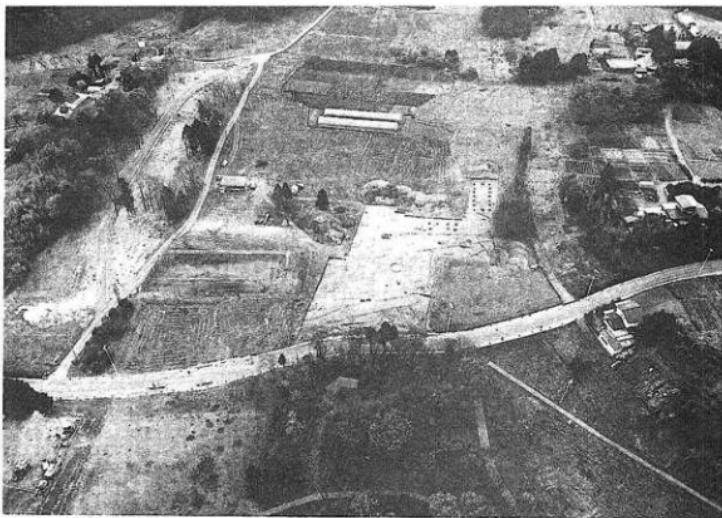
(1)『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1993 平成6年3月

(2)『下伊場野窯跡群』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第19冊 平成6年3月



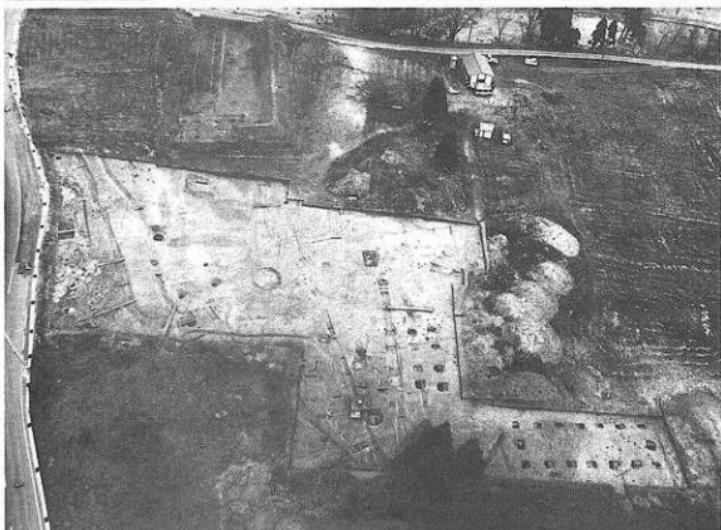
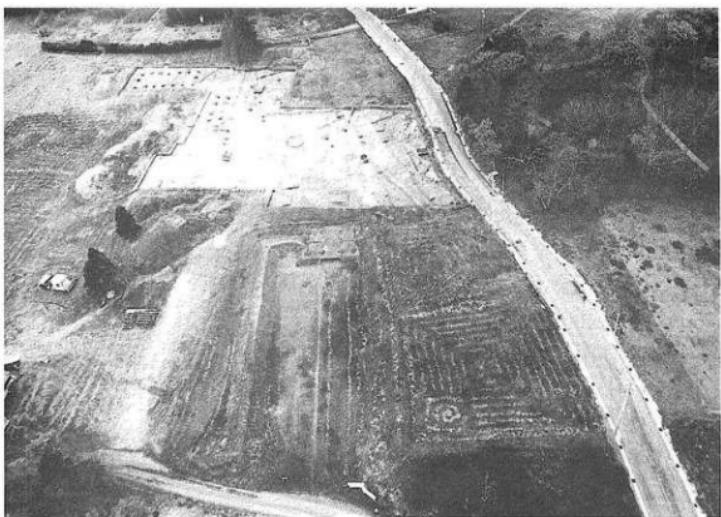
付図 外郭東門・大畠地区北東部の主要遺構

写真図版
1993(64 次)



図版1 上：外郭東門跡・大烟地区遠景（北上空から）

下：外郭東門跡・築地壠跡と第64字調査区（南上空から）



図版2 SB307 外郭東門跡・SF300 築地塹跡と第64次調査区

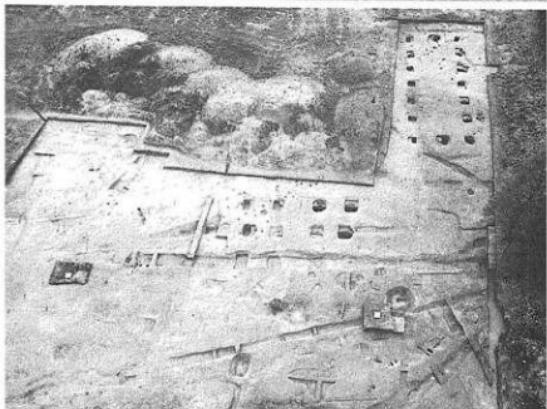
上：東上空から 下：西上空から

図版 3

SB307 外郭東門跡と
第 64 次調査区北半部
(南西から)
SB707 八脚門跡 (中央)
SA706 材木堀跡 (中央)
SX2250 城内道路跡 (左上)

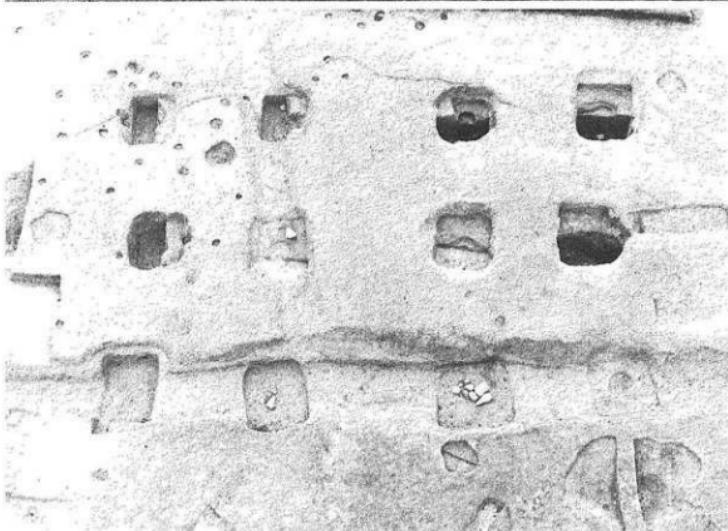


第 64 次調査区南半部
(北上空から)
SB707 八脚門跡 (中央)
SB807 南北棟建物跡 (右上)
SA706 材木堀跡 (中央)
SD2249 道路跡南側溝 (下)



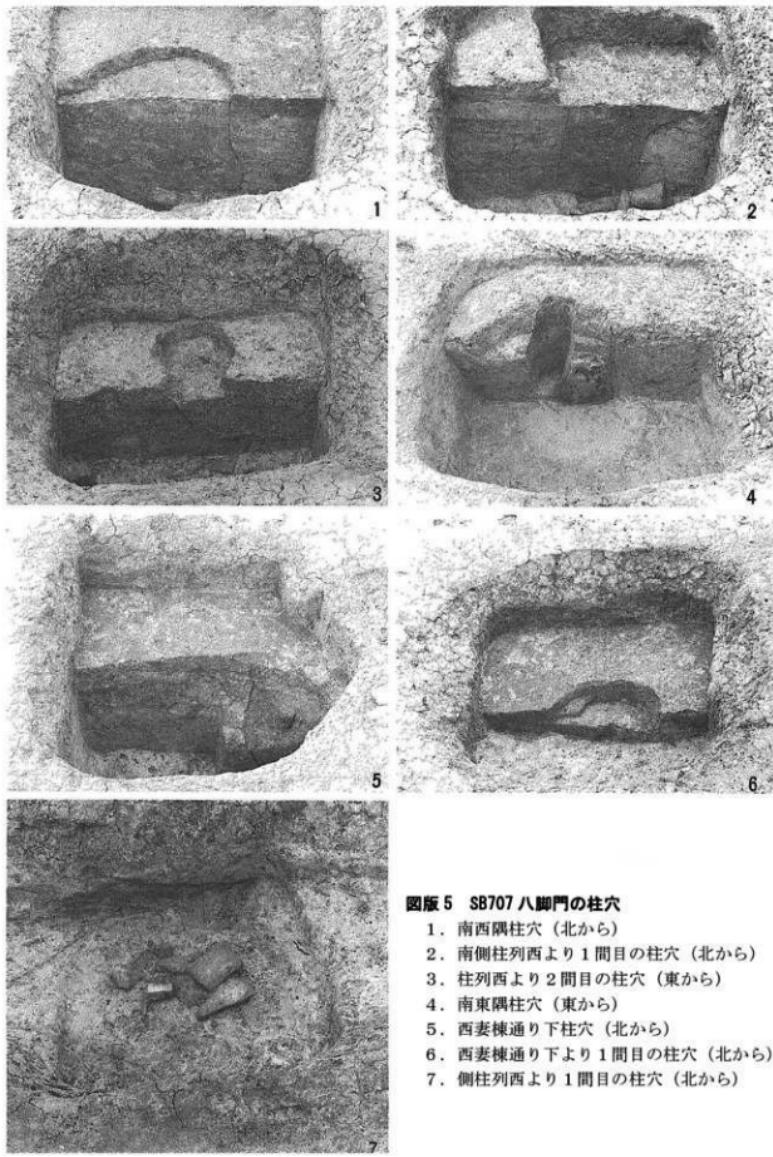
第 64 次調査区南半部
(東から)
SB707 八脚門 (中央)
SA706 材木堀跡 (中央)
SD2249 道路跡南側溝 (右)





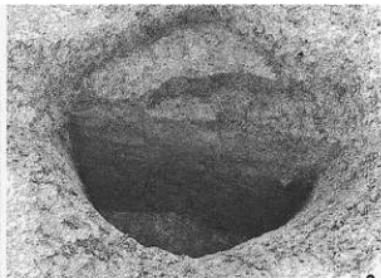
図版4 上：SB707 八脚門跡と SB807 建物跡（北から）

下：SB707 八脚門跡全景



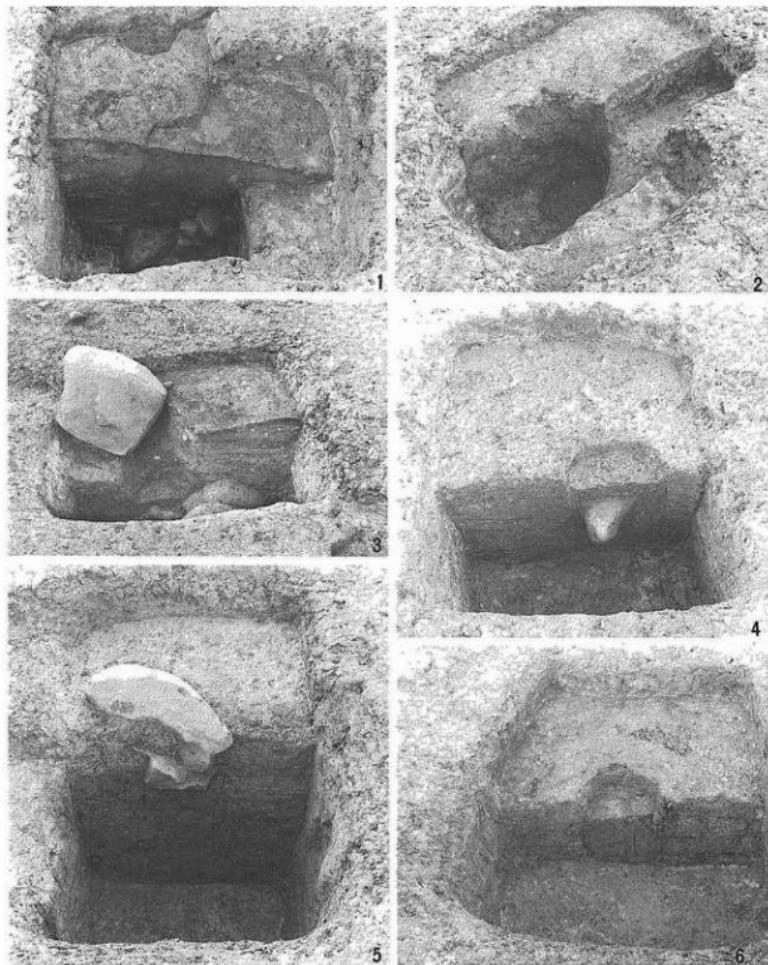
図版5 SB707 八脚門の柱穴

1. 南西隅柱穴（北から）
2. 南側柱列西より 1 間目の柱穴（北から）
3. 柱列西より 2 間目の柱穴（東から）
4. 南東隅柱穴（東から）
5. 西妻棟通り下柱穴（北から）
6. 西妻棟通り下より 1 間目の柱穴（北から）
7. 側柱列西より 1 間目の柱穴（北から）



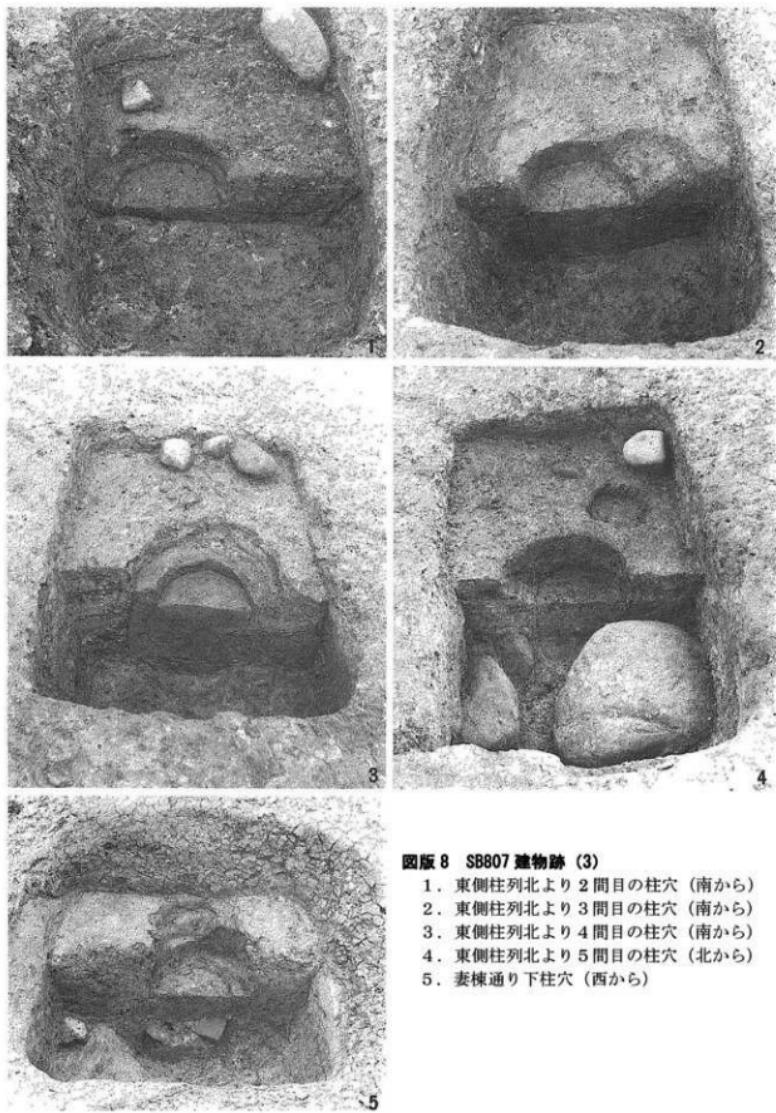
図版6 SB807 建物跡 (1)

1. 全景 (南から)
2. 北西隅柱穴 (北東から)
3. 西側柱列北より 1間目柱穴の瓦出土状態
4. 西側柱列北より 1間目の柱穴 (北から)
5. 西側柱列北より 2間目の柱穴 (北から)
6. 西側柱列北より 3間目の柱穴 (南から)



図版 7 SB807 建物跡 (2)

1. 西側柱列北より 4 間目の柱穴 (北から)
2. 西側柱列北より 5 間目の柱穴 (北西から)
3. 南西隅柱穴 (東から)
4. 北東隅柱穴 (東から)
5. 北妻棟通り下柱穴 (東から)
6. 東側柱列北より 1 間目の柱穴 (南から)



図版8 SB807 建物跡(3)

1. 東側柱列北より2間目の柱穴（南から）
2. 東側柱列北より3間目の柱穴（南から）
3. 東側柱列北より4間目の柱穴（南から）
4. 東側柱列北より5間目の柱穴（北から）
5. 妻棟通り下柱穴（西から）



図版9 上：SA706 材木塀跡の丸材痕と抜取溝（東から）

下：SK345 大土壤とそれより新しいSD2249 道路跡南側溝（東から）

図版 10

SD2149A・B 溝（SX2250 城内
道路跡南側溝）の重複状況
(東から)



SB307 外郭東門・SF300 築地跡
と SX314 小石敷路面
(西から)



SX314 小石敷路面
(西から)



図版 11

SX314 小石敷路面

(東から)



SB307 外郭東門・SF300 築地跡

と SD315 環状溝（右手前）、

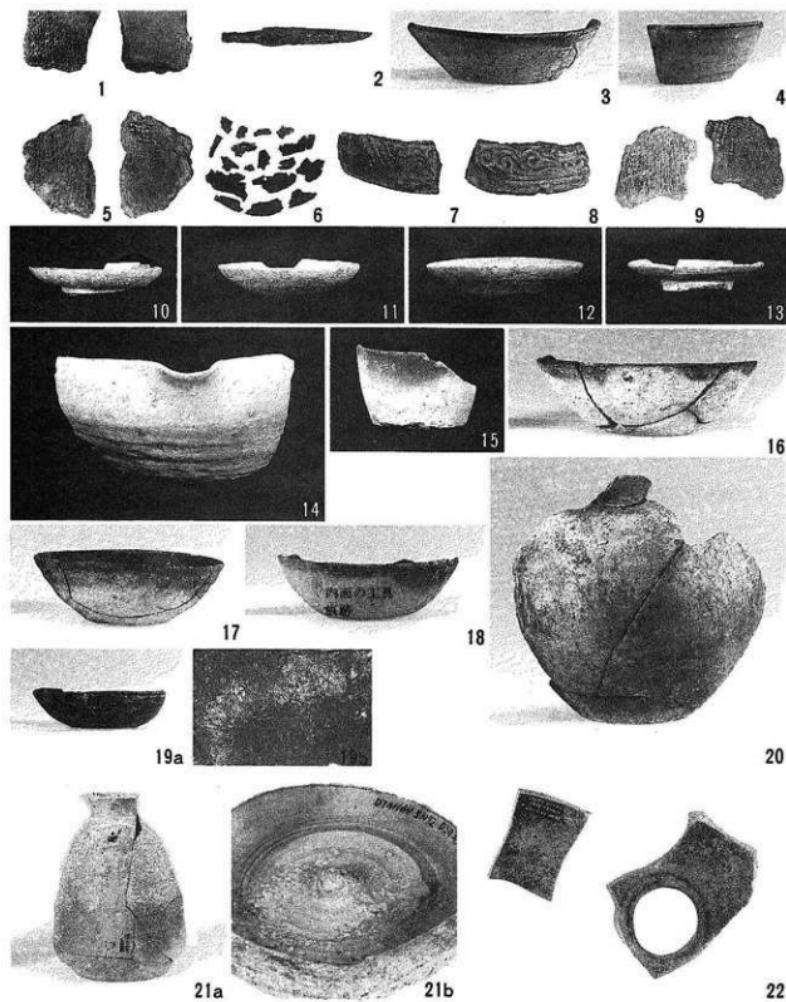
SE316・317 井戸跡

(左手前)



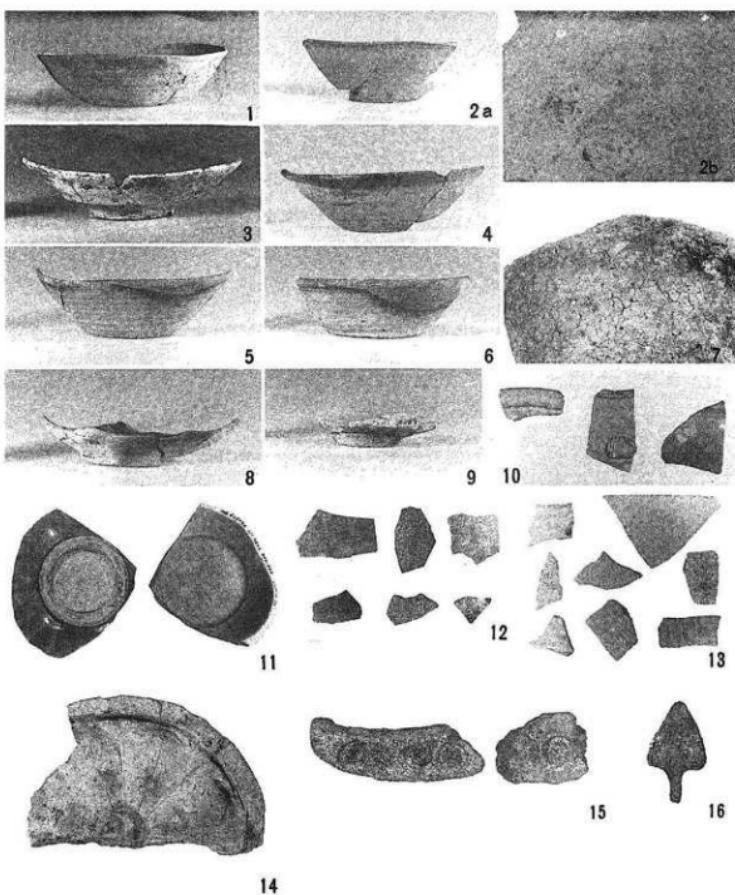
SD704 溝（南から）





图版 12 第 64 次调查出土遗物 (1)

1・2: SB807 建物跡 3・4: SA706 材木痕跡 5・6: SD2249B 溝 7~9: SX314 小石敷路面
 10・14・15: SE316 井戸跡 11~13: SE317 井戸跡 16~21: SD704 溝 22: SK345 大土壙
 1・5・9: 平瓦 II C 類 2: 刀子 3・4: 須恵器壺 6: 漆器皮膜 7・8: 軒平瓦 721B
 10~12: 須恵器系土器小皿 13: 須志系土器高台皿 14: 須恵器系土器片口鉢 15~19: 土器壺
 20: 土器壺甕 21: 須恵器把手付小瓶 22: 灰釉陶器壺



図版 13 第 64 次調査出土遺物 (2)

1・2: SK345 大土壙 3: SK2254 4: SK2252 5・6: SK2253 7・8・16: 第 3 層

9・15: 第 2 層 10~14: 第 1 層

1・2・4~6: 須恵器坏 8: 土師器碗 7: 粗底のある須恵系土器小皿 9: 須恵系土器高台皿

10: 白磁碗・瓶 11: 龍泉窯系青磁碗 12: 中世陶器甕 (常滑) 13: 中世陶器甕 (渥美)

14: 八葉重弁蓮花文軒丸瓦 15: 連珠文軒平瓦 831 16: 鉄鎌

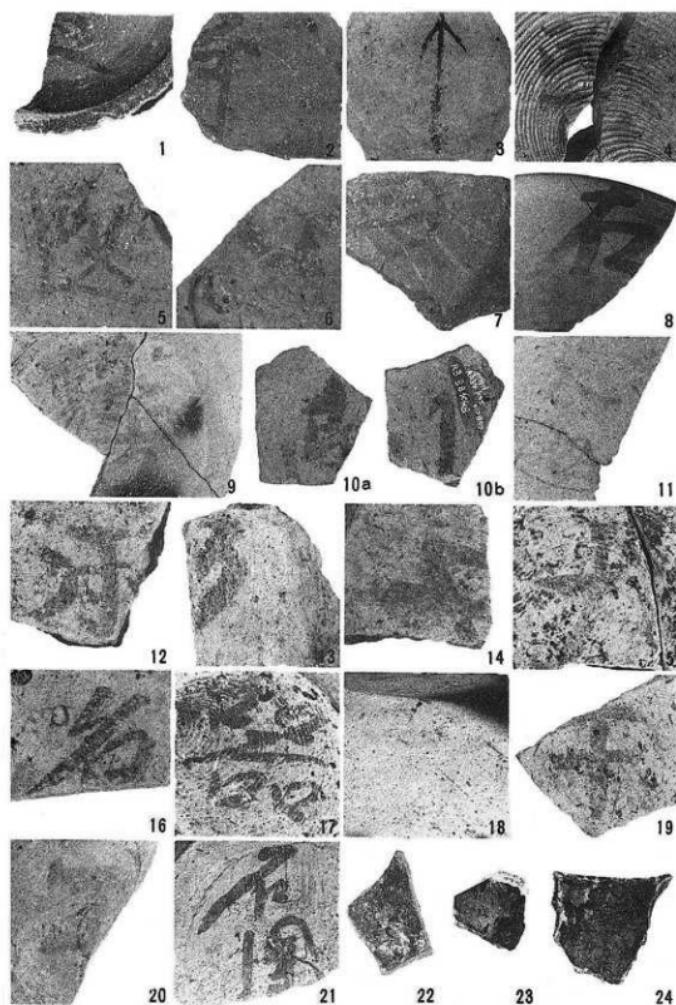
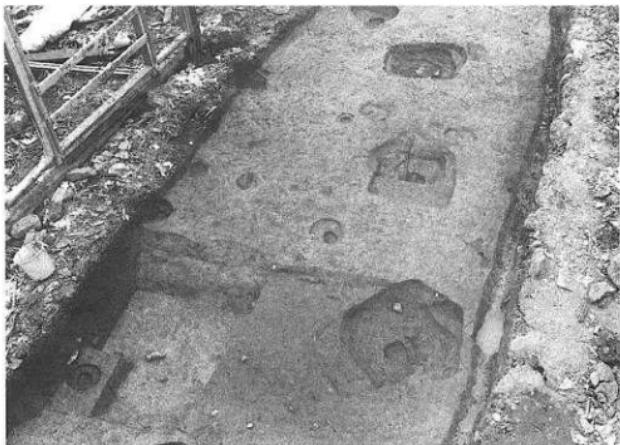


図14 第60次調査出土土器

- 1・2・4~17・19・21:墨書 3:漆描記号 18:釘書 22~24:漆容器
 4:「政口(所カ)」 5・10a:「造」 8:「右」 9:「生万」 11:「火口」 12:「厨」
 13:「口(万カ)」 15:「口(大カ)」 16:「口(名カ)」 17:「器」 18:「本」
 19:「口(午カ)」 20:「午」 21:「石口(團カ)」 1・2・6・7・10b・14:不明墨書

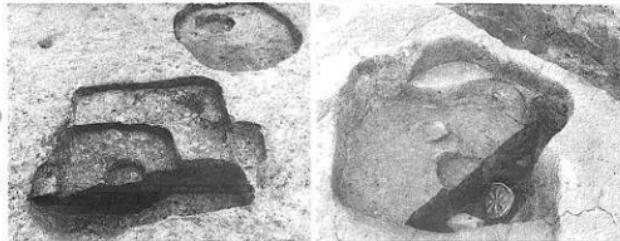
調査区西側の遺構
(東から B7321)
SB2222・2223 建物跡
SD2227 溝



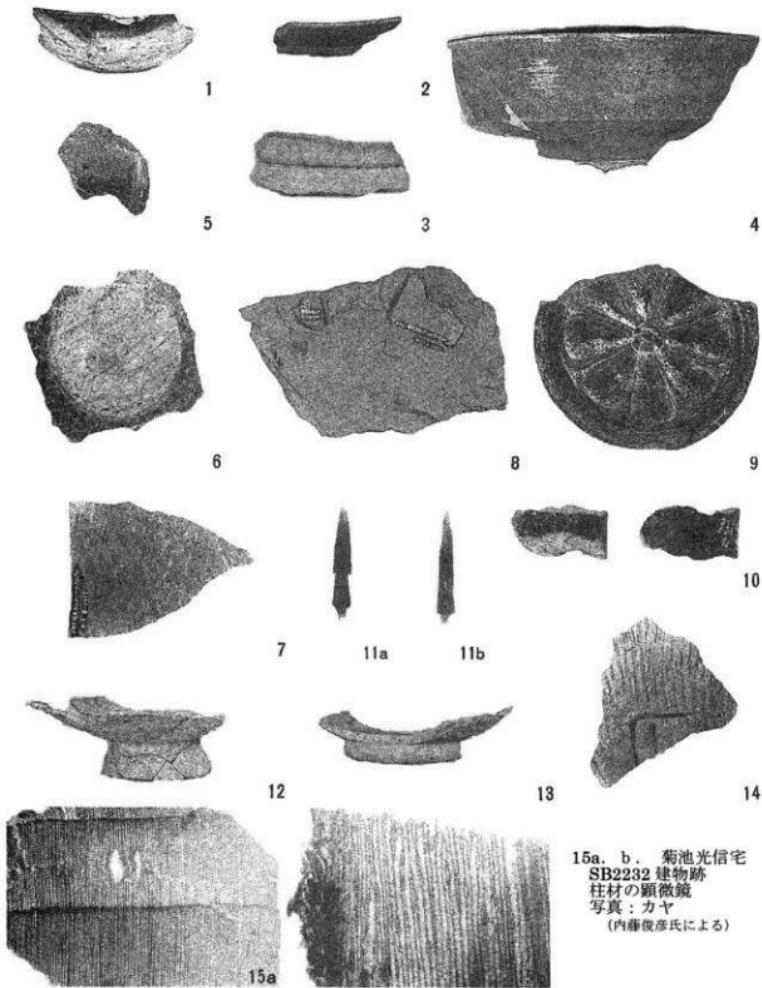
調査区東側の遺構
(南から B7327)
SB2224・2225 建物跡
SA2226 柱穴・小溝群



SB2222 建物跡・柱穴
左 東から 3間目
(西から B7326)
右 南東隅
(北東から B7324)



図版 15
現状変更に伴う調査
(佐藤長右エ門宅)



図版 16 現状変更に伴う調査出土遺物

- 1~11: 佐藤長右工門 12: 赤井武治 13・14: 菊池光信宅出土遺物
 1: 土師器坏 (第 44 図 1 B7753) 2: 須恵系土器高台皿 (第 44 図 8 B7750) 3: 緑釉陶器香炉 (第 44 図 9 B7742)
 4: 緑釉陶器碗 (第 44 図 10 B7751) 5: 風字砚 (第 44 図 12 B7743) 6: 灰釉陶器碗の転用砚 (第 44 図 13 B7752)
 7: 須恵器甕の転用砚 (第 43 図 8 B7740) 8: 須恵器甕の転用砚 (第 44 図 14 B7744) 9: 軒丸瓦 431 (第 43 図 5 B7762)
 10: 平瓦 II B類 (第 43 図 6 B7762) 11: 鉄鏃 (第 43 図 12 保 80 3 40) 12: 須恵系土器高台皿 (第 55 図 6 B7760)
 13: 灰釉陶器碗 (第 49 図 4 B7755) 14: 須恵器甕へラ書文字 (第 49 図 3 B7761)

15a, b. 菊池光信宅
SB2232 建物跡
柱材の顕微鏡
写真: カヤ
(内藤俊彦氏による)

宮城県多賀城跡調査研究所年報 1993
多 賀 城 跡

平成6年3月25日印刷
平成6年3月31日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前133
TEL (022) 368-0101
印刷所 小泉印刷株式会社
